

スリランカ民主社会主義共和国  
財務計画省対外援助局（ERD）

# スリランカ国 人材育成奨学計画

## 準備調査報告書

平成 26 年 3 月  
(2014 年)

独立行政法人  
国際協力機構（JICA）

株式会社日本開発サービス（JDS）

資金
CR (1)
14-004

## 要 約

### 1. 協力準備調査と支援業務の概要

#### (1) 協力準備調査・支援業務の背景と目的

人材育成支援無償事業（The Japanese Grant Aid for Human Resource Development Scholarship Program）（以下、「JDS事業」という）は、途上国の社会・経済開発政策の立案や実施において、将来中心となることが期待されている若手人材の育成を目的とした無償資金協力による留学生受入事業であり、1999年度より開始された。JDS事業では、実施年数6年間（初年度の受入れから4期目留学生の帰国まで）にわたり、同一の対象分野・募集対象機関・受入大学の下で留学生を受け入れることとしている。対象国はアジアの市場経済移行国を中心とする諸国とガーナであり、留学生人数は2013年度には203名の留学生を12か国より受け入れている。

2013年度は現在実施中のスリランカJDS事業における4か年計画の最後の年にあたり、我が国政府は、スリランカ政府から新たなJDS事業の計画策定についての要請を受けて、協力準備調査団を派遣することにした。同調査では2014年度から開始される4期分のJDS事業の計画を策定することとなる。

#### (2) 協力準備調査・支援業務の結果

2013年9月9日から14日まで、東京よりスリランカJDS事業に係る協力準備調査団が派遣され、コンサルタントもその一員として参加した。調査の目的は、①JDS事業と実施体制等の説明及び協力準備調査の目的や方法についてスリランカ政府に説明し理解を得る、②JDS事業で対象となるサブプログラム、コンポーネント、募集対象機関、留学生受け入れ人数、受入大学等について協議し合意する、③募集選考スケジュールについて説明し、募集選考方法や資格要件について協議し合意する、の3点であった。

協議において合意された具体的な受入計画は以下のとおり。

合意された受入計画概要

サブ・プログラム	経済成長基盤整備のための人材育成			
コンポーネント	公共政策・財政	開発経済	ビジネス環境整備	環境配慮・防災
大学・研究科	政策研究大学院大学 政策研究科	広島大学大学院 国際協力研究科	国際大学 国際経営学研究科	筑波大学 生命環境科学研究科
取得学位名称	Master of Public Policy or Master of Public Administration (12ヵ月) Master of Arts in Public Policy (24ヵ月)	Master of Arts Master of Science Master of International Cooperation Studies	Master of Business Administration	Master's in Environmental Sciences
受入人数枠	8名 (2名×4バッチ)	12名 (3名×4バッチ)	8名 (2名×4バッチ)	8名 (2名×4バッチ)
大学・研究科	一橋大学 国際・公共政策大学院	/	早稲田大学 商学研究科	東京大学大学院 工学系研究科
取得学位名称	Master of Public Policy (Public Economics)		Master of Business Administration	Master of Engineering
受入人数枠	8名 (2名×4バッチ)		8名 (2名×4バッチ)	8名 (2名×4バッチ)
想定研究テーマ	Fiscal Policy Social Policy International Development Public Administration	Economic Development Macroeconomics Development Policy	Business Administration SME Support Investment Improvement Industrial Development	Environment Management Environmental Policy Environmental Management Environmental Study Disaster Management Regional Disaster Prevention Disaster Management Policy Disaster Risk Management Disaster Science
対象者	全省庁All Island Service職員			全省庁職員
主管官庁	財務計画省対外援助局 (ERD: Department of External Resources, Ministry of Finance and Planning)			

二:

## 2. 妥当性の検証

①スリランカ国国家開発戦略と我が国の対スリランカ援助方針におけるJDS事業対象分野／開発課題の位置づけ、②分野（公共政策・財政、開発経済、ビジネス環境整備）の選択についての適切性、③対象機関の人材育成ニーズから見た妥当性、の3つの観点よりスリランカJDS事業の妥当性を検証した。その結果、JDS事業を同国で実施することは妥当性が高いと判断された。

同事業が目指す政策・立案に係る若手行政官個人、及び行政官が所属する対象機関の組織の能力向上は、スリランカの上位計画とも整合し、我が国の援助重点分野とも合致するものであり、従って妥当性は極めて高い。分野の選択については、JDS事業を通じ、スリランカの若手官僚とその所属する関連機関の育成を支援することにより、同国政府の適切な公共政策、財務政策、経済政策の策定・実施能力の向上に資する。また、JDS事業により、民間セクターが活動できる環境整備、グローバル経済に対応し得る人材育成にも貢献すると考えられる。さらに、我が国の援助重点分野である「気候変動・防災対策」に関する人材育成が期待される。

## 3. JDS事業の事業規模設計

受入計画に基づき、1バッチ分の事業費の積算を行った。その際以下を前提とした。

項目	前提
積算条件	・ 積算時点：2013年10月 ・ 為替レート：1ドル=98.94円、1ルピー=0.758円
実施経費	・ 2014年度来日留学生につき、7受入大学15名として出願・検定料、入学料、授業料、奨学金の積算を行った。 ・ 2014年度来日留学生について大学入試のための出願検定料について積算した。 ・ 特別プログラム経費につき、留学生1人あたり年間50万円（来日年、帰国年は半額）で積算した。
役務経費 （スリランカ）	・ 来日前オリエンテーションにつき、5日間程度の実施を想定して見積もった。 ・ JDS事業の事務所についてはERDに提供を依頼しているものの、提供されるかは未定であるため、積算に計上とした。 ・ 2014年度来日留学生についての募集・選考経費を計上した。 ・ スリランカにおけるインフレ率を考慮し、積算に反映。
役務経費 （日本）	・ 留学生来日時期を2014年8月下旬とした。 ・ 留学生は、来日後5日間程度東京でオリエンテーションを受講後、それぞれの大学に移動する予定とした。 ・ 留学生の帰国時期を、受け入れ大学の卒業式実施月に合わせた。
実施代理機関人件費	・ 1カ月の一人あたりの稼働日数を海外30日、国内20日として積算した。

## 4. 提言

### (1) 募集活動について

#### 1) 広報方法について

新聞、ポスター、リーフレット等による募集説明会に関する情報の流布も試みたが、募集説明会の参加者に行ったアンケート結果によると、財務計画省対外援助局（ERD: Department of External Resources, Ministry of Finance and Planning）から各省庁に出された

案内状をもとに募集説明会の情報を得たとの回答が最も多かった。そのため、スリランカ政府内で通常行われているERDからの案内状を基に説明会への参加希望者が所属省庁を通じて申し込む方法を今年以降も継続した方が良いと考える。余裕をもって地方の関係機関に連絡が届くように、開催予定日の1か月以上前に日程、場所、会場の詳細を詰めて、ERDに対して依頼状が出せるようにしたい。地方の広報セミナーにその地方のDistrict Secretaryを招待したのは良い機会となった。また、帰国留学生によるプレゼンテーションは、実際の留学生生活をイメージしやすくなる。さらに帰国留学生は応募者にとって日本での留学生活を知る上での貴重なメンター的存在となるので来年以降もその参加が望まれる。

## 2) 数学試験について

コンサルタントによる10月の各大学訪問において、当初数学試験受験を希望していなかった大学についても数学の試験は必要との見解であり、結局7受入大学全ての応募者が数学を受験することとなった。このためこれらの大学希望者に対しては、コンサルタントが個別に数学試験の受験を要請することとなり、現地で混乱が生じることとなった。

今後協力準備調査の際には、応募開始の前の段階の、受入大学候補の情報収集調査の段階で、数学試験の有無について、再確認することが大切である。

## 3) 募集開始時期について

2013年度については、応募書類受付開始から提出締め切りまでの応募期間が実質1か月程度となり、応募期間を十分に確保することができなかった。来年度以降は協力準備調査を実施しない分、少なくとも1か月程度は応募開始スケジュールを前倒しにして応募期間を十分に確保することが望ましい。

## 4) 募集期間中の応募勧奨活動について

コンサルタントはスリランカ国各地で応募説明会を開催した他、主要対象機関を個別訪問し、人材育成責任者と面談し、JDS事業の説明を行うとともに、出来るだけ沢山の希望者からの応募推奨を呼びかけた。各主要対象機関には応募の意志のある職員の人数、あるいは応募予定者リストを提出して貰い、応募予定者リストにあった職員に対して直接電話やメールによる応募推奨も行っている。来年度以降もこのように地道な応募推奨を行うことが望まれる。

## 5) 応募者が少ない大学についての対応

今年度は応募者数が目標とする書類数（定員の4倍）を余裕で超えた大学、満たなかった大学とに分かれた。コンサルタントが候補者にヒアリングしたところ、一校については最初の1年間は家族帯同が認められないこと、もう一校については工学系の学士保持を条件とし受入研究分野が砂防のみであることが応募数に影響しているようであった。来年度以降は、早めの応募活動、応募者が多そうな対象機関への個別訪問による応

募推奨を実施する。また、これ以外に、上記大学と協議を行い、受験資格要件を緩和できる可能性の有無について探っていく必要があると考えている。

(2) 今後の募集対象機関及び対象者について

受入大学の内1校より、中央銀行や財務計画省傘下の研究機関から積極的に応募推奨したい旨の要望があり、コンサルタントが本件について調査した結果、そもそも同省傘下の研究機関はないことと、中央銀行職員はNon All Island Service職員であるため、応募対象にならないことが分かり、その旨伝えて今回については了承していただいた。現地での補足調査においても、対象機関よりAll Island Service職員のみならず、Non All Island Service職員も対象にすべきとの声も多数あった。また、対象者を拡大することにより、より質の高い候補者が集まることも期待できる。今後受入大学の要望も踏まえつつ、運営委員会の場において受入枠を拡大するかどうか議論すべきであると思料する。

(3) エージェントによる留学生生活のサポートについて

コンサルタントは、すでにガーナJDS事業のエージェントとして留学生の支援にあたり、神戸大学と国際大学の留学生に対して、地元在住者ならではのきめ細やかで親身なサポートが得られる留学生を支援していただける地域支援員とネットワークを構築しており、地域支援員の必要性と重要性について熟知している。スリランカJDS事業における7大学についても、信頼できる地域支援員を確保する必要があるところ、留学生来日までに時間があるとは言え、早い段階からそれぞれの大学が所在している地域の外国人支援NPOや大学の留学生支援サークル等と連携をし、支援員候補者を探して早く留学生支援体制を構築することとしたい。

(4) 今後のJDS事業全般の検討課題について

複数の国の奨学金から選択して応募する立場である留学生の意見も勘案し、JDS事業についても、博士課程への拡大は実務者育成を目指すJDS事業の趣旨を踏まえつつも、留学生のニーズに応え、他国と比較してより魅力的な奨学金となるよう、今後慎重に検討されるべきであると思料する。

例えば来日中・帰国留学生からの要望が強かった、大学に通う学生がより快適に過ごすため自動車やバイクの運転を許可し、選択の自由を与えることを検討すべきだと考える。

また、留学生が使用する洋書のテキストブックは高額であり、1冊数千円以上するものが珍しくなく、多くの留学生が1学期分の購入にも満たないことを指摘していた。今後の消費税の値上げも考慮し、書籍購入費の金額には再検討の余地があると思料する。一方で特別プログラムの一環で図書を購入する余地があることを大学側に伝え、その活用についても同時に促したい。

(5) 応募者・留学生に対する注意事項

Phase IIにスリランカ人留学生を受け入れた大学教官へのインタビューの結果によれば、来日中に女性留学生が妊娠し日本で出産したケースが2年連続して発生し、その対応に苦慮し

た、とのことであった。また、論文執筆の際に剽窃に対する罪悪感が薄く簡単にインターネットから引用したり、他人の論文を写したりするケースがあったという。これらの問題は恐らくスリランカのみならず、他国JDS事業でも多かれ少なかれ共通してみられると思われるが、応募段階、留学決定直後、来日前後オリエンテーション、来日後モニタリング等、様々な段階で注意を呼び掛けていくことが大切であると思料する。

# 目 次

## 要 約

第1章 人材育成支援無償（JDS）事業の背景・経緯 .....	1
1-1 JDS事業の現状と課題 .....	1
1-2 無償資金協力要請の背景・経緯 .....	1
1-3 我が国の援助動向 .....	4
1-4 他ドナーの援助動向 .....	5
第2章 JDS事業の内容 .....	8
2-1 JDS事業の概要 .....	8
2-2 JDS事業の概要事業費 .....	18
2-3 相手国負担事項の概要 .....	19
2-4 JDS事業のスケジュール .....	20
2-5 フォローアップ .....	22
第3章 JDS事業の妥当性の検証 .....	23
3-1 帰国留学生及び大学による評価 .....	23
3-2 JDS事業で期待される効果 .....	23
3-3 プロジェクト終了時評価のための補完調査の実施 .....	24
3-4 課題・提言 .....	28
3-5 JDS事業の妥当性 .....	32
3-6 結論 .....	35

## 添付資料

添付資料1. 協力準備調査 調査団員・氏名 .....	A-1
添付資料2. JDS事業 協力準備調査フロー図 .....	A-2
添付資料3. 協力準備調査日程（官団員） .....	A-3
添付資料4. 協議議事録（M/D） .....	A-4
添付資料5. 重点分野／開発課題毎の4か年受入人数 .....	A-11
添付資料6. 重点分野基本計画 .....	A-12
添付資料7. 対象機関の補足調査結果 .....	A-27
添付資料8. 第1バッチ（2014年度来日）の候補者の募集・選考方法 .....	A-30
添付資料9. 帰国留学生・来日中留学生に対する補足調査回答 .....	A-33



## 図表リスト

図2-1	アンケート回答機関におけるJDS事業の要件を満たす職員数 (対象機関向けアンケート結果より) .....	16
図2-2	スリランカJDS事業(4バッチ)のフローチャート .....	21
表1-1	本件業務の活動概要 .....	2
表1-2	スリランカの主要指標 .....	4
表1-3	我が国のスリランカに対する援助概要 .....	4
表1-4	これまでのスリランカJDS事業受入枠組み .....	4
表1-5	主要国による対スリランカ援助概要 .....	5
表1-6	我が国の対スリランカ留学制度 .....	5
表1-7	オーストラリア奨学金の対象セクターと研究分野 .....	6
表2-1	留学生受入計画合意事項と内容 .....	9
表2-2	受入大学の人数枠と想定研究テーマ .....	10
表2-3	本邦受入大学及び受入計画人数、及び想定研究テーマ .....	12
表2-4	対象機関向けインタビュー結果 .....	14
表3-1	モニタリング・評価の対象、内容、手段 .....	25
表3-2	新規JDS事業のスリランカ開発計画や日本の援助方針との整合性 .....	33

## 第1章 人材育成支援無償（JDS）事業の背景・経緯

### 1-1 JDS事業の現状と課題

人材育成支援無償事業（以下、「JDS事業」という）は、我が国政府の「留学生受け入れ10万人計画」の一環で、途上国の社会・経済開発政策の立案や実施において、中核的役割を果たす人材の育成を目的として、1999年度に新設された無償資金協力による留学生受入事業である。当事業では、「対象国において将来指導者となることが期待される優秀な若手行政官等を日本の大学に留学生として受け入れ、帰国後は、社会・経済開発計画の立案・実施において、留学中に得た専門知識を有する人材として活躍すること、また、ひいては日本の良き理解者として両国友好関係の基盤の拡大と強化に貢献すること」を目的としている。対象国はアジアの市場経済移行国を中心とする諸国とガーナであり、留学生人数は2013年度には203名の留学生を12か国より受け入れている。

JDS事業全体は、相手国政府や我が国関係者より高い評価を得ている。一方、過去のJDS事業では受入分野・受入大学等に関し、毎年度、計画策定を行っていたため、中長期的な戦略を持って留学生を受入れることが困難であり、また、留学生個人の能力向上を目的としたため、組織の能力強化への寄与が明確でなかった。そのため、2009年より我が国の援助方針（援助重点分野等）及び対象国の課題やニーズ等に基づき、4期（4年間に渡る受入れ）を1フェーズとして、重点分野（サブプログラム）と開発課題（重点分野の下のコンポーネント）を設定し、その上で重点分野/課題への取り組みに適した対象機関及び本邦の受入大学を選定し、対象機関の若手行政官を留学生として受け入れている。6年間（4期目の留学生帰国まで）にわたり同一分野・対象機関・受入大学の下で留学生を受入れることにより、各国の政策立案・行政組織の機能を向上させ、開発重要課題の解決に貢献することが期待されている。

JDS事業の特徴は、個人の留学支援を目的とする国費留学生等、従来の留学制度と異なり、対象国が日本政府と協議の上決定する開発課題分野に携わる人材育成に主眼が置かれている点であり、各開発課題分野で学位を取得し、対象国の政策や計画の立案及び実施に関わる行政官の実務に則した能力の育成、帰国留学生が日本のよき理解者として両国間の基盤強化・拡大に貢献することを目標としている。また、JDS事業の特徴としては、来日前・中・後のモニタリング・評価により留学効果の達成状況を定期的に測定することが挙げられる。

### 1-2 無償資金協力要請の背景・経緯

#### (1) 要請の背景・経緯

JDS事業は実施年数6年間（初年度の受入れから4期目留学生の帰国まで）にわたり同一の対象分野・募集対象機関・受入大学の下で留学生を受け入れることにより、各国の人材育成が必要な対象機関における若手行政官等の政策立案・事業管理等の能力が向上し、各国の開発課題の解決に貢献することが期待されている。

一方、スリランカにおけるJDS事業は2010年から開始され、年間15人、2013年までで計60人受け入れている。2013年度はスリランカJDS事業Phase Iにおける4か年計画の最後の年にあたる。スリランカ国政府はスリランカJDS事業のPhase IIの実施について我が国に要請し、

我が国政府は、スリランカ政府から新たなJDS事業の計画策定についての要請を受けて、協力準備調査団を派遣することにした。同調査では2014年度から開始されるPhase II 4期分のJDS事業の計画を策定することとなった。

(2) 本協力準備調査の活動

コンサルタントはPhase IIの枠組み策定のための協力準備調査に参加し、2014年度から開始される4期分のJDS事業の計画策定についてJICAを支援した。それに加え、第1バッチにあたる2014年度来日留学生の募集・選考・受入手続きを支援した。

すなわち、本件業務にて実施した作業は大きく分け、以下のとおりとなる。

表1-1 本件業務の活動概要

時期	実施項目	実施事項
国内事前準備 (契約～8月下旬)	JICA 提供資料、及びインターネットによるスリランカ JDS 事業に関する情報収集と分析	要請書、要請案件調査票、援助計画関連、関連プロジェクト理解
	調査・本件業務全体の業務項目、工程表の作成および JICA への提出	業務項目と、要員の役割分担、工程表提出
	質問票の作成および資料の翻訳	補足調査用の英文質問票を作成。
	JICA が選定案を作成する受入大学に関する情報収集	JICA 提供資料をもとに受入大学の概要、研究科の研究内容・講師陣、留学生受け入れ体制等に関するの情報収集を実施。
	JICA が開催する調査団派遣前対処方針会議への参加	2013 年 8 月 15 日に対処方針会議に参加。議事録の作成・提出
	Phase I 受入大学対象調査	Phase I 受入大学教授及び留学生に対するアンケート及びインタビューの実施
	調査団派遣前手配	ホテルと車両手配等、現地業務の準備を実施
	募集活動の準備	募集要項、応募様式、広報資料（ポスター、チラシ、HP 用資料）作成
現地業務	現地業務の準備・調整	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ アポイント確認</li> <li>・ プロジェクト事務所物件探し</li> <li>・ ローカルスタッフ面談・採用</li> </ul>
	現地調査団への参加:先方政府との協議支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現地 EOJ、JICA、ス国政府との会議での説明補足、議事録作成</li> <li>・ 運営委員会会議での説明補足、議事録作成</li> <li>・ 募集・選考方法の詳細について運営委員会と協議</li> </ul>
	補足調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対象機関の状況把握等の実施。</li> <li>・ 帰国留学生インタビュー</li> </ul>
	プロジェクト事務所の立ち上げ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 物件探しと執務環境の整備。</li> </ul>
	募集活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 募集要項、応募様式、広報資料（ポスター、HP 用資料）作成</li> <li>・ ERD と対象機関へ募集要項、応募様式等の配布を依頼。</li> <li>・ 募集説明会開催</li> <li>・ JDS 事業、受入大学情報等に関する照会への対応（電話・メール）</li> </ul>
	応募書類の回収	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 11 月 8 日（13 日に延長）各省庁への応募書類の締切</li> </ul>

時期	実施項目	実施事項
	留学生選考作業支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>応募書類の記入漏れ確認</li> <li>IELTS 及び数学試験の実施アレンジ</li> <li>書類審査の実施アレンジ</li> <li>現地面接の実施アレンジ</li> <li>健康診断の実施アレンジ</li> <li>総合面接の実施アレンジ（予定）</li> </ul>
	受入大学と対象機関等の意見交換アレンジ	<ul style="list-style-type: none"> <li>受入大学教官と対象機関意見交換会の日時・場所調整</li> <li>基本計画案と活動計画の更新</li> </ul>
	先方政府との協議支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>運営委員会における最終候補者の決定及び重点分野基本計画案の合意に対する支援</li> </ul>
	留学予定者への情報提供等	<ul style="list-style-type: none"> <li>ローカルスタッフによる支援</li> </ul>
国内業務	受入大学に関する情報収集	<ul style="list-style-type: none"> <li>受入大学に関する情報の収集</li> </ul>
	受入大学との協議・調整	<ul style="list-style-type: none"> <li>JDS 事業 Phase II の概要説明</li> <li>受入大学への表敬訪問、今後の日程や手続き等の打ち合わせの実施</li> </ul>
	受入大学教官派遣支援、活動計画書取り付け、及び出願検定料の支払い	<ul style="list-style-type: none"> <li>受入大学教官の現地派遣に係る旅費、謝金等の支払い</li> <li>特別プログラム活動計画取り付け</li> <li>受入大学に対する留学予定者の受入大学出願検定料の支払い</li> </ul>
	積算資料の作成と提出	<ul style="list-style-type: none"> <li>4 バッチ分の積算資料を JICA に提出</li> </ul>
	プログレスレポートの作成	<ul style="list-style-type: none"> <li>11 月上旬、先方との合意事項、調査結果、留学生候補者の募集状況、課題</li> </ul>
	重点分野ごとの基本計画案の作成・提出	<ul style="list-style-type: none"> <li>重点分野ごとの留学生受入計画（基本計画）に取りまとめた。（和英）</li> </ul>
	最終報告書案の提出	<ul style="list-style-type: none"> <li>和文・英文</li> </ul>
	最終報告書の提出	<ul style="list-style-type: none"> <li>和文・英文（予定）</li> </ul>

### (3) スリランカの政治経済概況

スリランカは、インド南端に浮かぶ国土面積6.6平方キロの島国で、首都はスリ・ジャヤワルダナプラ・コッテであるが、国会以外の機関は隣接するコロンボにあり、行政や経済の中心はコロンボとなっている。人口構成は、民族別に、シンハラ人74%、タミル人18%、ムーア人8%、その他1%となり、宗教構成は、仏教、ヒンズー教、イスラム教、キリスト教等である。

同国は、1948年の独立以来、民主的な選挙により政権交代が行われている民主主義国であり、経済政策においても市場経済に対応すべく、経済構造改革への努力を進めてきている。伝統的に米と三大プランテーション作物（紅茶、ゴム、ココナッツ）を中心とした農業に依存する経済構造であったが、繊維産業等の工業化や産業の多角化に努めた。2009年の内戦終結後、急速に経済成長をし中所得となった。

一方で同国は、今後も継続的に経済成長するためには、財政赤字、インフレ、民間投資促進のための環境整備、インフラ整備、地域間格差といった克服すべき課題を抱えている。また、多くの途上国と同様、急激な経済成長が環境問題を引き起こしており、環境に配慮した持続的な経済成長の実現が喫緊の課題である。更にスリランカは、地滑り、津波、干ばつなど、自然災害に頻繁に見舞われ一層の防災対策の必要性が叫ばれている。

表1-2 スリランカの主要指標

指標		2009年	2011年
人口	(百万人)	20.2	20.8
GDP	総額(百万ドル)	42,066	59,175
	一人あたり(ドル)	2,077	2,800
経済成長率(%)		3.5	8.3
経常収支(百万ドル)		-24,242	-511,095
対外債務残高(百万ドル)		2,392,229	3,286,208
財政収支(百万スリランカルピー)		725.57	949.95
債務返済比率(DSR)(対GNI、%)		3.4	12.6
債務残高(対GNI、%)		4,616	6,248
援助受取総額(支出純総額百万ドル)		703.75	168.05

出典： World Bank Data

## 1-3 我が国の援助動向

2012年6月に策定された対スリランカ援助方針において、我が国の援助方針は、同国の開発戦略である「マヒンダ構想」において開発課題とされている①成長のための経済基盤整備、②農村地域の社会経済環境改善、③脆弱性軽減のための社会基盤整備に対応するために、下記の3分野を重点課題と設定し、協力プログラムを実施している。また、2004年に起きたスマトラ沖地震によるインド洋津波災害に対しても、被災地域への緊急救援・復興に対し積極的な支援を行っている。

表1-3 我が国のスリランカに対する援助概要

対「ス」国援助政策	援助重点分野	協力プログラム
国別援助方針 (2012年6月策定)	経済成長の促進	・ 運輸ネットワーク強化プログラム ・ 電力事情改善プログラム ・ 上下水道・環境改善プログラム
	後発開発地域の開発支援	・ 農漁村振興プログラム ・ 紛争影響地域生産性回復プログラム
	脆弱性の軽減	・ 気候変動・防災対策プログラム ・ 保健医療プログラム

一方、スリランカにおけるJDS事業は2010年から開始され、Phase 1では年間15人、2012年までに計45人受け入れている。これまでの受入枠組みは以下のとおりである。

表1-4 これまでのスリランカJDS事業受入枠組み

コンポーネント	主管官庁	運営委員会	対象機関	受入大学	各バッチ 受入人数枠
公共政策・財政	財務計画省 対外支援局	財務計画省(議長) 在スリランカ日本 大使館(副議長) 国家行政改革委員会 (当時) JICA スリランカ事 務所	・ 財務計画省 ・ 行政内務省 ・ 経済開発省 ・ 地方政府省(地 方議会含む)	国際大学大学院 国際関係学研究科	4
行政				国際大学大学院 国際関係学研究科	4
地域開発と 貧困削減				国際基督教大学大学院 アーツ・サイエンス 研究科	3
マクロ経済及 び開発経済				広島大学大学院 国際協力研究科	4

## 1-4 他ドナーの援助動向

### (1) 主要ドナーの援助動向

スリランカに対する主要ドナーによる援助は、2か国では日本が近年不動の首位であり、以下年により多少順位は入れ変わるものの、オーストラリア、フランス、デンマークが続く。多国間援助では世界銀行、アジア開発銀行が上位を占めている（2010年実績<sup>1</sup>）。主要ドナーによる援助概要を下表に示す。

表1-5 主要国による対スリランカ援助概要

ドナー	対スリランカ援助戦略	援助分野	協力プロジェクト
世界銀行 *1	Country Partnership Strategy 2013-2016	<ul style="list-style-type: none"> <li>投資促進</li> <li>経済構造改革支援</li> <li>生活水準と社会生活の向上</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Small and Medium Enterprise Development Facility</li> <li>E-Srilanka Development Project Additional Financing</li> <li>Second Additional Financing for the Community Livelihoods in Conflict Affected Areas Project</li> </ul>
アジア開発銀行 *2	Country Partnership Strategy (2012-2016)	<ul style="list-style-type: none"> <li>持続的な経済成長支援</li> <li>民間投資促進と効果的な公共投資の促進</li> <li>人材育成と知的開発支援</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Human Capital Development Capacity and Implementation Support</li> <li>Local Government Enhancement Sector Project</li> <li>Support for Planning and Policy Formulation, Phase 1</li> <li>Small and Medium Enterprise Regional Development Project</li> <li>Local Government infrastructure Improvement Project</li> </ul>

\*1: The World Bank: Sri Lanka (Country Profile Page)

\*2: Asia Development Bank: Sri Lanka (Country Profile Page)

### (2) 修士課程を対象としたドナーによる奨学金プログラム

我が国は「グローバル戦略」を展開する一環として、2020年を目途に留学生受け入れ30万人を目指す「留学生30万人計画」を推進している。2011年5月現在、受け入れ留学生数は13万人となっており、約94%をアジアの近隣諸国出身者が占めている。また、留学生は留学経験を活かして母国の社会で活躍するとともに、対日理解・有効関係増進へ貢献する貴重な人材として、帰国留学生支援も行っている。

我が国はスリランカに対して以下の留学生事業を実施している。

表1-6 我が国の対スリランカ留学制度

留学生事業名	内容
ヤング・リーダーズ・プログラム	アジア諸国等の指導者として期待される行政官、経済人等の若手指導者を本邦の大学院に招聘し、1年間の短期間で学位を授与
文部科学省国費外国人留学制度	日本と世界各国の教育水準を向上させるとともに、相互理解、国際協力の推進に貢献することを目的に、「研究留学生」、「学部留学生」等の受入を実施

また、スリランカでは、修士号が取得できる奨学金はオーストラリア、韓国、インド、中国、チェコ、ニュージーランド、オランダ等、日本以外にも存在する。以下、主要な奨学金プログラムについて紹介する。

<sup>1</sup> 外務省「政府開発援助国別データブック 2012」

A. オーストラリアの奨学金プログラム（SASP: South-Asia Scholarship Program）について

同奨学金プログラムは、持続的経済開発、教育、保健の3セクターを対象とし、これらの分野において政府及び民間レベルの人材育成を行うことを趣旨としている。

表1-7 オーストラリア奨学金の対象セクターと研究分野

セクター	研究分野
持続的経済開発	インフラ開発、職業訓練、地域開発、公共財政管理、公共セクター管理、開発経済
教育	初等・中等教育
保健	水と衛生、脆弱な社会的グループの栄養

出所：SASPホームページ（<http://www.southasiascholarships.org/sri-lanka>）

同奨学金は、全省庁、NGO、民間セクターの40歳以下の人物が対象となり、毎年30人が選ばれるとのことである。

SASPの奨学金はJDSより支給額が多く、また、子供がオーストラリアの学校に行く場合は学費の8割が補助される、留学する際家族一緒の渡航が認められる、週20時間まで労働が可能（配偶者については労働制限なし）、車の運転が可能、等も人気がある理由とのことであった。また、修士号を取得した後に博士課程に進めるのも同奨学金の魅力とのことである。

B. その他主な奨学金

・ 韓国政府奨学金

The Korean Government Scholarship Program（KGSP）は、149か国からの176人の修士及び博士課程の留学生を対象とした奨学金プログラムである。公務員、NGO職員、国際機関職員が対象で、スリランカの受入枠は、内4名である。

・ 英国政府の奨学金（Commonwealth Postgraduate Scholarships）

英国のCommonwealth Postgraduate Scholarshipsは、公務員を対象とし、全ての分野（但し国家開発に関連した分野）を対象に、奨学金を支給するものである。現在受入枠は18人であり、1年間の修士コース、6ヶ月の歯科医学、及び3年間の博士課程に分かれている。

・ ニュージーランドの奨学金（CSFP: Commonwealth Scholarship and Fellowship Plan）

イギリス連邦に属する国が対象で全世界では45か国、アジアではスリランカを含む5か国の個人が対象となっており、ニュージーランドの8大学の修士もしくは博士課程における留学に対し奨学金が支給される。分野としてはリーダーシップ、公共セクターガバナンス・改革、環境、教育、保健、農業・漁業、食糧安全保障、インフラ、人権、ジェンダー等である。2009年、2010年、2011年の3バッチで全世界で合計201人が留学している。<sup>2</sup>

<sup>2</sup> CSFP 報告書（[http://www.csfp-online.org/docs/csfp\\_report\\_2012.pdf](http://www.csfp-online.org/docs/csfp_report_2012.pdf)）

- ・ 世界銀行奨学金（Joint Japan/World Bank Graduate Scholarship Program）

全世界を対象とした公務員向けの留学制度で、インターネットを通じて世界各地の大学リストの中から個人で応募する。

世銀奨学金では、日本を含む世界中の大学（ただし、主に英語圏）から大学を選択することとなり、学部も多岐にわたる。

なお、以下が対象機関や留学生へのインタビューで得た情報は以下のとおりである。

- ・ JDS事業のように奨学金プログラムが事務所を構え、募集説明会を行って応募促進をする奨学金制度は一般的ではなく、応募者自身が大学についての情報収集をして応募する形式が主流である。但し、オーストラリア（AusAID）の奨学金についてはJDS事業と同様現地に常駐の人員を配置し募集・選考活動を実施している。
- ・ 複数の帰国留学生に対するインタビュー結果によれば、このうち最も人気が高いのはオーストラリアの奨学金で、次が日本、韓国の順であった。
- ・ 同じく帰国留学生及び留学中の学生によれば、最近入省する若手職員は入省前に修士号を既に取得しているのが当たり前で、修士号のみを対象としたJDS事業は、多くの若手職員にとってそれ程魅力的に映らない。また、修士を取得した後は、留学期間の4倍の年月（JDS事業の場合8年間）を省庁に勤務しなければならないため、実質8年経った後は博士課程に行きたくても、年齢的にどこの奨学金も対象にならないということであった。
- ・ 一方でJDS事業のメリットは、応募要項がわかりやすい、エージェントが丁寧に応募の仕方を指導してくれる、IELTSを無料で受けられる、留学後は他国に比べ学術的に大学のレベルが高い、等の点を挙げていた帰国留学生が何名かいた。



## 第2章 JDS事業の内容

### 2-1 JDS事業の概要

第1章で紹介したとおり、JDS事業ではその目的を各国の行政能力の向上とし、将来各国の課題解決のための政策立案ができる人材を対象とすることになった。また、4期にわたり分野、対象機関、受入大学を同一とすることで、行政官個人、ひいては行政官の所属対象機関の政策立案能力・事業運営能力を向上させ、各国の開発課題の解決に資することを目指している。

#### (1) 事業の枠組

協力準備調査中の9月13日にPhase II 第1回運営委員会が開催された。

日時	: 2013年9月13日
場所	: 財務計画省対外援助局 (ERD: Department of External Resources, Ministry of Finance and Planning) 会議室
参加者	: 運営委員会メンバー
日本側	: 日本大使館、JICA
スリランカ側	: ERD <sup>3</sup> 、公共管理改革省 (Ministry of Public Management Reforms)
内容	: JDS事業に関する協議と枠組みの合意、今年度の募集選考スケジュール

同運営委員会ではJDS事業のPhase IIの事業枠組みについて、下記が合意された。

#### 協議結果と合意事項:

##### A. 調査実施体制

今年度の募集選考については、Phase Iの実施代理機関とは異なり、協力準備調査のコンサルタントが実施すること、ERDが主管省庁として対象機関に本事業の関連資料・案内書類等を配布することについて合意された。また、調査団はERDに対してコンサルタントに執務室を現状では困難であるが、引き続き提供を検討するよう依頼した。

##### B. 4バッチ分の留学生受入計画について

以下の内容で合意された。留学生受入枠組みの詳細については、次項に記す。

---

<sup>3</sup> ERD はスリランカ国への援助の交渉窓口となっており、本 JDS 事業においても ERD が主管官庁の役割を担う。

表2-1 留学生受入計画合意事項と内容

合意事項	合意内容
本調査合意対象のJDS案件	本調査で合意する留学生受入計画は2014年度から2017年度入学予定者の4案件分であること
受入上限人数	年間受入上限人数15名（4バッチで最大上限60名）
サブ・プログラム及びコンポーネント	対象サブ・プログラムおよびコンポーネントの選定、及び名称の合意
募集対象機関及び対象者	募集対象機関及び対象者について合意
主管官庁と運営委員会	主管官庁と運営委員会メンバー
本邦受入大学及び受入計画人数、想定研究テーマ	コンポーネントの受入大学決定および各計画人数の合意 コンポーネントの想定される研究テーマの合意
基本計画策定及び調査全体フロー	基本計画の策定方法・構成、今後のスケジュールの合意 調査全体から本体事業までのフローの説明・合意

C. 事業評価及び帰国後状況確認

JDS事業においてモニタリングと評価が重要であること、並びに今後の運営委員会においてJICAがモニタリング・評価方法について提案することで合意した。

(2) 合意された留学生受入枠組み

受入大学の人数枠と想定研究テーマは次表のとおり。

表2-2 合意された受入計画概要

Sub-Program (JDS Priority Areas)	Component (Development Issue)	Expected Theme of Research / Possible Fields of Study	Target Organizations	University	Slot
1. Human Resources Development for Promotion of Economic Growth	1-1. Public Policy and Public Finance	<u>Possible Fields of Study:</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>· Fiscal Policy, Social Policy, International Development, &amp; Public Administration</li> </ul> <u>Degree:</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>· Master of Public Policy</li> <li>· Master of Public Administration</li> </ul>	<u>Target Organizations:</u> All ministries  * Managing Organization is Department of External Resources, Ministry of Finance and Planning  <u>Target Persons:</u> All Island Service Officers for Components 1-1 to Components 1-3. For Component 1-4, target persons include All Island Service Officers as well as Non All Island Service Officers.	National Graduate Institute for Policy Studies	2
	1-2. Economics Including Development Economics	<u>Possible Fields of Study:</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>· Economic Development</li> <li>· Macroeconomics</li> <li>· Development Policy</li> </ul> <u>Degree:</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>· Master of Development Economics</li> </ul>		Hitotsubashi University	2
	1-3. Business Management	<u>Possible Fields of Study:</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>· Business Administration, SME Support</li> <li>· Investment Improvement, &amp; Industrial Development</li> </ul> <u>Degree:</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>· Master of Business Administration</li> <li>· Master in Commerce</li> </ul>		Waseda University	2
	1-4. Environment Management/ Disaster Management and Climate Change	<b>[Environment Management]</b> <u>Possible Fields of Study:</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>· Environmental Policy</li> <li>· Environmental Management</li> <li>· Environmental Study</li> </ul> <u>Degree:</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>· Master of Environmental Management</li> <li>· Master of Environmental Policy</li> </ul> <b>[Disaster Management]</b> <u>Possible Fields of Study:</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>· Regional Disaster Prevention</li> <li>· Disaster Management Policy</li> <li>· Disaster Risk Management</li> <li>· Disaster Science</li> </ul> <u>Degree:</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>· Master of Disaster Management</li> <li>· Master of Civil Engineering</li> </ul>		International University of Japan	2
					University of Tsukuba
<b>Maximum slots per year</b>					<b>15</b>

1) 本調査合意対象のJDS案件：2014年度来日から2017年度入学予定者の4期分案件

2) 留学生受入上限人数：毎年15名/年（4年間で最大60名）

3) サブプログラム（分野）及びコンポーネント（開発課題）：

1つのサブ・プログラム、及び4つのコンポーネントが対象となった。

サブ・プログラム：経済成長基盤整備のための人材育成

コンポーネント1：公共政策・財政

コンポーネント2：開発経済

コンポーネント3：ビジネス環境整備

コンポーネント4：環境配慮・防災・気候変動

4) 実施体制：

スリランカ国政府、及び日本政府の各代表者により構成されるJDS運営委員会の協力のもと実施することとなった。運営委員会メンバーは日本側が在スリランカ日本国大使館、及びJICAスリランカ事務所、スリランカ側がERD、及び公共管理改革省である。

運営委員会では、主に1)、実施方針、2)、事業日程、3)、受入分野、4)、募集対象機関、5)、受入大学、6)、選考方法、7)、JDS候補者確定について協議を行う。

5) 募集対象者及び対象機関：

スリランカの省庁では、All Island Serviceと呼ばれる特定分野<sup>4</sup>で採用された幹部や幹部候補について、特定の省庁にずっと勤務するのではなく、3年から5年で省庁から省庁へ異動となる。従って特定の省庁のみをターゲットにすることはあまり意味がなく、全省庁職員を対象にするのが良い、との提案が先方政府よりあった。そのためJDS事業のPhase IIでは全省庁・政府機関のAll Island Service職員を対象とすることとした。但し、「コンポーネント4 環境配慮・防災・気候変動」は、受入大学のプログラムがより技術的であり、同コンポーネントのみAll Island Serviceではない職員も対象とすることとなった。その他、40歳以下の若手が対象であり、学士保持者であること、JDS事業以外の奨学金で既に修士号を保有していないことが資格要件として挙げられる。

6) 本邦受入大学及び受入計画人数、想定研究テーマ

以下の通り合意された。

---

<sup>4</sup> All-island Service には、Sri Lanka Administrative Service、Sri Lanka Planning Service、Sri Lanka Accounting Service、Sri Lanka Engineering Service 等、10種類がある。

表2-3 本邦受入大学及び受入計画人数、及び想定研究テーマ

サブ・プログラム	経済成長基盤整備のための人材育成			
コンポーネント	公共政策・財政	開発経済	ビジネス環境整備	環境配慮・防災
大学・研究科	政策研究大学院大学 政策研究科	広島大学大学院 国際協力研究科	国際大学 国際経営学研究科	筑波大学 生命環境科学研究科
取得学位名称	Master of Public Policy or Master of Public Administration (12ヵ月) Master of Arts in Public Policy (24ヵ月)	Master of Arts Master of Science Master of International Cooperation Studies	Master of Business Administration	Master's in Environmental Sciences
受入人数枠	8名 (2名×4バッチ)	12名 (3名×4バッチ)	8名 (2名×4バッチ)	8名 (2名×4バッチ)
大学・研究科	一橋大学 国際・公共政策大学院	/	早稲田大学 商学研究科	東京大学大学院 工学系研究科
取得学位名称	Master of Public Policy (Public Economics)		Master of Business Administration	Master of Engineering
受入人数枠	8名 (2名×4バッチ)		8名 (2名×4バッチ)	8名 (2名×4バッチ)
想定研究テーマ	Fiscal Policy Social Policy International Development Public Administration	Economic Development Macroeconomics Development Policy	Business Administration SME Support Investment Improvement Industrial Development	Environmental Management Environmental Policy Environmental Study Disaster Management Regional Disaster Prevention Disaster Management Policy Disaster Risk Management Disaster Science

### (3) 補足（状況確認）調査の実施

協力準備調査の補足調査の一環として、①Phase IでスリランカJDS留学生を受け入れてきた本邦大学3校の教員、及び来日中留学生に対する調査、②現地における対象機関現況調査、及び③現地における帰国留学生対象調査を行った。このうち、①の来日中留学生、②対象機関、③帰国留学生についてはインタビューのみならずアンケートも実施した。アンケートの集計結果は添付資料9に添付する。

#### 対象機関と留学生を対象にした調査

##### A. 対象機関の概況

協力準備調査中に一部の省庁を対象に各機関のJDS事業への興味や対象者数等、現状把握を目的としたインタビュー調査を実施した。インタビューでは、本省の人数が少ない省庁でも、下部機関も含めるとどこの機関も十分な人数のJDS事業の応募要件を満たす対象者がおり、毎年候補生を推薦可能との回答が得られた。

なお、インタビューでは、現在のAll Island Service公務員に限定していることに対し賛同する声があった一方、技術系の職員がほとんどを占める機関（Ministry of Disaster Managementの下部機関等）では、All Island Service以外にも門戸を広げていただきたい旨の要望があった。

表2-4 対象機関向けインタビュー結果

調査項目／コメント	Ministry of Economic Development	Ministry of Industry and Commerce	Ministry of Local Government and Provincial Councils	Ministry of Irrigation & Water Resources Management	Ministry of Public Administration
日本で学びたい分野	ツーリズム、マーケティング、中小企業振興、貧困削減、地方開発等の分野における政策・計画策定、モニタリング、評価手法	貿易や産業分野の政策策定。ビジネスマネジメント	地域開発、プロジェクトマネジメント、地域格差解消、デジタルデバイド解消、省庁保有のデータベースの分析手法、インフラの機材の保守管理方法、公共図書館の整備、固形廃棄物管理、法整備	水資源開発、EIA手法、最新の灌漑技術と適用	(1) Public Administrationの透明性 (2) 草の根レベルでのサービスデリバリーの効率性の向上におけるグッドガバナンス (3) 地域振興としての一村一品の成功を左右する、社会経済要素の分析、等
省庁職員数	622名（本省のみ）	384名（中央省庁のみ）	350,000（但、中央から地方まで全ての職階を含む。）	約 108 名（本省のみ）	1,196名（All Island Serviceのみ）
職員の職階ごとの内訳	シニアオフィサー110名	Development 256 Administrative 124 Technical 4	シニアオフィサー24名、 中堅 117名、若手 42名（本省のみ）	Administrative 16 Technical 6 Supportive 86	Administrative 778名 Accountants 391名 Engineering 27名
政策策定に従事している行政官数	561名	256	24名（本省のみ）	22名	1,196名
JDSの募集条件に合う行政官数	192名	73名	264名（地方も含む）	-	600名
4年間毎年留学生を推薦することの可能性	十分可能。	十分可能	十分可能	十分可能	十分可能
留学条件	入省後3年間は留学不可。	同左	同左	同左	同左
留学期間中の休職についての制約	特になし	同左	同左	同左	同左
他ドナーによるマスタープログラム	KOICA	KOICA、中国、オーストラリア	KOICA	現在はなし	現在はなし
留学生の帰国後の待遇	修士号取得が昇進の条件	同左	同左	同左	同左
先方コメント	・ 年齢枠を引き上げたほうが良い。 ・ シニアを対象とした短期のコースでの奨学金コースも設置してほしい	特になし	・ 応募から最終選定までの期間の短縮化	・ 年齢枠を引き上げたほうが良い。 ・ 短期のコースでの奨学金コースも設置してほしい	特になし

調査項目／コメント	Ministry of Water Supply and Drainage	Ministry of Environment and Renewable Energy	Ministry of Ports & Highways	Ministry of Disaster Management
日本で学びたい分野	適切で低コストの浄化技術、適切な資産管理システムの実施、汚水の廃棄設備の計画と設計、サプライチェーンマネジメントや在庫管理方法	気候変動や生物多様性関連の国際基準の政策の実施	公共政策、財務、コミュニティ開発、道路建設技術、港湾建設技術、費用便益分析、	防災技術、減災技術、住民への影響、防災に関わる費用便益分析
省庁職員数	約10,000名（中央から地方までのすべての職階を含む）	248名（本省のみ）	2,134名（下部機関も含む）	87名（本省のみ）
職員の職階ごとの内訳	約2300名シニアオフィサー	本省All Island Service officers: Administrative 11名 Scientific 2名 Planning 1名 Accounting 4名	2,116名（常勤） 35名（非常勤）	シニア14名 ジュニア73名
政策策定に従事している行政官数	約100名	未回答	未回答	14名
JDSの募集条件に合う行政官数	600名	120名（下部機関も含む）	132名	6名
4年間毎年留学生を推薦することの可能性	十分可能	十分可能	対応可能	毎年2名ずつ推薦可能
留学条件	入省後3年間は留学不可。	同左	同左	同左
留学期間中の休職についての制約	特になし	同左	同左	同左
他ドナーによるマスタープログラム	世銀、オランダで各1~2名程度。	オーストラリア、KOICA	オーストラリア	現在はなし
留学生の帰国後の待遇	修士号取得が昇進の条件	同左	同左	同左
先方コメント	・ 年齢枠を引き上げたほうが良い。 ・ 短期のコースでの奨学金コースも設置してほしい	特になし	特になし	All Island Service以外の職員も対象にしていきたい。

上記以外に、公共管理改革省の次官との対談の中で、公共政策における、スマートガバメント、process of management等スリランカではまだ紹介されていない分野を受入大学で学ばせたい旨コメントがあった。



これ以外にインタビューできなかつた対象機関に対してERDを通じてアンケート調査を実施した。アンケートの送付数は35省庁、回収数は22省庁4機関であった（一部の省庁が、下部機関にもアンケートを送付し、内4機関より回答を得たため）。集計結果を添付資料7にまとめる。これらのうち18機関が、「JDS事業の応募要件を満たす若手職員が存在する。」と回答している。対象者が50名以上の省庁も6省庁に上り、この結果を見る限り、同国政府は4年間十分候補者を輩出できるものと考えられる。

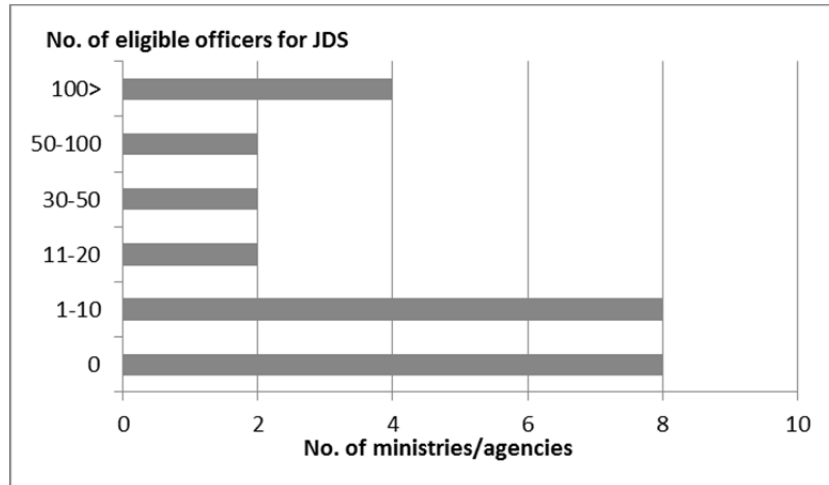


図2-1 アンケート回答機関におけるJDS事業の要件を満たす職員数  
(対象機関向けアンケート結果より)

但し上記結果は、省庁により、JDS事業の要件を満たす職員数として、下部機関の人数を含んでいたりいなかったり、職員の人数の数え方はまちまちである。また、2010年11月時点で、スリランカの省庁数は64<sup>5</sup>であり、さらに多くの省庁が傘下に下部機関を有し、ERDがアンケートを送付しなかつた省庁や機関も数多く存在するため、今回のアンケート結果をもとにスリランカ全省庁／全傘下機関におけるJDS対象者の正確な数字を把握することは困難である。

上記調査とは別に、コンポーネント1の受入大学の内1校より公共政策・財政政策策定・実施に従事している実務者（例えば財務計画省傘下研究機関や中央銀行）からの応募を望むとの声があったため、そのような候補者たる職員がどの程度いるかを調査するため、財務計画省及びスリランカ中央銀行を訪問した。まず、財務計画省によれば同省には95人、要件に合致する職員が存在する、とのことであった。これらの職員は財政関連の専門性を持つとのことで、人数的にも、能力（質）的にも潜在的応募者は存在すると言える。一方中央銀行にはJDS事業の対象となるAll Island Service職員もいるが、幹部要職に就くSri Lanka Administration Serviceの職員に限られ、40歳未満で経済・財務政策に関わる人員は存在しないとのことであった。また、コンポーネント4の受入大学の内1校は、研究分野が砂防に特化しているため毎年十分な応募者数を確保できるかどうか懸念されるところ、砂防に関係が深く、エンジニアが存在すると考えられる4省（Ministry

<sup>5</sup> The Gazette of the Democratic Socialist Republic of Sri Lanka, 2010.11.22

of Irrigation and Water Resource Management, Ministry of Ports, Highways and Shipping, Ministry of Construction, Engineering Services, Housing and Amenities, Ministry of Local Government and Provincial Councils) )をコンサルタントが訪問し、下部組織・傘下の実施機関に存在するエンジニア数を確認した。その結果、JDSの要件（40才未満で留学が禁じられている見習い期間であるProbation Periodを終了済み）と合致し、更に砂防関連のエンジニアについては、100人程度が存在するとのことであった。

#### B. 帰国留学生の留学後の配属や待遇について

スリランカの公務員は、規則により留学からの帰国後、留学期間の4倍の期間（2年間の留学期間の場合は8年間）省庁で勤務しなくてはならないことになっている。そのため元留学生全員は転職することなく、帰国後も引き続き省庁に勤務している。JDS事業で2年間休職することについては、特に所属機関として問題はなく、むしろ若手人材育成にプラスになると歓迎する声が聞かれた。

一方コンサルタントが面談することのできた公務員人事を管轄しているMinistry of Public Administrationの次官（Additional Secretary）によると、All Island Service職員は数年ごとの人事異動の対象になっているが、その際は本人の希望を考慮した上で、本人のこれまでのキャリア、大学で学んだこと等が活かせる職場に極力配置することになっている。

また、回収することが出来た帰国留学生アンケート11名の内7名と、補足調査期間中に実際に会ってインタビューすることが出来た帰国留学生5名中5名が、留学前に在籍していた省庁に現在配属されており、むやみやたらに配置換えが行われるわけではないようである。

All Island Service職員は、クラスIIから幹部公務員であるクラスIに昇進するには修士を持っていることが前提条件のひとつとなっているとのことであった。今回インタビューすることが出来た帰国留学生5名中4名が、昇進、あるいは昇進が近く予定されていると示唆していた。

## 2-2 JDS事業の概要事業費

前項で述べた受入計画に基づき、2014年度来日留学生に係る第1バッチの事業費を積算した。

表2-5 スリランカ国 人材育成奨学計画  
概略総事業費

(単位千円)

項目	仕様	内訳	総額 (千円)	日本円 (千円)	現地貨 円換算 (千円)	USドル 円換算 (千円)
H26 事業費 Term-1	実施経費	実施経費： 大学直接経費（入学 金、授業料他） 留学生受入直接経費 （航空賃、支度料、 奨学金他） 留学生国内経費（来日 時・帰国時にかかる 移動経費、宿泊経費） 特別プログラム経費	44,153	41,985	0	2,168
	役務経費		32,701	23,576	6,528	2,597
	実施代理 機関人件費		32,800	32,800	0	0
	H26年 事業費 計		109,654	98,361	6,528	4,765
H27 事業費 Term-2	実施経費	現地募集・選考支援経 費 特別プログラム支援 経費 来日前研修経費 来日後研修経費 モニタリング経費 突発対応経費 大学会議経費 帰国プログラム経費	49,911	49,911	0	0
	役務経費		5,770	3,408	1,083	1,279
	実施代理 機関人件費		10,736	10,736	0	0
	H27年 事業費 計		66,417	64,055	1,083	1,279
H28 事業費 Term-3	実施経費	実施代理機関人件費： 実施代理機関人件費 管理費	34,447	34,447	0	0
	役務経費		2,743	2,361	213	169
	実施代理 機関人件費		4,222	4,222	0	0
	H27年 事業費 計		41,412	41,030	213	169
第1バッチ 事業費総額	合計		217,485	203,446	7,825	6,214

概略総事業費合計：約217百万円

積算結果については別途JICAに提出する。事業費積算に関し以下を前提とした。

#### 積算条件

- 積算時点：2013年10月
- 為替レート：1ドル=98.94円、1ルピー=0.758円

#### 実施経費

- 2014年度来日留学生につき、7受入大学15名として出願・検定料、入学金、授業料、奨学金の積算を行った。
- 2014年度来日留学生について大学入試のための出願検定料について積算した。
- 特別プログラム経費につき、留学生1人あたり年間50万円（来日年、帰国年は半額）で積算した。

#### 役務経費（スリランカ）

- 来日前オリエンテーションにつき、5日間程度の実施を想定して見積もった。
- JDS事業の事務所についてはERDに提供を依頼しているものの、提供されるかは未定であるため、積算に計上した。
- 2014年度来日留学生についての募集・選考経費を計上した。
- スリランカにおけるインフレ率を考慮し、積算に反映。

#### 役務経費（日本）

- 留学生来日時期を2014年8月下旬とした。
- 留学生は、来日後5日間程度東京でオリエンテーションを受講後、それぞれの大学に移動する予定とした。
- 留学生の帰国時期を、受け入れ大学の卒業式実施月に合わせた。

#### 実施代理機関人件費

- 1カ月の一人あたりの稼働日数を海外30日、国内20日として積算した。

## 2-3 相手国負担事項の概要

本事業におけるスリランカ政府の負担事項としては以下が挙げられる。

### (1) 本事業におけるスリランカ政府の役割

- ・ ERDは、全コンポーネントの主管官庁として応募書類の取りまとめを行い年2回の運営委員会における議長を務める等、管理的な役割を担う。
- ・ 受入大学関係者のスリランカ渡航時における対象機関協議に参加する。
- ・ 留学生のスリランカ帰国後に、所属機関・対象機関において留学で習得した知識の普及を推進するよう努力する。

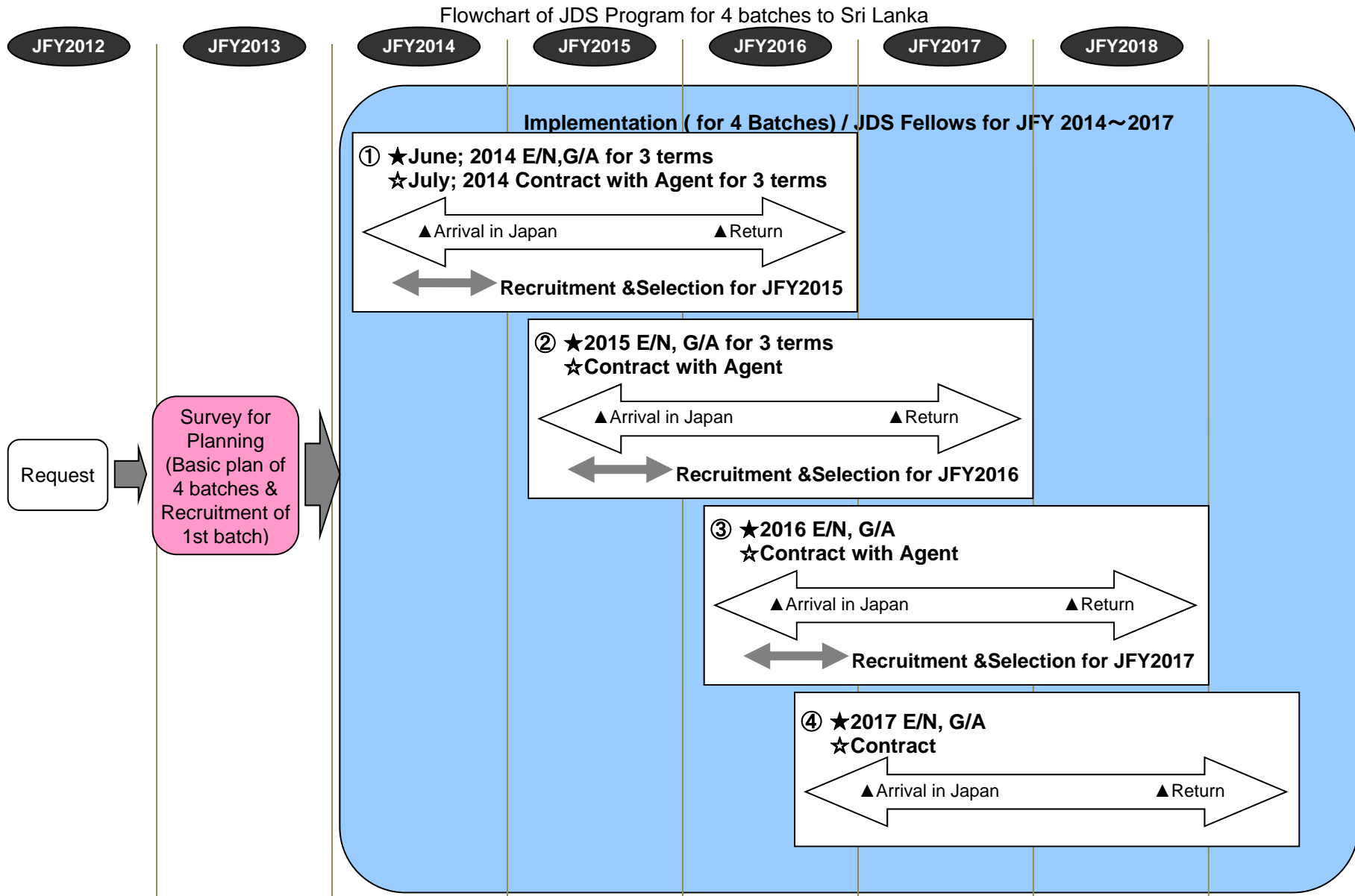
### (2) 物理的・金銭的な負担事項

- ・ 執務室の提供

ERDがコンサルタントに執務室を提供することを、すぐには困難であるが引き続き検討することとなった。

## 2-4 JDS事業のスケジュール

協力準備調査により策定された2014年度以降における4バッチ分のJDS事業のスケジュールは以下のとおりと想定されている。具体的には年度ごとに各バッチの交換公文(Exchange of Notes) (以下、「E/N」という) 及び贈与契約 (Grant Agreement) (以下、「G/A」という) が締結される。



出典：JICA提供資料をもとにコンサルタント作成

図2-2 スリランカJDS事業（4バッチ）のフローチャート

## 2-5 フォローアップ

帰国留学生に対するフォローアップとして、①留学生の帰国直後に帰国報告会を実施、②帰国後3年目を目途に帰国留学生と留学生上司に対するアンケート調査の実施、の予定である。

### (1) 留学生帰国直後の帰国報告会概要

時 期：スリランカJDS留学生帰国後の早い時期

参加者：帰国留学生、運営委員会、対象機関の帰国留学生上司、日本大使館、JICA、エージェント、等

報告会内容：

- ・ 日本に留学した結果としての開発課題に関する専門知識の習得状況
- ・ 研究成果やその成果を活かした対象機関におけるキャリアプラン及びアクションプランの発表
- ・ 日本での人的ネットワーク構築の成果

### (2) JICAによるモニタリング調査時の、帰国留学生と留学生上司に対するアンケート調査の実施

JICAは、2016年にJDS事業のモニタリング調査を実施する。調査項目については、「3-3 プロジェクト終了時評価のための補完調査の実施」の通り、留学期間中の調査項目と同等の内容で実施することを提案する。

### 第3章 JDS事業の妥当性の検証

#### 3-1 帰国留学生及び大学による評価

補足調査の一環として、帰国留学生に対して留学経験が職務上どのように役立っているかについてアンケート調査及びインタビュー調査を実施した。

インタビューでは学術面において「統計ソフトの使い方」、「データ分析手法」、「論文の書き方」、「プレゼンテーションスキル」を身に付け、業務にも活用していることを挙げた留学生が複数いた。学術面以外では日本滞在中に教員、日本人学生、他国留学生ネットワークを構築し、留学後も活用している、あるいは日本人の規律（時間に正確、礼儀正しさ、責任感、忍耐、自己犠牲、整理整頓、等）、効率性の高さ、タイムマネジメント、論理的思考、仕事への熱意、パソコンスキルの向上、等が挙げられた。

また、帰国留学生へのアンケートによると回答のあった11人中全員が、留学前と比較し留学後は、「リサーチ手法」、「データ分析手法」、「プレゼンテーションスキル」といった学術面、「論理的・合理的思考」、「効率性」、「パソコンスキル」、「タイムマネジメント」といった能力面でスキルが向上し、業務を遂行するうえでプラスの影響があったと回答している。さらに11人全員が、所属機関のキャパシティも自分の留学の結果、向上したと回答している。具体的には帰国留学生の業務に対する態度の変容が同僚に影響を与えたこと、留学の成果を発表等を通じて組織内に伝えていたことが挙げられていた。さらには全員教員や友人といった日本で知り合った人々と良い関係を築き連絡を取っていると答えている。（「添付資料9. 帰国留学生・来日中留学生に対する補足調査回答」参照）

一方、大学教員に対してもインタビューを実施した。大学教員によれば、スリランカ人留学生は英語も出来、学業に対する姿勢も、生活態度も真面目であり、どの受入大学についてもこれまで大きな問題は生じていないとのことであった。スリランカ人JDS留学生を受け入れたことにより、留学中は、スリランカ留学生が真面目で正直であるため、学業面や規律面で他国留学生の規範になっていること、また、留学後はスリランカ省庁との人的ネットワークが構築されたことを挙げた教員がいた。

但し、途上国からの留学生全般に言えることであるが、剽窃に対する意識が希薄であり、スリランカ人留学生についても過去問題となったケースがあったという。生活面では家族との絆が強いため、家族と離れて来日した場合ホームシックにかかったり体調を崩す留学生が散見されるようである。また、ある大学では、女学生が2年続けて妊娠・出産し、教員及び事務方はその対応に追われたとのことであった。

#### 3-2 JDS事業で期待される効果

JDS事業で期待される効果としては、まず第一に、無償資金協力の対象国において将来社会・経済開発計画の立案・実施の担い手となり、指導者になることが期待される若手の行政官等を、本邦大学に受け入れることを通じて、政策立案・実施能力の育成を行うことが挙げられる。第二に、JDS事業では留学する行政官が帰国後にそれぞれの対象機関に復職することを前提としており、日本で身に付けた知識を組織内で共有することによる裨益効果、すなわち個人のみならず組織の社会・経済開発上の課題解決能力についても強化することが期待される。第三に、若手行政



官が本邦大学に留学することにより人的ネットワークの構築を行い、日本の良き理解者として両国間の友好関係の強化に貢献することが挙げられる。本事業における留学生は、我が国の大学で専門知識の習得、研究、人的ネットワーク構築等を行い、自らの国が直面している課題を実践的に解決する専門知識を有する人材として活躍することが期待される。

次項で詳述するが、本事業では評価指標を設定し、事業開始当初、留学中、帰国後と定期的に計測することによって効果を測定する。

### 3-3 プロジェクト終了時評価のための補完調査の実施

本事業では、第1バッチ留学生の来日開始から3年目である2016年に、スリランカJDS事業についての成果・課題等を確認するためのモニタリング調査を予定している。これは本事業の目標である

- ・ スリランカの経済成長促進に貢献する政策や計画の立案・実施に関わる行政官の実務に即した能力を育成する。
- ・ 帰国留学生が日本のよき理解者として両国間の基盤強化・拡大に貢献する。

が達成される見込みが高いかどうか、先方政府等に状況を確認するものである。

また、帰国後の留学生に対しては、JICAによるモニタリング調査時にアンケート調査が実施される予定である。評価指標は、他のJDS事業と共通となっている。

- ・ 帰国留学生の修士号取得
- ・ 帰国留学生の日本で研究した内容に深く関連する職場での勤務

モニタリング調査においては、単にJDS事業の目標がどの程度達成されたかどうかの検証に留まらない。留学生活は順調だったか、どんな課題に直面したのか、どうやって解決したか（あるいはしなかったか）、といったJDS事業の実施プロセスについても確認し、今後の同事業の計画に反映させるべく提言する、いわゆるPDCA（Plan, Do, Check, and Action）サイクルの視点も必要であると考えられる。

一方、エージェント業務として、事業目標がどの程度達成されたか、そして実施プロセスはどうかであったかの検証のために、留学前・留学中・留学後と様々な段階において、定期的にモニタリング・評価を行う予定である。

本事業におけるモニタリング・評価の対象としては、以下の3種類あると考えている。

- ・ 留学生の能力変遷と対象機関への裨益について
- ・ 留学生の日本での生活面・学術面について
- ・ スリランカ国JDS事業全般について

表3-1 エージェントによるモニタリング・評価の対象、内容、手段

モニタリングの対象	内容	手段
留学生の能力変遷と対象機関への裨益 (モニタリング・評価A)	留学による留学生の能力(技能・態度)の変遷を計測し、対象機関への留学による成果の裨益はあったかを調べる。	・ 留学生への面談、報告会、アンケート ・ 受入大学面談、アンケート ・ 留学生派遣元機関の直属上司に対するアンケート調査とインタビュー調査
留学生の日本での生活面 (モニタリング・評価B)	日本での生活面や学術面は順調かどうかを定期的にチェックする。	・ 留学生への面談、アンケート ・ 受入大学面談、アンケート
スリランカ国JDS事業全般 (モニタリング・評価C)	同事業は順調に進捗しているか、課題はないか。	・ 留学生への面談、アンケート ・ 受入大学面談、アンケート

エージェントは一連のモニタリング及び評価を実施することにより、事業の各段階における効果を測定すると共に、進行中及び今後のJDS事業の改善に役立てる。

モニタリングの方法として、①留学生との面談・報告会やアンケートを通じたモニタリング・評価、②受入大学に対する面談やアンケートを通じたモニタリング・評価、③留学生派遣元機関上司に対するアンケート調査を通じたモニタリング・評価、の3種類を考えている。アンケートについてはより多くの対象者に実施することにより、より客観的に留学の効果を評価することが可能となると考える。

(1) エージェントによる留学生との面談、報告会、アンケートを通じたモニタリング・評価

① 面談と報告会の実施

(「表3-1 モニタリング・評価の対象、内容、手段」モニタリング・評価 A、B、C)

留学期間中、定期的(四半期に1回程度)に留学生とエージェントとで面談し、研究面での効果測定や生活面についての状況、JDS事業全般に対する要望についてヒアリングを行い、必要に応じてアドバイスする。

- ・ **研究面** : 研究は順調か、研究目標の達成状況、研究ニーズとカリキュラムは合致しているか、課題は何か、将来研究結果をどのように役立てるか、教員とのコミュニケーションは順調か、留学の成果
- ・ **生活面** : 学生生活は順調か、精神的・肉体的に健康か、何か問題はないか、満足度と今後期待すること。
- ・ **JDS事業全般** : 本事業への満足度と今後期待すること、安全管理は適切だったか、手続きや受入体制でエージェントに望むこと

また、留学生の帰国直前に本邦において、そして帰国直後にスリランカにおいて2回の帰国報告会を開催し、以下について留学の成果を発表してもらう。

### エージェントによる帰国報告会の開催

タイミング	: 帰国直前と帰国直後の2回
帰国直前報告会出席者	: 受入大学教職員、エージェント、留学生
帰国直後報告会出席者	: 運営委員会、派遣元機関上司、在スリランカ日本大使館、JICA 事務所、現地 JDS 事業プロジェクトオフィス、留学生
目的	: 留学が公務員としての能力向上にどの程度貢献したかについての把握と、留学の成果を活かすための本人への動機づけ
内容:	
	<ul style="list-style-type: none"><li>・ プロジェクト目標の達成状況</li><li>・ 研究成果やその成果を活かしたキャリアプラン及びアクションプランの発表</li><li>・ 対象機関に留学の成果をどのように裨益させるかのアクションプランの発表</li><li>・ 日本での人的ネットワーク構築の成果</li></ul>

## ② アンケート

(「表3-1 モニタリング・評価の対象、内容、手段」 **モニタリング・評価 A、B、C**)

留学生に対するアンケートを、時期を変えて実施することで留学効果を測定する。アンケートは回答率を向上させるために、なるべく選択方式にする、また回答を例えば10段階方式とし定量的に能力変遷の様子を把握しやすくするなど工夫を凝らす。頻度は留学直後、留学1年目、帰国前の3回実施することにより、留学によって技能（当該分野の開発課題に対する専門知識や技能、問題解決能力、論理的思考、判断力等）や態度（規律、倫理、責任感、熱意など）といった公務員に求められると考えられる能力がどのように変遷したかを測定する。これらのアンケート結果についてはモニタリングの一環として分析し、結果を表やグラフとしてビジュアル化するなどし、今後の本事業の改善に役立つよう、JICA、現地の運営委員会、対象機関等に対して提言を行う。

また、能力計測のためのアンケート配布と同時に、学業・生活面での状況についてやJDS事業への要望についても質問を行う。結果については6ヵ月おきにJICAと先方政府にレポートを提出し、今後のJDS事業全般の改善に役立てる。

### エージェントによるアンケート調査の実施（留学生向け）

タイミング	: 留学直後、留学1年後、帰国報告会開催時の計3回
目的	: 留学による能力変遷、学業面や生活面についての状況把握
内容:	
留学生の能力向上	: 技能（当該分野の開発課題に対する専門知識や技能、問題解決能力、論理的思考、判断力等）や態度（規律、倫理、責任感、熱意など）
学業面	: 開発課題解決に対する知識の習得状況、研究成果、教員とのコミュニケーションは円滑だったか。研修中のトラブルの有無と内容、大学の留学・研修生支援は充実していたか
生活面	: 精神的・肉体的に健康か、悩みはないか
JDS 事業全般（受入プロセスについて）	: 受入プロセス・手続きは円滑か、受入に関するトラブルの有無と内容、本事業について今後期待すること、安全管理等

上記に加えて、JICAによる帰国後3年目の調査においては「習得後の知識がどれだけ活用され、どれだけ対象機関に還元されているか」の観点からの質問もすることが望ましい。

- ・ 留学の成果を仕事にどのように役立てているか
- ・ 留学で構築したネットワークをどのように活用しているか
- ・ 昇進、昇給等、待遇の違いは生じたか。
- ・ 留学で得た知識は対象機関にどのように裨益しているか。
- ・ 帰国留学生が当該政策策定・制度構築に関連する部署に配属されたか。
- ・ 対象機関の政策策定能力や制度構築にかかわる能力は帰国留学生により向上したか。それはなぜか。

(2) エージェントによる受入大学に対する面談やアンケートを通じたモニタリング

(「表3-1 モニタリング・評価の対象、内容、手段」 **モニタリング・評価 A、B、C**)

留学生への四半期に1度のモニタリングの際、大学留学生課や担当教官にも、留学生の学生生活が順調だったかについてヒアリングを行う。また、定期的な意見交換以外にも、留学生の病気や学業が不振な場合等必要に応じてエージェントが大学を訪問し、大学側とも意見交換を行い解決方法の糸口を探る。

受入大学の教官に帰国報告会に参加いただき、留学生の能力（技能・態度）の変遷についてアンケートを実施する。また、同時に学業面やJDS事業全般に対する要望についてもこの時に質問を行い今後のJDS事業にフィードバックを行う。

アンケート調査の実施（教官向け）

タイミング	: 帰国報告会開催時
目的	: 留学による能力変遷、学業面や生活面についてのモニタリング
内容:	
留学生の能力向上	: 技能（当該分野の開発課題に対する専門知識や技能、問題解決能力、論理的思考、判断力等）や態度（規律、倫理、責任感、熱意など）
学業面	: 開発課題解決に対する知識の習得状況、研究成果、留学生とのコミュニケーションは円滑だったか。研修中のトラブルの有無と内容
生活面	: 精神的・肉体的に健康であったか、悩みはなかったか
JDS 事業全般（受入プロセスについて）	: 受入プロセス・手続きは円滑か、受入に関するトラブルの有無と内容、本事業について今後期待すること、安全管理等

(3) エージェントによる留学生派遣元機関の直属上司に対するアンケート調査とインタビュー調査、及びJICAによるモニタリング調査時の提案

(「表3-1 モニタリング・評価の対象、内容、手段」 **モニタリング・評価 A、B、C**)

留学生の来日直前に留学生の所属機関の上司にアンケート調査を行う。また、JICAによる2016年実施予定のモニタリング調査では帰国留学生上司に対し、留学前と比べて留学後の能力にどのような変遷があったか、そして対象機関にはどれだけ留学による裨益があったかに

ついて調査を実施し、その際は、運営委員会とJICAとで元留学生の職場を訪問し、元留学生のパフォーマンスや、職場への留学成果の裨益について、上司と同僚に対するヒアリングも併せて実施することを提案する。アンケートについては、現地JICA事務所を通じて催促を図るなどにより、回答率を向上させることが望ましい。

#### 留学生派遣元機関の直属上司に対するアンケート調査・インタビュー調査

タイミング	: エージェントによる留学直前の実施と JICA によるモニタリング調査時
目的	: 留学による能力変遷
内容	:
留学生の能力向上	: 技能（当該分野の開発課題に対する専門知識や技能、問題解決能力、論理的思考、判断力等）や態度（規律、倫理、責任感、熱意など）

上記に加えて、帰国後3年目の調査においては「習得後の知識がどれだけ活用され、どれだけ対象機関に還元されているか」の観点からの質問も行うことが望ましい。

- ・ 留学の成果を仕事にどのように役立てているか
- ・ 留学で構築したネットワークをどのように活用しているか
- ・ 昇進、昇給等、待遇の違いは生じたか。
- ・ 留学で得た知識は対象機関にどのように裨益しているか。
- ・ 帰国留学生は当該政策策定・制度構築に関連する部署に配属されたか。
- ・ 対象機関の政策策定能力や制度構築にかかわる能力は帰国留学生により向上したか。それはなぜか。

### 3-4 課題・提言

#### (1) 募集活動について

##### 1) 広報セミナーについて

新聞、ポスター、リーフレット等による募集説明会に関する情報の流布も試みたが、募集説明会の参加者に行ったアンケート結果によると、ERDから各省庁に出された案内状を基に募集説明会の情報を得たとの回答が最も多かった。そのため、他の媒体による情報流布にも努めながら、スリランカ政府内で通常行われているERDからの案内状を基に説明会への参加希望者が所属省庁を通じて申し込む方法を今年以降も継続した方が良いと考える。余裕をもって地方の関係機関に連絡が届くように、開催予定日の1か月以上前に日程、場所、会場の詳細を詰めて、ERDに対して依頼状が出せるようにしたい。

9月13日の運営委員会で、議長より地方のセミナー開催の際はDistrict Secretaryを招待するように依頼があり、出席を依頼したところ、好意的にご参加頂き、JDSプログラムを知って頂く良い機会となった。来年以降セミナーの開催地が変わっても続けていくべき事項と考える。

帰国留学生のプレゼンテーションは実際の留学生生活をイメージしやすくなるに留まらない。実際セミナーで発表してもらった帰国留学生に対し、応募書類、特にリサーチプランの書き方について、セミナー後参加者より早速アドバイスを求める連絡があった

ようだ。そうした連絡に対して、帰国留学生は好意的にアドバイスを行っていただようであり、セミナー卒業生と応募者とのネットワーク形成に貢献していると言える。

一方、広報活動の今後の課題として、日本に留学すること、各受入大学院のプログラムの優位性について、いかにアピールするかについて、受入大学側、JICA、コンサルタントで検討していくことが重要であると思料する。一案として、募集要項において、同一コンポーネント内の大学のプログラムの特徴（コースワーク、選択科目、特別科目、リサーチトピック、教授陣等）を表（リスト）にして比較できるような記載方法を試みる。また、関係省庁（対象機関）の担当者には同一コンポーネント内の受入2大学が発行しているパンフレットを送付し、2大学の特徴が理解でき、比較できるような形での情報普及に努めることが考えられる。

今年の専門面接時、対象機関の担当者を招待して、受入大学の教員にそれぞれの大学、大学院プログラム、特別プログラム等についてプレゼンテーションをして頂き、意見交換を行った。今年は初年度ということもあり、大学のプログラムの内容が各省庁に未だ浸透していないが、来年以降も専門面接時にこうした機会を設けることで、特に同一コンポーネント内の2大学の特徴・相違点について理解が深まるよう努める。

## 2) 数学試験について

大学向けの要望調査表では、受入大学7校のうち3校につき「応募者について数学試験が必須」の欄にチェックが付いていなかった。そのため募集活動の際、広報セミナーやホームページなどで4大学については数学試験がない旨応募希望者に通知していた。ところが10月の各大学訪問において、数学試験受験を希望していなかった大学についても数学の試験は必要との見解であり、結局7受入大学全ての応募者が数学を受験することとなった。このためこれらの大学希望者に対しては、コンサルタントが個別に数学試験の受験を要請することとなり、現地で混乱が生じることとなった。

今後協力準備調査の際には、応募開始の前の段階の、受入大学候補の情報収集調査の段階で、数学試験の有無について、チェック欄に印が付いているかどうかに関わらず、再確認することが大切である。

## 3) 募集開始時期について

今年度については、第1回運営委員会にてJDS事業の枠組みを合意したのが9月13日であり、その後募集説明会の日程調整や広報資料の準備期間を経て、募集説明会を実施したのが10月初旬または中旬に入ってからとなった。その後の数学試験、英語試験、専門面接、総合面接等の選考スケジュールを考慮すると、応募書類締切を11月中旬とせざるをえず、応募書類受付開始から提出締切までの応募期間が実質1月あまりしか確保できなかったことから、今年度については応募期間が短かったと言わざるをえない。来年度以降は協力準備調査を実施しない分、少なくとも1か月程度は応募開始スケジュールを前倒しにして応募期間を十分に確保することが望ましい。

#### 4) 募集期間中の応募勧奨活動について

コンサルタントはスリランカ国各地で応募説明会を開催したが、それ以外にも、主要対象機関を個別訪問し、人材育成責任者と面談し、JDS事業の説明を行うとともに、出来るだけ沢山の希望者からの応募推奨を呼びかけた。各主要対象機関には応募の意思のある職員の人数、あるいは応募予定者リストを提出して貰い、応募予定者リストにあった職員に対して直接電話やメールによる応募推奨も行っている。来年度以降もこのように地道な応募推奨を行うことが望まれる。

#### 5) 応募者が少ない大学についての対応

今年度は応募者数が目標（定員の4倍）を余裕で超えた大学、満たなかった大学とに分かれた。コンサルタントが候補者にヒアリングしたところ、一校については最初の1年間は家族帯同が認められないこと、もう一校については工学系の学士を持っていることを条件としていることと受入分野が砂防のみであることが応募数に影響しているようであった。来年度以降は、早めの応募活動、応募者が多そうな対象機関への個別訪問による応募推奨を実施する。また、これ以外に、上記大学と協議を行い、受験資格要件を緩和できる可能性の有無について探っていく必要があると考える。

### (2) 今後の募集対象機関及び対象者について<sup>6</sup>

受入大学の内1校より中央銀行や財務計画省傘下の研究機関から積極的に応募推奨したい旨の要望があり、コンサルタントが本件について調査した結果、そもそも同省傘下には研究機関はないことと、中央銀行職員はNon All Island Service職員であるため、応募対象にならないことが分かり、その旨伝えて今回については了承していただいた。現地での補足調査においても、対象機関よりAll Island Service職員のみならず、Non All Island Service職員も対象にすべきとの声も多数あった。また、対象者を拡大することにより、より質の高い候補者が集まることも期待できる。今後受入大学の要望も踏まえつつ、運営委員会の場において受入枠を拡大するかどうか議論すべきであると思料する。

### (3) エージェントによる留学生生活支援体制について

コンサルタントは、すでにガーナJDS事業のエージェントとして留学生の支援にあたり、地域支援員とネットワークを構築しており、来日中の留学生に対して、地元在住者ならではのきめ細やかで親身なサポートを得ている。支援内容は具体的には、以下等をお願いしている。

<sup>6</sup> All-island Service には 10 種類のサービスカテゴリーがあり、そのカテゴリーに属さない職種は Non All-island Service として各省庁から独自に採用される。また、その他の大きな違いとして、All-island Service に属すサービス（職種）は中央・地方政府、また省庁の別なく業務内容が共通するため、中央から地方、また省庁間の異動を伴うが、Non All-island Service はその異動を伴わない。両者の見分け方について、応募者に応募書類として提出を義務付けている、‘Confirmation Letter’から見分けることが出来る。まず、同書類に記載されている、サービスのカテゴリーを確認し（JDS 応募者の多くは、Administrative/ Planning/ Accounting/ Agriculture/ Engineering Service のカテゴリー）、該当するカテゴリーの記載がなければ、All-island Service ではなく、Non All-island Service であると考えられる。

- ・ 地元案内・観光
- ・ ゴミ出しマナーやルールなどの生活アドバイス
- ・ 英語が通じる病院の紹介
- ・ (エージェントや研修監理員が対応不可能な) 突発的な病院への付き添い
- ・ メンタルサポート
- ・ 買い物支援

スリランカの受入大学7校のうち6校はコンサルタントにとっては新規の付き合いになる。このため新たに信頼できる地域支援員確保する必要があるところ、留学生来日までに時間があるとは言え、早い段階からそれぞれの大学が所在している地域の外国人支援NPOや大学の留学生支援サークル等と連携をし、支援員候補者を探して早く留学生支援体制を構築することとしたい。

#### (4) 今後のJDS事業全般の検討課題について

スリランカでは、最近入省する省庁職員については、既に修士号を持っている場合が多いとのことであり、博士課程への進学も認めるオーストラリア奨学金に比べ、修士課程のみを対象とするJDS事業は魅力に欠ける、との声が留学中、及び帰国留学生から聞かれた。また、スリランカでは、省庁を休職して留学する場合、帰国後留学期間の4倍の長さにあたる期間（JDS事業の場合は8年）は、再留学できないとの規程があるとのことである。8年経過すると、多くの奨学金の応募年齢制限である40歳を過ぎてしまい、その段階で希望者が博士課程に応募しようとしてもできないのが現状となっている。そういった理由からJDS事業が魅力が薄いとの声も聴かれた。このような複数の国の奨学金から選ぶ立場である留学生の意見も勘案し、JDS事業についても、博士課程への拡大は実務者育成を目指すJDS事業の趣旨を踏まえつつも、他国と比較してより魅力的な奨学金となるよう、今後慎重に検討されるべきであると思料する。

来日中・帰国後留学生からの要望として根強かったのが自動車やオートバイの運転を許可していただきたい、というものである。都心の大学に通う学生であれば、通学や日常生活で公共交通機関を利用することは十分可能である。しかし、地方の大学において、事実上移動手段は車に頼らざるをえない。特に雪国では、街に行く途中に坂道が多いうえに冬は雪に閉ざされるため、自転車での移動も現実的ではない。車を所有しなければスーパーに買い物に行くことさえままならない状態である。このような大学に通う学生がより快適に過ごすためには自動車やオートバイの運転を許可し、選択の自由を与えることを検討すべきだと考える。なお、留学生へのインタビュー調査によれば、AusAIDは留学生の車の運転を許可しており、同奨学金の魅力の一つになっている、ということであった。

また、現在書籍購入費は1年目と2年目にそれぞれ留学生一人につき3万円が支給されることになっている。但し、留学生が使用する洋書のテキストブックは高額であり、1冊数千円以上するものが珍しくなく、多くの留学生が1学期分の購入にも満たないことを指摘していた。今後の消費税の値上げも考慮し、書籍購入費の金額には再検討の余地があると思料す



る。なお、同時に特別プログラムの一環で図書を購入する余地もあることを大学側に伝え、その活用についても同時に促したい。

#### (5) 応募者・留学生に対する啓蒙活動

Phase IIにスリランカ人留学生を受け入れた大学教官へのインタビューの結果によれば、来日中に女性留学生が妊娠し日本で出産したケースが2回連続して発生し、その対応に苦慮した、とのことであった。また、論文執筆の際に剽窃に対する罪悪感が薄く簡単にインターネットから引用したり、他人の論文を写したりするケースがあったという。これらの問題は恐らくスリランカのみならず、他国JDS事業でも多かれ少なかれ共通してみられると考えられるが、応募段階、留学決定直後、来日前後オリエンテーション、来日後モニタリング等、様々な段階で注意を呼び掛けていくことが大切であると思料する。

### 3-5 JDS事業の妥当性

#### (1) スリランカ国開発戦略と我が国の対スリランカ援助方針におけるJDS事業対象分野／開発課題の位置づけ

スリランカの国家開発戦略である「マヒンダ構想（2006-2016）」では、スリランカが解決すべき課題である「地方経済活性化、市場経済発展、貧困削減、財政改革等」の分野における人材育成の重要性が強く謳われている。

JDS事業を継続することにより、引き続き一貫性のある開発政策の立案・実施・評価・管理を担う中核的な行政官の能力向上を図り、開発計画が効果的・効率的に実施され、経済成長の持続的発展が期待される。さらに、新規JDS事業の重点分野（サブプログラム）及び開発課題（コンポーネント）は、「マヒンダ構想」に沿ったものとなっている。また、我が国の2012年策定の対スリランカ「国別援助方針」では、援助重点分野として、「経済成長の促進」、「後発開発地域の開発支援」、「脆弱性の軽減」をしている。これらとJDS事業が対象としている開発課題とが合致していることより、妥当性は高いと言える。表3-2に新規JDS事業のマヒンダ構想や日本の援助方針との整合性について取りまとめた。

上記開発課題を解決するため、行政官とその所属対象機関の能力向上を意図するJDS事業は、スリランカの国家政策及び我が国の同国に対する援助政策に合致しているといえる。

表3-2 新規JDS事業のスリランカ開発戦略や日本の援助方針との整合性

JDS の重点分野	JDS の開発課題	「マヒンダ構想」による分野課題	「マヒンダ構想」の課題克服ツール	「マヒンダ構想」による人材育成ニーズ	我が国の援助政策及び、JDS 事業の整合性
経済成長基盤整備のための人材育成	1-1 公共政策・財政	・ 公共セクターによる財政赤字や政策に一貫性の欠如により地方間、民族間の格差拡大、社会保障システムの制度疲労	・ 後発開発地域の開発支援 ・ 格差の無い発展を前提とした経済開発の推進	・ 戦略的、効率的に政策の立案・実施が出来る人材の育成	・ JDS 事業にて経済成長促進に貢献する政策や計画立案・実施に関わる行政官育成が可能
	1-2 開発経済	・ 脆弱な経済構造	・ 経済成長の促進 ・ 2016 年までに一人当たりの GDP を 4000 ドルまでに倍増する（所得倍増計画）	・ 持続的経済成長を維持するための経済政策の立案・実施が出来る人材育成	・ JDS 事業において持続的な経済成長と社会・経済安定に資する人材育成が可能
	1-3 ビジネス環境整備	・ 民間セクターの投資活性化による各セクターでの生産性向上と新規産業育成、既存産業の高度化	・ 経済成長の促進 ・ 2016 年までに一人当たりの GDP を 4000 ドルまでに倍増する（所得倍増計画）	・ 投資増加に向けた制度整備、規制緩和により民間セクターが活動できる環境整備、グローバル経済に対応し得る人材育成	・ JDS 事業においてマーケティング強化、投資整備環境、新規産業育成等、経済成長を維持するための人材育成
	1-4 環境配慮・防災	<b>【環境配慮】</b> 経済発展に伴い、環境破壊・汚染や住民移転等、環境社会に対する配慮や、商業活動の活発化やごみ問題 <b>【防災】</b> 関連省庁間の調整の困難さ、防災対策及び防災対策予算、人員体制及び技術的な能力強化	<b>【環境配慮】</b> ・ 脆弱性の軽減 ・ 「マヒンダ構想」にて都市化に伴う環境問題への対応 <b>【防災】</b> スマトラ沖地震・津波災害を機に災害対策法の整備強化	<b>【環境配慮】</b> 経済発展に伴い生じてきた新たな課題に対応できる行政官の人材育成 <b>【防災】</b> 関係機関の人材育成	・ 日本の経験を元に、JDS 事業では環境配慮や、環境影響評価能力の向上や、災害警報発出、災害脆弱知育への情報伝達、災害対応、コミュニティ防災等に関する人材育成が可能

## (2) 分野の選択についての妥当性

### 1) 公共政策・財政

同国政府は2010年に国家開発戦略「マヒンダ構想」（2010-2016）を発表し、「地域間格差、インフラの欠如、政策のオーナーシップと一貫性の欠如、財政の悪化、債務問題等」をスリランカが解決すべき課題と位置づけ、格差のない発展を前提とする経済開発を推進している。スリランカは内戦終了後、年率8%という着実な経済成長を達成している。一方で、長年の紛争や公共セクターの肥大化により対GDP比7~8%の大幅な財政赤字が生じている。また、複雑な政治システムによる政策の一貫性の欠如により、地方間、民族間の格差拡大、社会保障システムの制度的歪み等が顕在化している。「マヒンダ構想」を具体化するためには、長期的な視野に立った上での戦略的・効果的な公共政策・財政政策を立案、実施できる人材が求められている。

本開発課題「公共政策・財政」は、スリランカJDS事業Phase Iでも対象となっており、これまで1受入大学17人を受け入れている。JDS事業を通じ、引き続きスリランカの若手行政官とその所属する関連機関の育成を支援することは、同国政府の適切な公共政策・財務政策立案・実施能力の向上に資すると判断できる。

### 2) 開発経済

スリランカは2009年の紛争終結後、国家開発戦略「マヒンダ構想」推進のもと、経済成長を推進している。しかしながら、同国は公共セクターの肥大化による深刻な財政赤字や恒常的なインフレに見舞われ、さらに経常収支は貿易赤字を海外労働者送金や国際援助資金により補てんするなど、脆弱な経済構造となっている。従って今後のさらなる経済成長のためには、マクロ経済の安定化や市場経済の効率的な活用など、健全な経済政策の確保が求められている。

本開発課題「開発経済」の関連としては、スリランカJDS事業Phase Iで「マクロ経済及び開発経済」が対象となっており、これまで1受入大学14人を受け入れている。

### 3) ビジネス環境整備

国家開発戦略「マヒンダ構想」では、2016年までに一人当たりGDPを倍増する所得倍増計画を発表している。しかしながら同計画達成のためには、対外直接投資を利用したインフラ投資や外国投資招致、官民連携強化、新規産業育成、国内産業の活性化や国際競争力の向上や、それらを阻む各種規制の見直しが不可欠である。このため、国内外からの投資増加に向けた制度整備、規制緩和により民間セクターが活動できる環境整備、グローバル経済に対応し得る人材育成が求められている。

### 4) 環境配慮・防災・気候変動

同国では、経済発展に伴い、環境破壊や環境汚染についても深刻になっている。例えば都市化や工業化による大気汚染、水質汚染、土壌汚染の深刻化、産業廃棄物や森林破

壊等が挙げられる。「マヒンダ構想」においても、環境に配慮した持続的な経済発展を謳っている。

一方、同国は洪水、地滑り、津波といった自然災害に対しても脆弱であり、防災対策が喫緊の課題ではあり、同国では災害対策や防災体制強化に取り組んでいるが、関連各省庁間の調整の困難さや防災対策予算、人員体制及び技術的なノウハウ等は依然不十分となっており、実効的な防災対策の強化をいかに図っていくかが課題となっている。

我が国は、スリランカへの国別援助方針の中で「脆弱性の軽減」を重点分野の一つとして位置づけており、関連する機関において総合的に防災に取り組むための調整力、技術力の強化と防災意識の向上の必要性を挙げている。

以上より、4分野すべてにおいて、スリランカの更なる持続的経済開発のために政策立案・実施が出来る人材の育成が求められていることから、分野の選択における妥当性は高いと考えられる。

### (3) 対象機関の人材育成ニーズから見た妥当性

補足調査において、各対象機関が直面している人材育成のニーズをヒアリングした結果を「2-1 JDS事業の概要 (3)補足(状況確認)調査の実施」で述べた。多くのドナーが奨学金プログラムを提供しているが公務員の政策策定・実施能力向上を目的としている奨学金はJDS事業のみとのことであった。多くの機関が政策策定・実施における若手人材の育成を要望しており、行政官の行政能力向上を目的とした人材育成を行うという意味で、ニーズと合致していると考えられる。

また、同国では、修士号（もしくは同等の資格）を有することが昇進の条件となっているため、行政官の修士号取得を促進するJDS事業に対するニーズは高い。

### (4) 妥当性についての結論

以上の諸点を検討した結果、JDS事業の同国での実施は妥当性が高いと判断できる。同事業が目指す政策・立案に係る若手行政官個人、そして行政官が所属する対象機関の組織としての能力向上は、スリランカの上位計画とも整合し、我が国の援助重点分野とも合致するものであり、従って妥当性は極めて高い。また、公共行政・財務、開発経済、ビジネス環境整備、環境配慮・防災・気候変動分野を選択し、これらの分野におけるスリランカの若手官僚とその所属する関連機関の能力向上のための支援をすることは、同国政府の適切な政策策定・実施に貢献すると判断できる。そして、補足調査で対象機関に人材育成ニーズをヒアリングした結果、行政官の行政能力の向上を目的としたJDS事業の主旨は、先方の要望と合致していると考えられる。

## 3-6 結論

本事業は、前述のように行政官個人の育成のみならず対象機関の政策策定能力・事業管理能力の育成が向上し、各国の開発課題の解決に貢献すること、さらには、人的ネットワークの構築を通して、将来的に両国のパートナーシップの強化に寄与することが期待されている。本事業は、

スリランカの国家開発政策や我が国の政策とも合致し、分野の選択についても適切、かつ対象機関の人材育成ニーズとも合致し、妥当性が高いと判断される。また、スリランカ国政府はPhase Iの経験もあり、JDS事業における同政府の役割についても理解しており、同国政府の実施体制は本事業を遂行するうえで問題ないと考えられる。しかし、「3-3 課題・提言」で触れたように、今後の活動については以下の点が改善・整備されれば、本事業はより円滑かつ効果的に実施しうると考えられる。

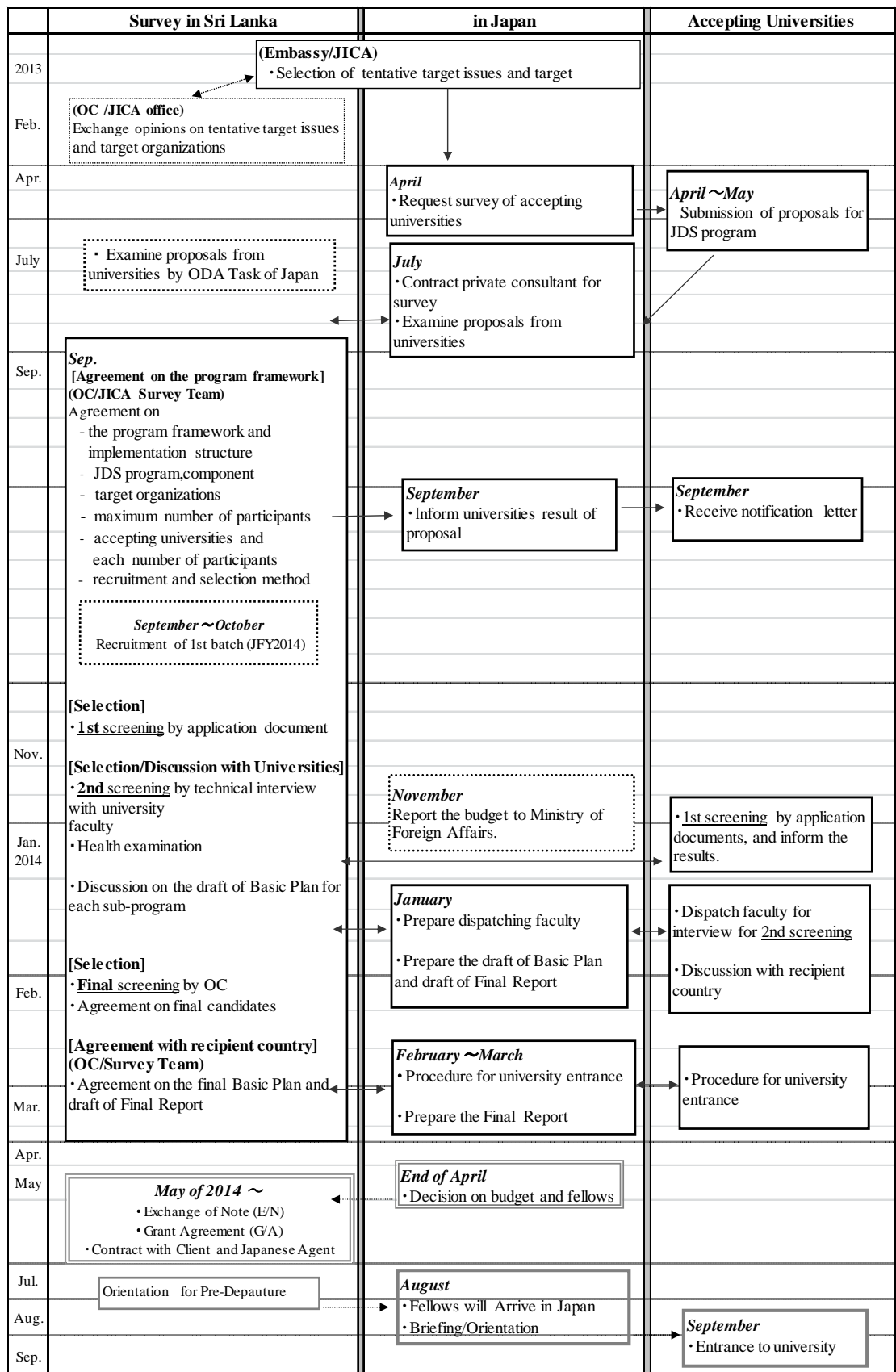
- 募集活動について
  - ・ 前倒しの広報セミナー開催とセミナーへのDistrict SecretaryやJDS卒業生の参加
  - ・ 協力準備調査において、受験者に数学試験を課すか否かについて応募開始前に受入大学に再確認。
  - ・ 募集開始時期の前倒し
  - ・ 対象機関に対する募集期間中の応募勧奨活動の推進
  - ・ 応募者が少ない大学について受入大学と受験資格要件を緩和できる可能性の有無について協議
  - ・ 日本に留学すること、各受入大学院のプログラムの優位性について、いかにアピールするかについての日本側関係者間での検討
- 今後の対象機関について
  - ・ 「環境・防災」分野以外について、All Island Service職員のみならず、Non All Island Service職員を対象とする可能性の検討
- エージェントによる留学生生活のサポートについて
  - ・ 地域密着型の地域支援員の配置
- 今後のJDS事業全般の検討課題について
  - ・ 博士課程への進学の見直し
  - ・ 地方在住留学生について、自動車やオートバイの運転許可
  - ・ 書籍購入費の見直し

添付資料

添付資料1. 協力準備調査 調査団員・氏名

氏名	所属・役職	役割
官団員		
梅永 哲	JICA 資金協力業務部次長	団長
浦山 友里恵	JICA 資金協力業務部 実施監理第二課 主任調査役	受入方針/計画管理調整
コンサルタント		
飯塚 謡子	(株)日本開発サービス 調査部 主任研究員	受入計画 (総括/人材育成計画)
野々口 敦子	(株)日本開発サービス 調査部 研究員	受入計画 (研修計画)
加藤 尚子	(株)日本開発サービス 調査部 研究員	募集・選考・出願

添付資料2. JDS事業 協力準備調査フロー図





添付資料3. 協力準備調査日程（官団員）

日付	主な業務等	協議先
9月9日	成田発コロンボ着	
9月10日	団内打合せ JICA 事務所打合せ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• JICA スリランカ事務所 阿部次長、浅岡所員、ローカルスタッフ Cabral 氏</li> </ul>
9月11日	運営委員会メンバー意見交換	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Ministry of Public Management Reform 在スリランカ日本国大使館</li> </ul>
9月12日	主要対象機関意見交換	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Ministry of Local Government &amp; Provincial Councils</li> <li>• Ministry of Industry and Commerce</li> <li>• Ministry of Irrigation and Water Resource Management</li> <li>• Ministry of Disaster Management</li> </ul>
9月13日	運営委員会開催 協力準備調査 M/D 署名 大使館報告	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 運営委員会メンバー</li> </ul>
9月14日	コロンボ発カンボジア着（梅永） コロンボ発東京着（浦山）	

**MINUTES OF DISCUSSIONS**  
**ON THE PREPARATORY SURVEY OF**  
**THE JAPANESE GRANT AID**  
**FOR HUMAN RESOURCE DEVELOPMENT SCHOLARSHIP**  
**TO THE DEMOCRATIC SOCIALIST REPUBLIC OF SRI LANKA**

In response to a request from the Government of the Democratic Socialist Republic of Sri Lanka (hereinafter referred to as “the Sri Lanka”), Japan International Cooperation Agency (hereinafter referred to as “JICA”) decided to conduct a Preparatory Survey in respect of “Japanese Grant Aid for Human Resource Development Scholarship” (hereinafter referred to as “the JDS Program”) to be implemented in the Democratic Socialist Republic of Sri Lanka.

In view of the above, JICA dispatched a Preparatory Survey Team (hereinafter referred to as “the Team”) headed by Satoshi UMENAGA, Deputy Director General, Financial Cooperation Implementation Department, to Colombo from 9<sup>th</sup> to 13<sup>th</sup> September, 2013.

The Team held a series of discussions with the relevant officials of the Sri Lanka. The both parties confirmed the design of the JDS Program and the related items attached hereto.

Colombo, September 13, 2013

梅 永 哲

---

Satoshi UMENAGA  
Leader  
Preparatory Survey Team  
Japan International Cooperation Agency



---

Dr. B. M. S. BATAGODA  
Deputy Secretary to the Treasury  
Ministry of Finance and Planning  
The Government of the Democratic Socialist  
Republic of Sri Lanka

**I. Design of the JDS Program**

**1. Maximum Number of JDS Participants**

The total number of JDS participants for the first batch in Japanese fiscal year 2014, shall be fifteen (15) and this number would indicate the maximum number per batch for four batches, from Japanese fiscal year 2014 to 2017.

**2. JDS Sub-Program and Component**

Based on the discussion held between the both parties, target priority area as Sub-Program and target development issues as Component are identified as below.

Priority Area as Sub-Program :

Human Resource Development for Promotion of Economic Growth

Development Issues as Component :

- Public Policy and Public Finance
- Economics including Development Economics
- Business Management
- Environment Management/Disaster Management and Climate Change

**3. Target Organizations and Target persons**

Based on the discussion held between the both parties, the target organizations are all ministries and the target persons were identified as ANNEX-2 "Design of JDS Program for four batches".

**4. The JDS Operational Committee and Managing Organizations**

Both parties agreed that the JDS Operational Committee (hereinafter referred to as "O/C") consists of the organization as following from Japanese fiscal year 2014 to 2017.

- Sri Lankan Side
  - The Department of External Resources of the Ministry of Finance and Planning (hereinafter referred to as "ERD")
  - Ministry of Public Management Reforms
- Japanese Side
  - The Embassy of Japan
  - JICA Sri Lanka Office

Both parties confirmed that "ERD" should take the role as managing organization.

**5. Accepting Universities and Supposed Numbers of JDS Participants per University**

Based on the discussion held between the both parties, it was agreed that the educational

programs of following universities are suitable to the development issue in Sri Lanka.

(1) Development Issue as Component :

Public Policy and Public Administration

- National Graduate Institute for Policy Studies (GRIPS) (2 slots)
- Hitotsubashi University (2 slots)

(2) Development Issue as Component :

Economics including Development Economics

- University: Hiroshima University (3 slots)

(3) Development Issue as Component :

Business Management

- University: Waseda University (2 slots)
- University: International University of Japan (IUJ) (2 slots)

(4) Development Issue as Component :

Environment Management/Disaster Management and Climate Change

- University: University of Tsukuba (2 slots)
- University: The University of Tokyo (2 slot)

**6. Research Area of JDS Participants**

Those assumed development needs described above shall be notified as “research area” to JDS applicants in order to indicate the direction of study/ research of each JDS participant as well as to accepting universities in order to prevent the mismatching between accepting universities and JDS applicants.

**7. Basic Plan for Each Component**

The Team explained a Basic Plan on each component, which includes the background, project objectives, summary of the activities of the project and other, will be prepared for mutual understanding of both parties during the Preparatory Survey.

**8. Monitoring and Evaluation**

Both parties confirmed the importance of the monitoring and evaluation, and JICA shall propose the evaluation method to the Operating Committee.

**II. Other Matters Discussed**

**1. Recruitment and Selection of participants**

Both parties confirmed the schedule of selection for the first batch referring to “Flowchart of the Preparatory Survey” (Annex-3).

ERD as Managing Organization is responsible for distribution of application form to the target organizations.

## **2. Working Space**

The Team requested to Sri Lankan party for considering about providing a working space from April, 2014 for a consultant during the survey and for an agent which implements the JDS Program.

- Annex1: Flowchart of JDS
- Annex2: Design of JDS Program for four batches
- Annex3: Flowchart of the Preparatory Survey of JDS

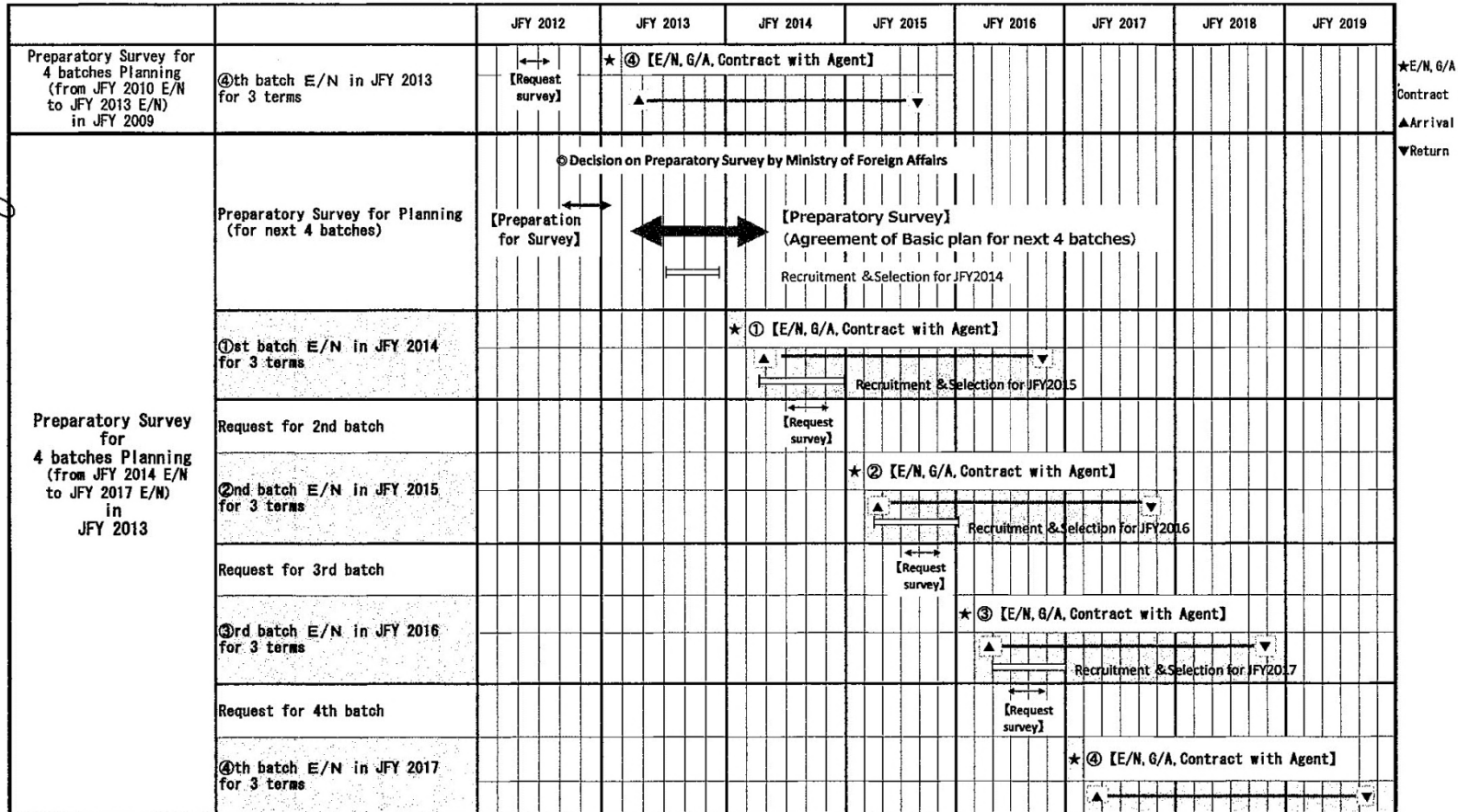


Flowchart of JDS

[Annex 1]  
2013.8  
JICA

*GA*

*R*

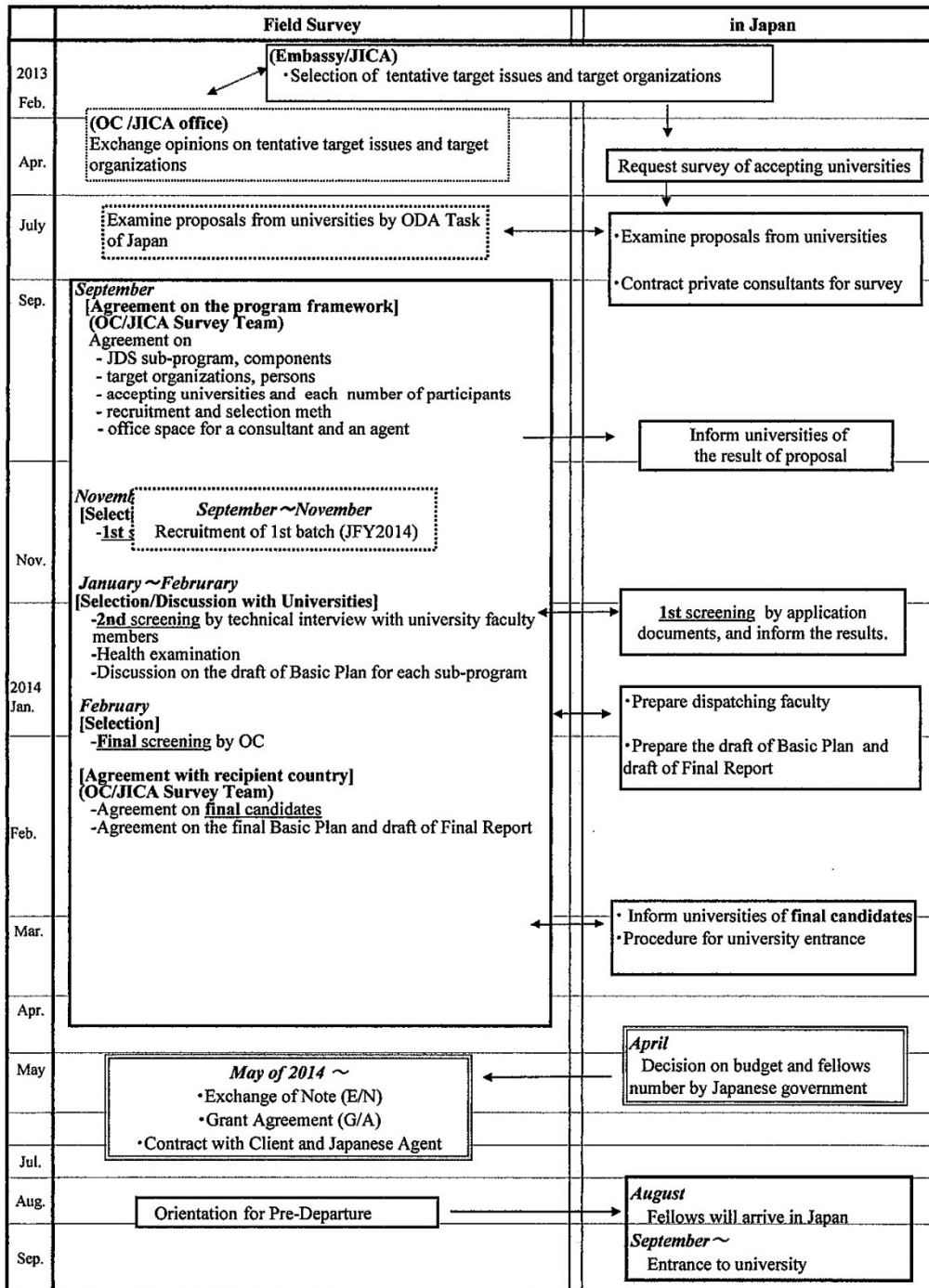


**Design of JDS Program for Four Batches  
(from JFY 2014 to JFY 2017)**

Sub-Program (JDS Priority Areas)	Component (Development Issue)	Expected Theme of Research / Possible Fields of Study	Target Organizations, Target Persons	University	Slot
1.Human Resources Development for Promotion of Economic Growth	1-1. Public Policy and Public Finance	<u>Possible Fields of Study:</u> • Fiscal Policy, Social Policy, International Development, & Public Administration	Target Organizations: All ministries  *Managing Organization is Department of External Resources, Ministry of Finance and Planning  Target Persons: All Island Service Officers for Components 1-1 to Components 1-3. For Component 1-4, target persons include All Island service Officers as well as non All Island Service Officers.	National Graduate Institute for Policy Studies	2
		<u>Degree:</u> • Master of Public Policy • Master of Public Administration		Hitotsubashi University	2
	1-2. Economics Including Development Economics	<u>Possible Fields of Study:</u> • Economic Development • Macroeconomics • Development Policy  <u>Degree:</u> • Master of Development Economics		Hiroshima University	3
	1-3. Business Management	<u>Possible Fields of Study:</u> • Business Administration, SME Support • Investment Improvement, & Industrial Development  <u>Degree:</u> • Master of Business Administration • Master in Commerce		Waseda University	2
		1-4. Environment Management/ Disaster Management and Climate Change		<b>[Environment Management]</b> <u>Possible Fields of Study:</u> • Environmental Policy • Environmental Management • Environmental Study <u>Degree:</u> • Master of Environmental Management • Master of Environmental Policy	International University of Japan
	<b>[Disaster Management]</b> <u>Possible Fields of Study:</u> • Regional Disaster Prevention • Disaster Management Policy • Disaster Risk Management • Disaster Science <u>Degree:</u> • Master of Disaster Management • Master of Civil Engineering			The University of Tokyo	2
Maximum slots per year					15

Flowchart of the Preparatory Survey for JDS

[Annex 3]  
August, 2013. JICA



Handwritten marks: a circled 'R' and a signature.



添付資料5. 重点分野／開発課題毎の4か年受入人数

サブ・プログラム (重点分野)	コンポーネント (開発課題)	主管官庁	対象機関／対象者	大学	4バッチ受入人数案					
					第1	第2	第3	第4	計	
経済成長基盤整備のための 人材育成 (Human Resources Development for Promotion of Economic Growth)	公共政策・財政 (Public Policy and public Finance)	財務計画省 対外援助局 (Department of External Resources, Ministry of Finance and Planning)	全省庁All Island Service職員	政策研究大学院大学 政策研究科	2	2	2	2	8	
				一橋大学 国際・公共政策大学院	2	2	2	2	8	
	広島大学大学院 国際協力研究科			3	3	3	3	12		
	国際大学 国際経営学大学院			2	2	2	2	8		
	早稲田大学 商学研究科			2	2	2	2	8		
	開発経済 (Economics Including Development Economics)		環境配慮・防災 (Environment Management / Disaster Management and Climate Change)	全省庁職員 (All Island Service 職員及びNon-all Island職員)	筑波大学 生命環境科学研究科	2	2	2	2	8
					東京大学大学院 工学系研究科	2	2	2	2	8
				計					15	15

## 添付資料6. 重点分野基本計画

### 人材育成支援無償（JDS）事業 重点分野 基本計画

#### 重点分野の基本情報

1. 国名：スリランカ
2. 重点分野（サブ・プログラム）名：経済成長基盤整備のための人材育成
3. 運営委員会：財務計画省、公共管理改革省、日本大使館、JICA スリランカ事務所

#### 個表1

### 1. サブ・プログラム／コンポーネントの概要

#### (1) 基本情報

1. 重点分野（サブ・プログラム）名：経済成長基盤整備のための人材育成
2. 開発課題（コンポーネント）名：公共政策・財政
3. 主管省庁：財務計画省対外援助局
4. 対象機関：全省庁

#### (2) 背景と必要性（当該国の開発政策における本事業の位置づけ）

同国政府は国家開発戦略「マヒンダ構想」（2006-2016）を発表し、「地域間格差、インフラの欠如、政策のオーナーシップと一貫性の欠如、財政の悪化、債務問題等」をスリランカが解決すべき課題と位置づけ、格差の無い発展を前提とする経済開発の推進を打ち出している。同国は一貫した市場経済路線をとる一方で保健医療や教育サービスは無償で提供しており、南アジアの中では高い社会指標を達成している。しかしながら、長年の紛争や肥大化した公共セクターによる財政赤字や複雑な政治状況による政策の一貫性の欠如により、地方間、民族間の格差拡大、社会保障システムの制度疲労等深刻な問題を抱えており、これら状況に対応していくためには、長期的な視野に立った上での戦略的、効率的な政策を立案、実施できる人材が求められている。

#### (3) 我が国及びJICAの援助方針とその実績（これまでのJDS留学生の成果含む）

2012年6月に策定された我が国の対スリランカ国別援助方針では、重点分野として「経済成長の促進」「後発開発地域の開発支援」「脆弱性の軽減」を設定している。同国別方針では、スリランカが更なる適切で効率的な経済・社会運営を行えるよう、高等教育を始めとする人材育成・科学技術などの分野への支援を検討し、また、同国の経済発展を持続的に支えるためには、環境保全にも配慮する、としている。

本開発課題「公共政策・財政」は、スリランカ JDS 事業 Phase I でも対象となっており、これまで1受入大学17人を受け入れている。

### 2. 協力の枠組み

#### (1) 事業の目的

本邦大学院での学位取得（修士）を通じ、同国の社会・経済開発に関わり、将来的に重要な役割を果たすことが期待される若手行政官などを育成することを目的とする。また、人的ネットワーク構築を通して、将来的な両国のパートナーシップの強化に資するものとする。

## (2) 案件目標

### ① 上位目標

各種産業基盤が効率的・効果的に整備され、経済成長が維持される。

### ② プロジェクト目標：

- ・ スリランカの経済成長促進に貢献する政策や計画の立案・実施に関わる行政官の実務に即した能力を育成する。
- ・ 帰国留学生が日本のよき理解者として両国間の基盤強化・拡大に貢献する。

## (3) 目標の指標

### ① 帰国留学生の修士号取得

### ② 帰国留学生の所属機関での政策策定・制度構築に関連する業務への従事

## (4) 受入計画人数及び受入大学

- ・ 政策研究大学院大学 政策研究科 2人/年 計8名/4年
- ・ 一橋大学 国際・公共政策大学院 アジア公共政策プログラム 2人/年 計8名/4年

## (5) 活動

### 【政策研究大学院大学】

目標	内容・目標達成手段
留学中	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 政策課題に対して現実的なソリューションを生み出すために必要な、政策論的及び数理的な接近方法や、エビデンスベースの政策形成手法を習得する。</li> <li>・ 政策形成、実施の手段として、プログラム・プロジェクトのマネジメント手法を習得する。</li> <li>・ 日本及びアジア諸国等の政策経験と比較し、相対化することで、同国が当面する政策課題の構造、焦点、ビジョンが整理される。</li> <li>・ 所属機関が所掌する実際の政策課題について、ソリューションとして適用する政策・制度のアウトラインと、それを形成・構築するアプローチが予備的にとりまとめられる。また、その過程で、政策形成に関する実践的能力が向上する。</li> <li>・ 政策の実効性を高める方策として、政策課題を設定し、政策を形成、実施する一連の課題解決プロセスについて、同国固有の社会経済的条件を踏まえた実効的な改善策が予備的にとりまとめられる。また、その過程で、行政府内において改革を具体化するために必要な実践的能力が向上する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 経済学、開発学、政治・行政学・国際関係論、社会システム分析の4分野にわたって、行政官として必須の基礎的知識を最短期間で獲得できるようにデザインされたコア科目を中心に履修する。また、4分野のうちの1つについて、集中的に応用科目・発展科目を履修する。</li> <li>・ 現実の政策課題を取り上げて、上で学んだ手法を適用しつつ、解決方法を考え、その内容を研究計画としてまとめる。</li> <li>・ 各分野を専門とする教員によるインテンシブな論文指導を受けながら、その内容をPolicy Paper論文として提出し、口頭報告でディフェンスをする。</li> <li>・ 同国と同様の中所得国特有の政策課題やそれを解決してきた諸外国の行政官・学生との間で経験を共有する。</li> <li>・ 東南アジア5ヶ国と実施している行政組織のマネジメント・モデルに関する研究と同様のものを限定的な規模で、同国国内行政省、地方自治省等とともにやり、同国国内における事例研究、同国もしくは日本におけるワークショップ等を実施する。</li> <li>・ 我が国の政策経験の応用を促進するために、典型的な政策事例について実際の現場において事例研究を行う。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>GRIPS Summer Programを開催し、そこでスリランカを取り巻く現状に深く関わるテーマに関わる複数のコア・イベント（各国政府、国際機関（元）職員等による特別講義、国内におけるフィールドトリップ、学生自身の研究成果を発表するコンファレンス等）を開催する。</li> </ul>
論文作成を通じ課題に対する解決策を考察する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>論文については、留学生本人が直面する行政府の制度設計や運営・管理上の問題を解決する方策を、日本やアジア諸国の経験に学びつつ考えさせるものを想定し、専門の教員、特に、行政官や開発機関職員のように公共部門の運営にたずさわった経験がある教員を中心に指導体制を組み、机上の空論ではない、実践的な成果を求める指導を行う。</li> </ul>

### 【一橋大学】

目標	内容・目標達成手段
留学中	
経済政策の立案・遂行する上で基礎となる経済学理論と経済学的アプローチを修得する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>マクロ、ミクロ、公共経済、計量経済学などのコアコースを通じ経済理論と経済学的アプローチを修得させる。</li> </ul>
政策の分析評価の具体的な手法を修得する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>税、財政、公共投資、社会保障、マクロ政策等への経済理論の適用を学ぶ応用科目を通じ、具体的な政策課題にかかわる経済学、政策上のスキルを身につける。</li> </ul>
政策の現場に於いて、理論と手法と現実がどのように関連しながら展開するか知識を修得する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>ワークショップや集中講義を通じ、各国の様々な政策の具体的な事例について学ぶ。</li> </ul>
少人数のセミナーやinteractiveな授業ならびに経済政策に関連する議論を通じて問題点を明確化し、共通の認識を醸成する能力、並びに自らの意見を他者に伝え、説得する能力を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導教員のもとでの少人数ゼミを2年間続けることで、多角的な思考と議論のスキルを身につける。</li> </ul>
修士論文作成を通じ、特定の政策課題について、国の事情・制約要因を検討し、実証的な手法で政策効果を測定・推定し、理論的にも整合性のある政策提言を行う経験を積む。	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導教員の下で高度な内容を伴う、政策課題に直結した修士論文を作成することで、具体的な政策分析と政策策定能力を身につける。</li> </ul>
異なる文化、価値観への理解を深める。	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本での学習や他のアジア諸国からの留学生との交流を通じ、異なる文化、価値観への理解を深める。</li> </ul>
特別プログラムの実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>特定の政策分野に関する外部の専門家による講義やゼミを通じ、より高度で現実に密着した政策への理解を深める。</li> <li>学習のための基礎となる数学、英語能力を充実させるための特別授業や必要に応じ個別的な指導を行う。</li> <li>地方における具体的な公共政策課題とそれに対する取り組みを直接見聞する為、地方行政機関等を訪問し、職員等との意見交換を行う機会を設ける。</li> </ul>

## (6)-1 日本側の投入

- ① 受入大学による事前・事後・留学中の特別活動の経費（現地での活動を含めた事前指導、特別講義・ワークショップ等の実施、帰国後のフォロー等）
- ② 留学に係る経費（渡航費、本邦滞在中の奨学金、検定料、授業料等）
- ③ 留学中の支援経費（モニタリング、各種生活支援等）

## (6)-2 投入期間・人数

1 バッチ 4名×4カ年=16名

### 【内訳】

#### 政策研究大学院大学：

2014年（～2016年修了）：2名	2015年（～2017年修了）：2名
2016年（～2018年修了）：2名	2017年（～2018年修了）：2名

#### 一橋大学：

2014年（～2016年修了）：2名	2015年（～2017年修了）：2名
2016年（～2018年修了）：2名	2017年（～2018年修了）：2名

## (7) 相手側の投入

- ① 受入大学関係者等との協議参加
- ② 留学生の派遣
- ③ 事後活動（所属機関・対象機関における留学で習得した知識の普及機会の設定）

## (8) 資格要件

- ① 職務経験等
  - ・ 試用期間（probation period）を終えた正規職員であること。
  - ・ All Island Service Officers または Non All-island Officers であること。但し、semi-government は除外。
  - ・ 中央銀行は一橋大学にのみ応募可。但し最大各バッチ1名のみ留学生として選定。
- ② その他：
  - ・ スリランカ国籍を持つこと
  - ・ 原則として40歳未満（留学年4月1日現在）
  - ・ 軍に現に奉職していない者。
  - ・ 本事業の目的を正しく理解し、学業の修了・帰国後、母国の発展に貢献する明確な意思を有する者。
  - ・ 原則、既に海外支援による奨学金を受給し、留学の結果、「修士」の学位を取得していない者。また、現在、他の海外支援による奨学金を受給していない者あるいは受給予定でない者。
  - ・ 心身ともに健康である者。
  - ・ 日本に留学するうえで、十分な英語力を有する者。

## 人材育成支援無償（JDS）事業 重点分野 基本計画

### 重点分野の基本情報

1. 国名：スリランカ
2. 重点分野（サブ・プログラム）名：経済成長基盤整備のための人材育成
3. 運営委員会：財務計画省、公共管理改革省、日本大使館、JICA スリランカ事務所

### 個表1

#### 1. サブ・プログラム／コンポーネントの概要

##### (1) 基本情報

1. 重点分野（サブ・プログラム）名：経済成長基盤整備のための人材育成
2. 開発課題（コンポーネント）名：開発経済
3. 主管省庁：財務計画省対外援助局
4. 対象機関：全省庁

##### (2) 背景と必要性（当該国の開発政策における本事業の位置づけ）

同国は 2009 年の紛争終結後、年率 8% 台と安定した経済成長率を達成しており、国家開発戦略「マヒンダ構想」においても 2016 年までに一人当たり GDP を 4000 ドルまで倍増すること（所属倍増計画）を重点目標としており、中所得国から中進国に向けた更なる経済成長を目指している。しかしながら、恒常的な問題として、対 GDP 比 7～8% の深刻な財政赤字やインフレ等、多くの不安定要因を抱えているとともに、同国の経常収支は貿易収支の赤字を海外労働者送金や国際援助資金により補てんする脆弱な経済構造である。持続的な経済成長のためには、現在の経済・財政構造上の課題を見出し、健全な経済政策の確保が求められている。

##### (3) 我が国及びJICAの援助方針とその実績（これまでのJDS留学生の成果含む）

2012 年 6 月に策定された我が国の対スリランカ国別援助方針では、重点分野として「経済成長の促進」「後発開発地域の開発支援」「脆弱性の軽減」を設定している。同国別方針では、スリランカが更なる適切で効率的な経済・社会運営を行えるよう、高等教育を始めとする人材育成・科学技術などの分野への支援を検討し、また、同国の経済発展を持続的に支えるためには、環境保全にも配慮する、としている。

本開発課題「開発経済」の関連としては、スリランカ JDS 事業 Phase I で「マクロ経済及び開発経済」が対象となっており、これまで 1 受入大学 14 人を受け入れている。

#### 2. 協力の枠組み

##### (1) 事業の目的

本邦大学院での学位取得（修士）を通じ、同国の社会・経済開発に関わり、将来的に重要な役割を果たすことが期待される若手行政官などを育成することを目的とする。また、人的ネットワーク構築を通して、将来的な両国のパートナーシップの強化に資するものとする。

## (2) 案件目標

- |             |  |
|-------------|--|
| ① 上位目標      | 各種産業基盤が効率的・効果的に整備され、経済成長が維持される。  |
| ② プロジェクト目標： | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ スリランカの経済成長促進に貢献する政策や計画の立案・実施に関わる行政官の実務に即した能力を育成する。</li> <li>・ 帰国留学生が日本のよき理解者として両国間の基盤強化・拡大に貢献する。</li> </ul> |

## (3) 目標の指標

- |                                    |
|------------------------------------|
| ① 帰国留学生の修士号取得                      |
| ② 帰国留学生の所属機関での政策策定・制度構築に関連する業務への従事 |

## (4) 受入計画人数及び受入大学

・ 広島大学大学院 国際協力研究科 3人/年 計12名/4年
--------------------------------

## (5) 活動

### 【広島大学大学院】

目標	内容・目標達成手段
① 来日前	
入学後、学生が大学院レベルの講義・演習および自身の研究を円滑に進めるための体制を築く。	・ ミクロ経済学・マクロ経済学のテキストを受入学生に提供し、本講座の教員および博士課程の学生の指示のもと、来日前に経済学の基本的知識を修得させ、定期的な小テストを科す。また英語力が不足している学生に対しても、テキストの配布し、同様の事前研修を行う。
② 留学中	
経済学の基礎的・専門的な知識と分野横断型・学際的な知識・分析手法の習得	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 経済学の基礎科目を履修し、政策分析能力を獲得するための基礎を学ぶ。</li> <li>・ 個々の学生の関心に応じて、応用科目を履修し、経済学のより専門的な知識を修得する。</li> <li>・ 国際問題や地域研究など他講座や他研究科の科目を履修できる体制を整えており、分野横断型・学際的な知識・分析手法について修得する。</li> <li>・ 各種セミナーを通じて、JDS学生が他大学や研究所で研究する専門家と議論し、政府・国際機関の実務家からの実践的な知識を修得する。</li> <li>・ 気候変動などの環境問題に対処できる専門家養成を目指して、「国際環境リーダー育成特別教育プログラム」を実施する。「国際環境協力学特論」などの特別講義や特別演習、サマーコース、フィールドワーク、インターンシップなどを通じて、学際的かつ複合的な解決手段が望まれる環境問題に対処するための実践的な知識・技術を修得する。</li> </ul>
論文作成に必要な手法を学ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 演習に参加し論文作成に関わる基本的技術を自身の研究を通じて修得する。</li> <li>・ 特別英作文講座を通じ英語での修士論文作成のために必要不可欠な知識と技術を学ぶ</li> </ul>
③ 帰国後	
研究成果の活用	・ JDS学生の帰国後（1～2年以内）にスリランカにおいてフィードバック・セミナーを開催する。セミナーは、JDS学生の帰国後（1～2年以内）に行う予定である。

## (6)-1 日本側の投入

- ① 受入大学による事前・事後・留学中の特別活動の経費（現地での活動を含めた事前指導、特別講義・ワークショップ等の実施、帰国後のフォロー等）
- ② 留学に係る経費（渡航費、本邦滞在中の奨学金、検定料、授業料等）
- ③ 留学中の支援経費（モニタリング、各種生活支援等）

## (6)-2 投入期間・人数

1 バッチ 3名×4カ年=12名

2014年（～2016年修了）：3名      2015年（～2017年修了）：3名

2016年（～2018年修了）：3名      2017年（～2018年修了）：3名

## (7) 相手側の投入

- ① 受入大学関係者等との協議参加
- ② 留学生の派遣
- ③ 事後活動（所属機関・対象機関における留学で習得した知識の普及機会の設定）

## (8) 資格要件

- ① 職務経験等
  - ・ 試用期間（probation period）を終えた正規職員であること。
  - ・ All Island Service Officers または Non All-island Officers であること。但し、semi-government は除外。
- ② その他：
  - ・ スリランカ国籍を持つこと
  - ・ 原則として40歳未満（留学年4月1日現在）
  - ・ 軍に現に奉職していない者。
  - ・ 本事業の目的を正しく理解し、学業の修了・帰国後、母国の発展に貢献する明確な意思を有する者。
  - ・ 原則、既に海外支援による奨学金を受給し、留学の結果、「修士」の学位を取得していない者。また、現在、他の海外支援による奨学金を受給していない者あるいは受給予定でない者。
  - ・ 心身ともに健康である者。
  - ・ 日本に留学するうえで、十分な英語力を有する者。



## 人材育成支援無償（JDS）事業 重点分野 基本計画

### 重点分野の基本情報

1. 国名：スリランカ
2. 重点分野（サブ・プログラム）名：経済成長基盤整備のための人材育成
3. 運営委員会：財務計画省、公共管理改革省、日本大使館、JICA スリランカ事務所

### 個表1

#### 1. サブ・プログラム／コンポーネントの概要

##### (1) 基本情報

1. 重点分野（サブ・プログラム）名：経済成長基盤整備のための人材育成
2. 開発課題（コンポーネント）名：ビジネス環境整備
3. 主管省庁：財務計画省対外援助局
4. 対象機関：全省庁

##### (2) 背景と必要性（当該国の開発政策における本事業の位置づけ）

同国は2009年の紛争終結後、年率8%台と安定した経済成長率を達成しており国家開発戦略「マヒンダ構想」においても、2016年までに一人当たりGDPを4,000ドルまで倍増する所得倍増計画を発表している。同計画達成のためには、民間セクターの投資活性化による各セクターでの生産性向上と新規産業育成、既存産業の高度化が重要とされている。一方、現在の水準の経済成長を維持するためにはGDP比35%程度の投資が必要とされ、民間投資を大きく伸ばす必要があるが、現状は国内投資がGDP比20.1%、海外直接投資は同比0.9%（2010年）のレベルであり、投資増加に向けた制度整備、規制緩和により民間セクターが活動できる環境整備、グローバル経済に対応し得る人材育成が求められている。

##### (3) 我が国及びJICAの援助方針とその実績（これまでのJDS留学生の成果含む）

2012年6月に策定された我が国の対スリランカ国別援助方針では、重点分野として「経済成長の促進」「後発開発地域の開発支援」「脆弱性の軽減」を設定している。同国別方針では、スリランカが更なる適切で効率的な経済・社会運営を行えるよう、高等教育を始めとする人材育成・科学技術などの分野への支援を検討し、また、同国の経済発展を持続的に支えるためには、環境保全にも配慮する、としている。

本開発課題「ビジネス環境整備」は、スリランカJDS事業Phase Iでは対象となっておらず、Phase IIで初めての受け入れとなる。

#### 2. 協力の枠組み

##### (1) 事業の目的

本邦大学院での学位取得（修士）を通じ、同国の社会・経済開発に関わり、将来的に重要な役割を果たすことが期待される若手行政官などを育成することを目的とする。また、人的ネットワーク構築を通して、将来的な両国のパートナーシップの強化に資するものとする。

## (2) 案件目標

- ① 上位目標  
各種産業基盤が効率的・効果的に整備され、経済成長が維持される。
- ② プロジェクト目標：  
  - ・スリランカの経済成長促進に貢献する政策や計画の立案・実施に関わる行政官の実務に即した能力を育成する。
  - ・帰国留学生が日本のよき理解者として両国間の基盤強化・拡大に貢献する。

## (3) 目標の指標

- ① 帰国留学生の修士号取得  
 ② 帰国留学生の所属機関での政策策定・制度構築に関連する業務への従事

## (4) 受入計画人数及び受入大学

- ・早稲田大学商学研究科 2人/年 計8名/4年  
 ・国際大学国際経営学研究科 2人/年 計8名/4年

## (5) 活動

### 【早稲田大学】

目標	内容・目標達成手段
留学中	
日本企業のビジネス特性をWBSの教材、企業人との対話を通して習得	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多様なコース科目、ゼミ科目、研究指導科目の提供により以下を学ぶ。               <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ ビジネスの国際化に対する日本企業の活動を観察することで、スリランカの経済発展に必要な国際ビジネス感覚を養成する。</li> <li>➢ 産業の発展のために政府が実施する政府・民間パートナーシップについて、日本の事例を学ぶ。</li> <li>➢ 数多くのケーススタディーや企業訪問を通じて、優れた日本の政府や企業活動、ならびにそれらを取りまく人的管理の様子を見聞する。組織のベストプラクティスの習得をする。</li> <li>➢ 経営技術に関する科目を習得することによって、技術を企業で活かす方法を習得する。</li> </ul> </li> </ul>
論文作成を通じ課題に対する解決策を考察する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生はゼミ（演習）に所属し、担当教員の指導のもと、研究テーマを設定し、その遂行に必要な知識や方法論を能動的に摂取していく。2年間のゼミ活動を通じて、最終的には学生自ら課した課題の解決案を専門職論文に帰結することとなる。</li> <li>・演習に併せて研究指導（論文指導）が行われる。また、インターンシップ、フィールド・ワークも内容によっては研究の一環として位置づけられることがある。</li> </ul>
人的ネットワークの構築	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本人ビジネスマンはむろんのこと、日本で学ぶ海外からの留学生との交流のネットワークを構築できる。</li> </ul>

【国際大学】

目標	内容・目標達成手段
① 来日前	
留学生が来日後、円滑に学業及び研究が開始できるよう事前準備を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>GSIM</b>の教授陣を現地に派遣して、<b>JDS</b>学生に対して、円滑な授業履修のために事前研修を実施する。</li> </ul>
② 留学中	
国際化の環境下で活躍できる将来のリーダーを育成する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ビジネス環境の改善方法、中小企業を含めた企業経営の方法及び、投資戦略などの実践的知識及び、海外直接投資を呼び込むための戦略と地域密着型経営に関する知識なども習得する。</li> <li>・ 産官連携などの政治的問題や、南アジア地域協力連合（<b>SAARC</b>）等の貿易同盟に配慮した、資金融通及び投資の決定方法や、国内及び海外投資を誘引するために必要な理論的知識の習得</li> <li>・ 上記知識の習得のため、国際的な資源を活用して自国の成長促進させる方法について教育を行う。具体的には、ファイナンス、マーケティング、<b>IT</b>戦略、経営戦略などをバランス良く配置したカリキュラムを提供する。</li> <li>・ 1年次は国際的なリーダーとして活躍するために必要な基礎的なスキルを身につけるためのコースワークを履修する。</li> <li>・ 2年次は指導教員の指導の元に各自の研究課題に合致した選択科目を履修する。</li> <li>・ フィールドトリップ（企業や機関の見学、東京証券取引所、<b>IBM</b>、証券会社等を過去に訪問）を通じて日本のビジネス事例について学び、特に物流センター、港湾、大学、インフラ等への私企業からの投資を誘引する方法について学ぶ。</li> <li>・ 定期的に各国での公的機関、大学、企業にて活躍している、経済政策、産業開発などの専門家を招聘し、セミナーを開催する。</li> </ul>
新規産業創生、公企業及び中小企業を含む既存産業の経営改善など実践的な問題の解決に向けた修士論文又は研究レポートの執筆	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教員が専門分野や研究テーマについて各自説明会を行い、学生は自分の関心や研究テーマに合わせて1年次終了までに指導教員を選択する。2年次（4学期目から6学期目）にリサーチセミナー<b>I, II, III</b>を継続的に履修し、指導教員の指導のもと、論文または研究レポートを執筆する。</li> <li>・ リサーチセミナーでは、指導教員が既に行っている研究活動（<b>REP</b>）*に積極的に参加し、共同研究という形で実務における問題解決に向けた革新的かつ独創的な研究に従事し、その内容を修士論文または研究レポートにまとめる方法、或いは、学生が重点分野に沿って個別に設定した研究テーマについて個人指導を受けながら修士論文又は研究レポートを執筆する方法のいずれかを選択することができる。</li> </ul> <p>* <b>REP: Research and Education Platform</b>の略：教員が各自で研究テーマを設定し、学生と共同で研究プロジェクトを行うための研究体制の呼称。</p>

(6)-1 日本側の投入

<ul style="list-style-type: none"> <li>① 受入大学による事前・事後・留学中の特別活動の経費（現地での活動を含めた事前指導、特別講義・ワークショップ等の実施、帰国後のフォロー等）</li> <li>② 留学に係る経費（渡航費、本邦滞在中の奨学金、検定料、授業料等）</li> <li>③ 留学中の支援経費（モニタリング、各種生活支援等）</li> </ul>
--

## (6)-2 投入期間・人数

1 バッチ 4名×4カ年=16名

### 【内訳】

#### 早稲田大学商学研究科：

2014年（～2016年修了）：2名      2015年（～2017年修了）：2名  
2016年（～2018年修了）：2名      2017年（～2018年修了）：2名

#### 国際大学国際経営学研究科：

2014年（～2016年修了）：2名      2015年（～2017年修了）：2名  
2016年（～2018年修了）：2名      2017年（～2018年修了）：2名

## (7) 相手側の投入

- ① 受入大学関係者等との協議参加
- ② 留学生の派遣
- ③ 事後活動（所属機関・対象機関における留学で習得した知識の普及機会の設定）

## (8) 資格要件

- ① 職務経験等
  - ・ 試用期間（probation period）を終えた正規職員であること。
  - ・ All Island Service Officers または Non All-island Officers であること。但し、semi-government は除外。
- ② その他：
  - ・ スリランカ国籍を持つこと
  - ・ 原則として40歳未満（留学年4月1日現在）
  - ・ 軍に現に奉職していない者。
  - ・ 本事業の目的を正しく理解し、学業の修了・帰国後、母国の発展に貢献する明確な意思を有する者。
  - ・ 原則、既に海外支援による奨学金を受給し、留学の結果、「修士」の学位を取得していない者。また、現在、他の海外支援による奨学金を受給していない者あるいは受給予定でない者。
  - ・ 心身ともに健康である者。
  - ・ 日本に留学するうえで、十分な英語力を有する者。

## 人材育成支援無償（JDS）事業 重点分野 基本計画

### 重点分野の基本情報

1. 国名：スリランカ
2. 重点分野（サブ・プログラム）名：経済成長基盤整備のための人材育成
3. 運営委員会：財務計画省、公共管理改革省、日本大使館、JICA スリランカ事務所

### 個表1

#### 1. サブ・プログラム／コンポーネントの概要

##### (1) 基本情報

1. 重点分野（サブ・プログラム）名：経済成長基盤整備のための人材育成
2. 開発課題（コンポーネント）名：環境配慮・防災・気候変動
3. 主管省庁：財務計画省対外援助局
4. 対象機関：全省庁

##### (2) 背景と必要性（当該国の開発政策における本事業の位置づけ）

同国では、経済活動活性化のための電力・上下水道・道路等各種インフラ基盤整備を進めており、それらの事業実施において環境破壊、環境汚染や住民移転等、環境社会に対する配慮がより一層求められてきている。また、経済成長に伴う商業活動の活発化や生活多様化に伴い、都市部での交通渋滞、大気・水質・土壌汚染、産業廃棄物、生活ゴミ等の問題も深刻になりつつあり、国家開発戦略「マヒンダ構想」においても、都市化に伴う環境問題への対応強化を課題としている。本 JDS 事業においては、このような経済発展に伴い生じてきた新たな課題に対応可能な公務員人材の育成が求められている。

また、2004年12月のスマトラ沖地震・津波災害を契機に、同国では災害対策法が整備（2005年5月）されると共に、防災省等の関連機関が設置され、災害対策及び防災体制強化に取り組んでいる。しかしながら、関連各省庁間の調整の困難さや防災対策予算、人員体制及び技術的なノウハウ等は依然不十分となっており、実効的な防災対策の強化をいかに図っていくかが課題となっている。

日本政府は、同国への協力において「気候変動・防災対策」を重点分野の一つとして設定しており、現在右記の案件を実施し、災害警報発出、災害脆弱地域への情報伝達、災害対応、コミュニティ防災等に対する能力向上を図っているが、本 JDS 事業においてさらに同分野に関する関係機関の人材育成が期待される。

##### (3) 我が国及びJICAの援助方針とその実績（これまでのJDS留学生の成果含む）

2012年6月に策定された我が国の対スリランカ国別援助方針では、重点分野として「経済成長の促進」「後発開発地域の開発支援」「脆弱性の軽減」を設定している。同国別方針では、スリランカが更なる適切で効率的な経済・社会運営を行えるよう、高等教育を始めとする人材育成・科学技術などの分野への支援を検討し、また、同国の経済発展を持続的に支えるためには、環境保全にも配慮する、としている。

本開発課題「環境配慮・防災管理・気候変動」は、スリランカ JDS 事業としては初めて対象となる。一方、JICA 事業の実績としては、「気候変動・防災対策プログラム」の一環として「気候変動に対応した防災能力強化プロジェクト」（技術協力プロジェクト、2010年度－12年度）、緊急無償（2010年洪水対策）（2010年度）、「緊急災害復旧支援計画」（有償資金協力、2011年度－2016年度予定）、「国道土砂災害対策事業（有償資金協力、2012年度－2019年度予定）」等がある。

## 2. 協力の枠組み

### (1) 事業の目的

本邦大学院での学位取得（修士）を通じ、同国の社会・経済開発に関わり、将来的に重要な役割を果たすことが期待される若手行政官などを育成することを目的とする。また、人的ネットワーク構築を通して、将来的な両国のパートナーシップの強化に資するものとする。

### (2) 案件目標

#### ① 上位目標

各種産業基盤が効率的・効果的に整備され、経済成長が維持される。

#### ② プロジェクト目標：

- ・スリランカの経済成長促進に貢献する政策や計画の立案・実施に関わる行政官の実務に即した能力を育成する。
- ・帰国留学生が日本のよき理解者として両国間の基盤強化・拡大に貢献する。

### (3) 目標の指標

#### ① 帰国留学生の修士号取得

#### ② 帰国留学生の所属機関での政策策定・制度構築に関連する業務への従事

### (4) 受入計画人数及び受入大学

- ・筑波大学 生命環境科学研究科 2人/年 計8名/4年
- ・東京大学 大学院工学系研究科 2人/年 計8名/4年

### (5) 活動

#### 【筑波大学】

目標	内容・目標達成手段
① 来日前	
留学生が来日後に円滑な学習と研究が開始できるよう事前準備を行う。	<ul style="list-style-type: none"><li>・Eラーニングシステムにより、情報リタラシー（INFOSS）を修得させる。</li><li>・基礎数学、統計学、データ収集解析等の事前学習を必要に応じて指導予定教員により行う。</li><li>・パンフレットやウェブサイト、JDS事務、JDS委員会により、事前の情報共有を提供する。</li></ul>
② 留学中	
<ul style="list-style-type: none"><li>・環境問題の解決や環境防災についての専門知識を調査・分析によって深める。</li><li>・グローバル環境リーダーとしての資質と知見を高める。</li><li>・修士課程を通して自立した課題分析能力および</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・JDS生個人のニーズに対応した、環境管理、防災・減災（土木も含む）、環境経済、気候変動、インフラ整備などの技術・政策課題に関する専門知識や調査・分析手法を教授する。</li><li>・JDS生のニーズに応じ、国内だけでなく第三国における海外インターンシップ等を実施する。</li><li>・これまで存在した専攻内の4つの専門家養成サーティフィケート・プログラムを統合したSUSTEP（Sustainability Science, Technology, and Policy）プログラムを履修させ、所定の単位を取得した者に、グローバル環境リーダーとしてのサーティフィケートを授与する。</li></ul>

び課題解決能力を習得することができる。その結果、帰国後、行政の即戦力として貢献することができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国内外の大学や研究所から専門家を招き、JDS生の課題に合わせたセミナーを開催することで論文課題の改善を図る。</li> <li>・ JDS生の研究対象地を必要に応じて専任教員が学生と訪れ、データ収集の手法等を指導する。</li> <li>・ 既存の国内研修とは別に、毎年変化するJDS生のニーズを踏まえ、JDS生の研究課題に関係する研修プログラムをデザインし実施する。</li> </ul>
論文作成を通じ課題に対する解決策を考察させ、学術論文を完成させる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 論文の書き方や文献検索の手法をガイダンスや授業、ゼミで指導する。</li> <li>・ 2年間継続的に論文指導の授業を履修し、数回の論文研究発表を行う。</li> <li>・ JDS国際セミナー招へい者など、外部専門家の意見を取り入れる。</li> </ul>
人的ネットワークの構築	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国際セミナーの開催や学会参加・発表、研修などを通して環境管理や防災に係る国際的ネットワークを構築する。帰国後も継続的に情報交換を行いスリランカの問題改善に寄与する。</li> </ul>
③ 帰国後	
研究成果の活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 卒業生との交流や長期的なモニタリング（アンケートなど）によるフォローアップを行うことで、教育効果・成果を自己評価し、事業改善する。</li> </ul>

### 【東京大学】

目標	内容・目標達成手段
留学中	
環境・防災分野の行政官に必要な土木工学・社会基盤学の知識、経験を習得する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 土木工学・社会基盤学の講義、実習、インターンなどを、毎年44科目を実施する。</li> </ul>
斜面災害、洪水、干ばつの防災技術を習得し、自ら開発して自国に適用できる技術者となるように教育する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 洪水、干ばつに関しては、実時間モニタリングと情報伝達、利用可能な降水量等気象予測の取得、河川流量や土壌水分量など洪水、干ばつの深刻度の指標となる物理量の算定・予測手法について、その科学的・技術的開発に携わり自国での技術移転能力を身につける。</li> <li>・ 斜面災害に関しては、斜面崩壊の予兆を事前に検知して避難を促進する「早期警報」技術の普及推進を中心に、危険斜面の洗い出し（地形地質、風化進行、簡易現場調査、地域社会のリスク）、観測データの分析と警報発令、社会への防災情報の伝達について、包括的技術体系の開発に参加する。さらに、その成果を自国の実務者へ技術移転する。</li> </ul>
日本やアジア各国の防災の手法、経験、課題について理解を深める。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本やアジア各国の防災関係者、技術者、研究者との交流と共同研究活動を実施する。特に、2013～2015年の3年計画の、スリランカ、中国、台湾、インドネシア、タイ、日本の6カ国によるJSPS (Japan Society for the Promotion of Science) 研究交流事業「斜面災害の減災システムの標準化と普及」で、各国の防災技術や知見を持ち寄り、研究者、行政の防災担当者に対しても、各国の事情に合わせた斜面災害の軽減技術を普及させる計画がある。JDS留学生として受け入れた防災技術者にも、これらの活動に参加してもらう。</li> </ul>
論文作成を通じ課題に対する解決策を考察する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教員の指導のもと、防災技術に関わる修士論文を執筆する。</li> </ul>

### (6)-1 日本側の投入

<ol style="list-style-type: none"> <li>① 受入大学による事前・事後・留学中の特別活動の経費（現地での活動を含めた事前指導、特別講義・ワークショップ等の実施、帰国後のフォロー等）</li> <li>② 留学に係る経費（渡航費、本邦滞在中の奨学金、検定料、授業料等）</li> <li>③ 留学中の支援経費（モニタリング、各種生活支援等）</li> </ol>
--

## (6)-2 投入期間・人数

1 バッチ 4名×4カ年=16名

### 【内訳】

筑波大学 生命環境科学研究科：

2014年（～2016年修了）：2名      2015年（～2017年修了）：2名

2016年（～2018年修了）：2名      2017年（～2018年修了）：2名

東京大学 大学院工学系研究科：

2014年（～2016年修了）：2名      2015年（～2017年修了）：2名

2016年（～2018年修了）：2名      2017年（～2018年修了）：2名

## (7) 相手側の投入

- ① 受入大学関係者等との協議参加
- ② 留学生の派遣
- ③ 事後活動（所属機関・対象機関における留学で習得した知識の普及機会の設定）

## (8) 資格要件

- ① 職務経験等
  - ・ 試用期間（probation period）を終えた正規職員であること。
  - ・ All Island Service Officers または Non All-island Officers であること。但し、semi-government は除外。
- ② その他：
  - ・ スリランカ国籍を持つこと
  - ・ 原則として40歳未満（留学年4月1日現在）
  - ・ 軍に現に奉職していない者。
  - ・ 本事業の目的を正しく理解し、学業の修了・帰国後、母国の発展に貢献する明確な意思を有する者。
  - ・ 原則、既に海外支援による奨学金を受給し、留学の結果、「修士」の学位を取得していない者。また、現在、他の海外支援による奨学金を受給していない者あるいは受給予定でない者。
  - ・ 心身ともに健康である者。
  - ・ 日本に留学するうえで、十分な英語力を有する者。



添付資料7. 対象機関の補足調査結果

対象機関向けアンケート集計結果

Questionnaire

I Number of possible candidates as JDS Participants in your Organization

I-1 Total number of officers

I-2 Employment status of officers (No. and %)

I-2-(1) Number of permanent employed

I-2-(2) Percentage of permanent employed

I-2-(3) Number of part timers

I-2-(4) Percentage of part timers

I-3 Number /percentage of officers of qualified age (No. and %)

I-3-(1) Number officers age 22-29

I-3-(2) Percentage of officers age 22-30

I-3-(3) Number of officers age 30-39

I-3-(4) Percentage of officers age 30-39

I-4 Academic Background (No. and %)

I-4-(1) Number of bachelor's degree holders

I-4-(2) Percentage of bachelor's degree holders

I-4-(3) Number of master's degree holders

I-4-(4) Percentage of master's degree holders

I-5 English Proficiency: Number/percentage of officers who have good command in English.(No. and %)

I-5-(1) English Proficiency: Number of officers who have good command in English.

I-5-(2) English Proficiency: Percentage of officers who have good command in English.

I-6 Number/percentage of officers in your organization who meet the requirements 1(1) to (5) above. (No. and %)

I-6 -(1) Number of officers in your organization who meet the requirements 1(1) to (5) above. (No. and %)

I-6 -(2) Percentage of officers in your organization who meet the requirements 1(1) to (6) above. (No. and %)

I-7 Does your organization permit your officers to be absent from duty during study period in Japan (generally for two years)? (Y/N)

I-8 Is there any organizational rule or regulation which allow your officers to be absent from duty during study period? (Y/N)

V Scholarship programs offered to your organization other than JDS

V-1 Are there any scholarship which have been offered (or is scheduled to be offered) to your organization other than JDS Program by foreign assistance successively every year? (Y/N)

V-2 If the answer is "yes" in 5.(1), when is/was/will be the scholarship offered? (Curent/Past 5 years/Determined in the near future)

V-3 If the answer is "yes" in 5.(1), please describe in detail. (Bachelor/Master/Doctor/Short course/others)

省庁・機関名	No. of officers	EM Status (PERM_No.)	EM Status (PERM_%)	EM Status (PT_No.)	EM Status (PT_%)	Age (22-29_No.)	Age (22-29_%)	Age (30-39_No.)	Age (30-39_%)	Academic (BA_No.)	Academic (BA_%)	Academic (MS_No.)	Academic (MS_%)	EN proficiency (No.)	EN proficiency (%)
	I-1	I-2-(1)	I-2-(2)	I-2-(3)	I-2-(4)	I-3-(1)	I-3-(2)	I-3-(3)	I-3-(4)	I-4-(1)	I-4-(2)	I-4-(3)	I-4-(4)	I-5-(1)	I-5-(2)
Central Engineering Consultancy Bureau	1400	1050	75	0	0	300	21	187	13	600	43	187	13		70
Ministry of Local Government & Provincial councils	245	245	73.5	0	0	65	26.5	180	73.5	245	100	0	0	220	89.8
Ministry of Agriculture	5							5	100	5	100	3	60	5	100
Ministry of Disaster management	6	6	100	0	0	4	66.67	2	33.33	6	100	0	0	6	100
Ministry of Environment & Renewable Energy	248	248	100	0	0	42		123		106		32		120	
Mahaweli Authority of Sri Lanka	960		93		7		20		35		35		15		40
Ministry of Ports & Highways and Road Development Authority	134	116		35		9		125		134		9			100
Ministry of Industry & Commerce	628							73	11.62	136	21.66	55	8.76	51	8.12
Ministry of Civil Aviation	10	10	100	0	0	0	0	1	10	8	80	7	70	10	100
Ministry of Co-operatives & Internal Trade	9	9		0	0	2		7		9		0		9	100
Ministry of Livestock & Rural Community Development	23	23	100	0	0	1	4.3	6	26	23	100	20	87	23	100
Ministry of Public Administration & Home Affairs	1145	957	83	0	0	133	11.6	526	45.8	1100	96	323	28	938	82
Ministry of Telecommunication and Information Technology	24	24		0		7		6		11		1			75
Ministry of construction, Department of Buildings	61	60		0		2		18		53		7		60	
Ministry of construction, National physical Planning Department	130		99				35		42		75		10		100
Ministry of construction, State Engineering Corporation of Sri Lanka	635	81		544		91		544			75		10		75
Ministry of construction, Department of Government Factory	16	15		1		4		12		16		0		16	
Ministry of Economic Development	192	192	100			19	10	172	90	192	100	16	8	172	90
Ministry of Technology & Research	921	916		5		7		270		338		40		135	50
Ministry of Minor Export Corp Promotion	11	11	100					4	36	9	90	7	64	11	100
Ministry of Justice	22	22	100					8		8		3		22	
Ministry of Labour and Labour Relations	500	500	100			100	20	200	40	375	75	10		100	20
Department of Animal Production and Health	561	561	100			15	3	110	19.6	555	98.9	156	27.8	500	89
Tea Research Institute of Sri Lanka	245	245	100			65	26.5	180	73.5	245	100			220	89.8
Ministry of Plantation Industries	11	11	100					11	100	5	45	6	55	11	100
Water Resources Board	15	15	100			2	13.34	2	13.34	6	40	9	60	15	100



## 添付資料8. 第1バッチ（2014年度来日）の候補者の募集・選考方法

スリランカJDS事業における第一バッチの留学生候補者の募集・選考は、2013年9月13日の第一回運営会議において合意された受入大学と受入人数、応募資格要件、スケジュールに沿って、対象機関に対して募集支援及び選考支援を行った。

### (1) 留学生用資料の準備

応募に必要な募集用資料として、募集要項（ガイドライン）500部、チラシ1500部、ポスター1200部を準備、ERDを通じた各対象機関への配布などをおこなった。また、スリランカJDS事業の募集用ホームページを立ち上げ、留学希望者問い合わせ専用のE-メールアドレスを開設し、メールを受信後すぐに回答出来るようにした。新聞広告でも応募推奨を行った。

### (2) 募集説明会の実施

Colombo, Galle, Ratnapura, Kurunegala, Vavuniyaの5都市で2014年度留学希望者に対して募集説明会を実施した。説明会では、JDS事業の概要・目的の説明、受入大学、応募資格要件や、具体的なスケジュールについても説明を行った。また、説明会後に再度対象機関の担当者とは適宜面会し、応募について奨励をお願いした。6機関の参加者の合計は266名であった。

### (3) 英語・数学試験の実施について

11月30日及び12月1日に応募者は英語試験と数学試験とを受験した。英語試験はブリティッシュカウンシル主催のIELTSを、数学試験は今年度については国際大学に提供いただいた。

### (4) 応募書類の回収

11月8日（13日に延長）までにを各省庁での締切として、その後各省庁から応募書類が送付されるERDで書類を回収した。提出方法はスリランカの政府内の習慣に習い、応募者が書類3部（所属省庁、ERD、JDS用）を所属機関に提出、所属機関からERDに提出、ERDからプロジェクト事務所提出という3段階構えとなった。応募者総数は79人26省庁、うち有効応募者数は上記72人（8人は無資格者）であった。

### (5) 受入大学による書類選考及び結果

提出された応募書類と数学・英語両試験結果を11月28日に各受入大学に送付し、1月15日まで大学教員による書類選考を実施した。試験結果については、合否判定の一部とするか、参考程度にするかについて等、大学側の判断にゆだねた。

### (6) 健康診断について

書類選考を合格した42名に対して2月3日及び4日に健康診断を実施した。

(7) 受入大学教官による専門面接及びその結果（今後更新予定）

2013年2月2日（日）～2月6日（木）にかけて、下記の内容で大学教官と現地関係機関とで実施された。

専門面接スケジュール

Date	Day	Schedule	
1	Feb. 2/ Early Morning of Feb. 3	Sun	Departure from Narita
			Arrival in Colombo
2	Feb. 3	Mon	Briefing on schedule in Colombo and the Procedures of Technical Interviews
			Technical Interviews
			Courtesy Call on JICA Sri Lanka Office
			Dinner hosted by Japanese Ambassador
3	Feb. 4	Tue	Technical Interviews
4	Feb. 5	Wed	Exchange-view Session with Relevant Ministries
			Feedback Session on the Result of the Interviews and Consultation Session with OC Members
5	Feb. 6	Thu	Departure from Colombo and Arrival in Japan

審査項目については、学問的背景と学習能力、留学を成し遂げるための素養、当該国の開発に寄与する可能性の100点満点で評価が行われた。

(8) 運営委員会による総合面接及びその結果

3月7日及び8日に総合面接が実施され、続く運営委員会で留学生と補欠が承認された。次表に第1バッチ応募者の選考結果をまとめた。

第1バッチ応募者の選考結果

コン ポーネント	大学	研究科	有効応募者数	書類審査 合格者数	専門面接 合格者数	総合面接 合格者数	運営委員会 承認最終 合格者数	受入予定 人数
公共政策・ 財政	政策研究大学院大学	政策研究科	11	6	3	3	3	3
	一橋大 学	国 際関係学研究科	4	2	1	1	1	1
開発経済	広島大学大学院	国際協力研究科	13	7	4	3	3	3
ビジネス 環境整備	国際大学	国際経営学研究科	12	6	4	2	2	2
	早稲田大学	商学研究科	7	7	7	2	2	2
環境配慮・ 防災	筑波大学	生命環境科学研究科	17	8	5	2	2	2
	東京大学大学院	工学系研究科	7	6	3	2	2	2
計			71	42	27	15	15	15

## 添付資料9. 帰国留学生・来日中留学生に対する補足調査回答

### (1) 帰国留学生アンケート結果

アンケート配布時点で帰国していた留学生25名中14名（2010年生8名、2011年生6名回答）

#### Questionnaire

#### 1. Your skill improvement as the result of participation in JDS Program.

1-(1) Did your technical skill change before and after participating JDS Program compare?

1-(1)-i Y=Yes / N=No / NC=No change

1-(1)-ii And if “yes”, in what aspect and how?

1-(1)-iii If “no”, why?

1-(2) Did your attitude toward work(i.e. discipline, moral, sense of responsibility, and passion) change before/ after participating JDS Program and why?”

1-(2)-i Y=Yes / N=No / NC=No change

1-(2)-ii And if “yes”, in what aspect and how?

1-(2)-iii If “no”, why?

#### 2. Academic work in Japan

1-(2) Did your attitude toward work (i.e. discipline, moral, sense of responsibility, and passion) change before/ after participating JDS Program and why?

2-(1)-i Y=Yes / N=No / NC=No change

2-(1)-ii And if “yes”, in what aspect and how?

2-(1)-iii If “no”, why?

2-(2) Do you think the content of your academic research appropriate in order to tackle the development issue (i.e. the regional development, correction of regional disparity, measure of poverty alleviation and regional autonomy) in your country?

2-(2)-i Y=Yes / N=No / O=Others

2-(2)-ii And why?

2-(3) Did you have good communication with your professor(s)?

2-(3)-i Y=Yes / N=No / O=Others

2-(3)-ii And why?

2-(4) What kind of trouble in terms of academic work, if any, did you encounter throughout academic life?

2-(4)-i (answer)

2-(4)-ii And why?

2-(4)-iii How did you solve the problem?

2-(5) Was the support from your university in terms of academic work enough and why? In what way do they need to improve?

2-(5)-i

2-(5)-ii

2-(6) Do you have any advice in terms of academic work for future JDS Program Participants?

#### 3. Daily life in Japan

3-(1) How was your daily life in Japan?

3-(1)-i 1=Enjoyable / 2=Notenjoyable / 3=Others

3-(1)-ii And why?

3-(2) What kind of trouble in terms of daily life, if any, did you have during JDS Program?

3-(3) Was the support from university in terms of daily life enough?

3-(3)-i 1=Enough / 2=Not enough / 3=Others

3-(3)-ii And why?

- 3-(3) -iii In what way do they need improvement?  
 3-(4) Do you have any advice in terms of daily life in Japan for future JDS Program Participants?
4. Support and coordination by the Agent  
 4-(1) Do you think the support and coordination by the Agent before and during your stay in Japan satisfying?  
 4-(1)-i 1=Satisfying / 2=Not satisfying / 3=Others  
 4-(1)-ii In what way do they need improvement?
5. Capacity improvement of your organization as a result of sending JDS Participants to Japan.  
 5-(1) Did you diffuse your knowledge you acquired in Japan to your colleagues?  
 5-(1)-i Y=Yes / N=No / O=Others  
 5-(1)-ii If the answer is yes, how?  
 5-(2) Do you think the capacity of your organization improved as a result of sending you to Japan?  
 5-(2)-i Y=Yes / N=No / O=Others  
 5-(2)-ii And why?  
 5-(3) Did you return to the same organization you had previously worked for after returning to Sri Lanka?  
 5-(3)-i Y=Yes / N=No / O=Others  
 5-(3)-ii If the answer is yes, did the work condition (ex salary, allowance, and job title) change?  
 5-(3)-iii When you returned to the same organization, was there any drastic change in its organizational structure? Y=Yes / N=No  
 5-(3)-iv If it was the case, was there any problem for you to adapt to the new structure or work environment?  
 5-(4) Have you been adopting the knowledge and skill you acquired in Japan to your current work?  
 5-(4)-i Y=Yes / N=No / O=Others  
 5-(4)-ii If not, is there any limitation?
6. Network in Japan  
 6-(1) Do you still keep contact with those you got acquainted with in Japan? Y=Yes / N=No  
 6-(2) If the answer is “yes” in 6.(1), who do you still keep contact? (multiple answers)  
 6-(2)-i professor  
 6-(2)-ii university friends  
 6-(2)-iii business person  
 6-(2)-iv others  
 6-(3) How are you going to utilize the network you have acquired in Japan (ex network with professors, friends, and business person) in your current work?
7. Scholarship by other country  
 7-(1) Is there any scholarship offer to your organization by foreign assistance other than JDS Program which offer master’s degree or higher? Y=Yes / N=No  
 7-(2) If the answer is “yes” in 7 (1), what do you think is the benefit of this scholarship compared to JDS?
8. Others  
 Do you have any opinion and/or advice to JDS program or its participants-to-be?



1-(1) Did your technical skill change before and after participating JDS Program compare?			1-(2) Did your attitude toward work (i.e. discipline, moral, sense of responsibility, and passion) change before/ after participating JDS Program and why?			
No.	1-(1)-i	1-(1)-ii	1-(1)-iii	1-(2)-i	1-(2)-ii	1-(2)-iii
1	Y	by subject knowledge and research technics how to do a research and comply with theoretical and empirical background conditional		Y	two years living experience with Japanese peoples, other foreign friends, with Japanese professors, living with Japanese society	
2	Y	my computer skills & using internet was not much that developed before participating the programme		Y	my attitude of work changed very much especially in sense of responsibility & passion for work aspects after the programme. The main reason for that is what I saw & experienced in Japan. I saw how Japanese work with full of responsibility & accountability for their work with commitment.	
3	Y	Got new knowledge and was able to expand my technical capacities greatly.		Y	I learned to work hard in a tight study schedule, which gave me strength to take any responsibility at work. I was able to improve efficiency and punctuality	
4	Y	Presentation skills, Data analysis, Organizing research		Y	To improve efficiency & effectiveness/ using other's experience through observation, discussion, learning	
5	Y	Logical and rational decision making skills. Since I am working as the Director of a public sector training institute, I am inserting several public management aspects into annual training programmes.		Y	I had positive attitude even before going to Japan. However, I got a chance to polish it to serve the people in a very passionate manner.	
6	Y	I feel compare to past efficiency of my most of abilities have increased		Y	Absolutely every good things have increased.	
7	Y	Improved Computer Literacy & Presentation Skills, Comparative & Analytical skills		Y	Improved positive attitudes, discipline & moral.	
8	Y	Communication skills and leadership skills. Having studied a academically and practically important curriculum under MA programme along with observations in many Japan organizations I was able to develop my knowledge and skills.		Y	Having observing and experiencing many positive things in Japan I could improve my attitudes towards my job.	
9	Y	Punctuality and time management and group solidarity.			Basically the research writing skills and courses related to gender and economic development.	
10	Y	Using IT skill and make decisions.		Y	Moral, because of that Japanese cultural aspects has given lot for me such as moral, endurance, sacrifice etc.	
11	Y	could know useful computer applications & softwares, could get practical knowledge related to the theories,		Y	Overallly I could improve my attitudes such as confidence to get any responsibility, punctuality, positive thinking, and etc.	

2-(1) Did your attitude toward work(i.e. discipline, moral, sense of responsibility, and passion) change before/ after participating			2-(2) Do you think the content of your academic research appropriate in order to tackle the development issue (i.e. the regional development, correction of regional disparity, measure of poverty alleviation and regional autonomy) in your country?		2-(3) Did you have good communication with your professor(s)?		
No.	2-(1)-i	2-(1)-ii	2-(1)-iii	2-(2)-i	2-(2)-ii	2-(3)-i	2-(3)-ii
1	Y	theoretical knowledge and research works , and other practical sessions		Y	it is very related with addressing current socio economic issues	Y	no limitations and boundaries to have consultation on any academic as well as personal matter . I really appreciated.
2		Main thing is I learnt how to conduct a good research & new ways of analyzing data using newly developed statistical packages along with good participation skills.		Y	because we tried to see the issue in depth and tried to find solutions in a very practical way.	Y	They were very helpful in our work & I had a good academic relationship with him.
3		Yes, the knowledge got from my work is directly relate to my work. I studies International Development Program at IUJ and it is 100 percent relevant for me as a statistician who is responsible for supplying data for the country for development policies		Y	My thesis was on informal sector employment and it is a vital sector of the countries' economy and the finding are very important at decision making specially on decent work conditions.	Y	They are very helpful and talented I got ,lot of knowledge from them.
4	Y			Y		Y	
5		Yes, I ask myself the reasoning before each and every decision making. I always go for optimum benefits for the money spent. I know the aspects of public policy well; it gives me additional smartness to me.		Y	Individual and organizational performance are essential to achieve what you have mentioned within brackets in the above question. My research addresses a system issue in the performance appraisal. I presented my finding in front of all heads of departments in the province.	Y	They are so friendly. They allocated time for any clarification in the subjects and academic advices.
6		Certainly I was able to take enough knowledge that can be apply to my working environment.		Y	Because in my case I did my research regarding Plantation sector poverty. And I proposed some projects which helps enhance their living conditions..	Y	Of course. They are very good and kind professor. we have communication with them through mail, and recently they visited Sri Lanka and I have organized some meeting too.
7		Improved both theoretical & practical knowledge related to career development		Y	My research is directly related to improve the efficiency & effectiveness of procurement activities of public organizations.	Y	IUJ professors are very closed & friendly with all students. Usually, I had good communication with them.
8		Since I attached to subnational level (provincial council) I had great opportunity to study local government system in both countries and hope that knowledge can utilize for my job.		Y	I think I discussed a very important national issue so it may help to look at the regional development in a different VIEW.	Y	I needed frequent meetings and share my views with my professor and i was able to get that opportunity.
9		Basically the research writing skills and courses related to gender and economic development.		Y	yes especially idealed with gender development and economic issues is the one of the millennium development goal which our country need to achieve. further, poverty and vulnerability always targeting the women so my research findings is much help full as a post conflict reconstruction mechanism	Y	She is the person put me in a right path in order to fulfil my research objective, she directed well and guided in unmeasurable way to got the good result.
10	Y	New policy planning knowledge, New economical theories, and particularly team work.		Y	CBO concept, and practices would be helpful for the lower income and middle income families	Y	Always they encouraged me to get fruitful knowledge.
11	Y	Yes of course, I could learn about Economics, International Relations and other subjects .Since I'm a physical science graduate, which the most of them are new subject areas for me		Y	My research was related to the economics. It is about Taxation. I tried to find out the determinants to increase tax revenues in the country and now I have some idea to improve that research further with more data related to that	Y	I could communicate with him any time and he gave me a great academic support regarding that. He always encouraged me and gave required guidance

2-(4) What kind of trouble in terms of academic work, if any, did you encounter throughout academic life?			2-(5) Was the support from your university in terms of academic work enough and why? In what way do they need to improve?		2-(6) Do you have any advice in terms of academic work for future JDS Program Participants?	
No.	2-(4)-i	2-(4)-ii	2-(4)-iii	2-(5)-i	2-(5)-ii	2(6)
1	lack of knowledge of econometric. Degree name not mentioning Economic. It is just MSc not specific subject areas.		discussed with Professor, Senior students and colleagues	Y	arrange special econometrics courses. change the degree name	it is really good programme. because I highly appreciated about research works.
2	Main trouble was my poor knowledge on Econometrics which was very essential in analyzing data.	I had no proper knowledge	attended classes, asked friends, referred books	Y	T think support is enough	I think they should possess the knowledge of analyzing data and efficient way to acquire data from the country.
3				Y	IUIJ has a very good experience in graduate studies.	Please work hard to get the best out of it.
4				Y	Course offering	It is good to search accommodation near university.
5	YES	Previous studies in my research area was not available at the university library.	I got an opportunity to see my research problem from a different angle with my supervisor's guidance.	Y	Academic seminar with credit weight is a very good arrangement. It took through me mile stones in the research process.	Don't be nervous; it's your research; read more; put everything into your critical thinking; supervisors are talented; frequently disturb them to produce a better research paper
6	I didn't face any difficulty throughout academic life.			Y	My University was ICU (Tokyo).I feel it is the world best university. Academic life, University staff and facilities are excellent.	If we have any chance to work any Japanese company at least one week as internship , then it would be a great opportunity to understand Japanese companies culture and can be applied some of the in to our organization.
7	I had to manage my academic works without suffering to my family life.	My family members stayed with me in Japan & I have two kids. Therefore I was little bit busy with my house works.	I could manage my academic works & allocate sufficient time for my family life successfully.	Y	We had good professors & enough library & computer facilities for studies.	Always try to manage the time effectively & get maximum benefits of the academic life in Japan.
8	Some core subjects are too advanced and not directly relevant for the degree field			Y		I think reconsideration of curriculum may be good in terms of relevancy to the degree field
9	this is the first degree which i was studied in the English medium so it is a big challenge and i overcome with my supervisor support as well as the my university guidance.			Y	technical support to use the computer and specially the library was very much helpful to get th suitable books and they provided the interuniversity links to get the needed books too.	for the curriculum better we can select the contemporary issues and subjects which are more useful to our research and knowledge.
10	Nothing special.			Y	Convenient environment for studies in fact.	Be prepare for the thesis before leave mother country.
11	The time is the main problem to me. The term is bit small and have lots of readings. However, that time is not enough to read all relevant readings.	Selected the most important reading materials and gave the priority.	Selected the most important reading materials and gave the priority.	Others	If IUIJ can increase the no. of MSA apartment inside the University, we are able to work more using library and other facilities and the library time should be 24 hours during the exam season	Enjoy the life not only the studying in the library, PC lab and the dormitories but also with the Japanese community and there valuable traditions and customs

3-(1) How was your daily life in Japan?		3-(2) What kind of trouble in terms of daily life, if any, did you have during JDS Program?	3-(3) Was the support from university in terms of daily life enough?			3-(4) Do you have any advice in terms of daily life in Japan for future JDS Program Participants?	
No.	3-(1)-i	3-(1)-ii	3(2)	3-(3)-i	3-(3)-ii	3-(3)-iii	3(4)
1	Enjoyable	good coordination of JICE, University staff, General Publics of Japan, Disciplined society	language problem, there was not and host family foe each student,	Enough	well organized university and provided everything I needed		
2	Enjoyable	I had my family with me and enjoyed travelling with them during vacations.	only the language problem.	Not enough	language problem	If they could arrange us somebody who can cooperate us with in our documentary work, especially with managing with letters and forms we receive everyday to overcome the language barrier.	better to learn the language well.
3	Enjoyable	friendly and organized at all events.		Enough	IUIJ provided enough support .		Be loyal to the country and always obey their rules and also learn from Japanese people hard working, punctuality, respectful...so on
4	Enjoyable	Comparatively enjoyable	Language/ Earthquake	Enough			It is good to improve Japanese language
5	Enjoyable	New environment; calm and strong people; weather with four seasons; enough places and things to see and learn	Too cold during a period;	Enough	Dorms with 100 Gbs LAN connection provided a good staying experience. Safety measures were wonderful. Two cultural events organized by the Graduate Students Organization with the university's support are magnanimous. Local government's and medical requirements were met with the university assistances. Flea markets were good.		It is an amazing experience; live through; don't miss.
6	Enjoyable	I met lot of friends	Frankly no any trouble..	Enough	supports from the university was excellent.		Improve Japanese language as much possible.
7	Enjoyable	I built good relationships with local people, participated several cultural events & visited several places in Japan with my family members.	Monthly scholarship allowance was not sufficient to stay with family members. Therefore, I had to face financial difficulties.	Not enough	As off campus students some times we had to face difficulties without sufficient transportation facilities. Specially, It was difficult to participate weekends & night lectures.	Transportation facilities should be improved, specially in weekends.	Try to build good relationships with foreign students as well as local people.
8	Enjoyable	my family members lived with me and nice environment of Japan	Since winter season is very long we felt many difficulties especially we were not permitted to have our own vehicle we had numerous problems in transportation.	Some time there were some restrictions such as limitations in transportation facilities		reconsideration of some regulation such as driving restrictions and find universities which have enough infrastructure facilities such as good transportation network	Consider transportation and medical facilities around universities before select a university.

3-(1) How was your daily life in Japan?		3-(2) What kind of trouble in terms of daily life, if any, did you have during JDS Program?	3-(3) Was the support from university in terms of daily life enough?			3-(4) Do you have any advice in terms of daily life in Japan for future JDS Program Participants?	
No.	3-(1)-i	3-(1)-ii	3(2)	3-(3)-i	3-(3)-ii	3-(3)-iii	3(4)
9	Enjoyable	I love the country and people and most of the time i got the much help and interaction with the people.		Enough			
10							
11	Enjoyable	Very clean, very calm and systematic in everywhere of Japan. With the great support of Japanese community, the life in Japan was very interesting and easy. Therefore, I and my family could visit many places and could participate to many events. I and my family love Japan a lot.	Sometimes communication. since Japanese people are very kind and helpful. it is not a huge problem for me and my family.	Enough		Increasing no. of married students apartments and no. of study rooms; open the shokudo for breakfast time; establish convenient store in the university; and be the same treating behavior for the off campus students who live with families and for the students who live with their families in MSA	Always try to follow Japan rules and regulations and be obedient to them as much as possible. And try to adopt them in their lives and try to apply their lives in their countries. Be honest like Japanese and don't be competitive with the same country guys. Always try to be together with all not only with the specific groups or teams. And be communicate with all not staying whole the time in the dormitory rooms and other studying places. Should be participated for the functions and ceremonies.

4-(1) Do you think the support and coordination by the Agent before and during your stay in Japan satisfying?		5-(1) Did you diffuse your knowledge you acquired in Japan to your colleagues?		5-(2) Do you think the capacity of your organization improved as a result of sending you to Japan?		5-(3) Did you return to the same organization you had previously worked for after returning to Sri Lanka?				
No.	4-(1)-i	4-(1)-ii	5-(1)-i	5-(1)-ii	5-(2)-i	5-(2)-ii	5-(3)-i	5-(3)-ii	5-(3)-iii	5-(3)-iv
1	Satisfying		Y		Y		Y	no same capacity but different subject areas	Y	
2	Satisfying	I think it's good if they can help us in when leaving the apartments and disposing our things after the programme	Y	with my developed presentation skills, and changing attitudes for work.	Y	I could make an attudanal change among peers and start new projects.	Y		N	no, but I felt the difference of working culture in Japan & Sri Lanka.
3	Satisfying		Y	I am responsible for many kind of trainings even for international group trainings on subjects related to statistics and development economics.	Y	I am involving number of working groups of the department. I think my seniors. know my capacity	Y	no	N	
4	Satisfying		Y			I transferred to a line ministry.	N			
5	Satisfying	Don't reduce the stipend; laptop and book allowances should be given continuously.			Y	The presentation on research findings was done. One training programme on performance management for veterinary surgeons was done. Two other training programmes were held.	Y	In fact, I have been appointed as the Director of an institute. However, I am contributing to my provincial council through capacity development of provincial staff	N	For a short period (4 months), I had worked for my previous organization as an Assistant Secretary. During that period, I assisted to hold a big conference and prepared job descriptions for all employees of my organization ever first time in its history
6	Satisfying	Jice gave excellent support through academic life.	Y	I was able to do some presentations regarding my Japan tour. my audience was staff members of my office and other similar offices.	Y	yes of course. I feel because of my Japanese tour I working through out the district rather working on my division. I am helping to take ISO certificate in other divisions too.	N			
7	Satisfying	We had periodical monitoring meetings & they kept good communication with us.	Y	I tried to apply some theoretical & practical knowledge to my working place to improved efficiency & effectiveness.	Y	I introduced some efficient methods to the organization.	Y	I introduced some efficient methods to the organization.	N	
8	Satisfying		Y		Y		N		Y	
9	Satisfying		Y	I could teach and gave knowledge to my office employees.	Y	i can improved my language skills and communication and interaction with the people in all over the world.	Y	same as previous but chances are available to getting other jobs.	N	
10	Satisfying	We had sufficient support	Y	By conducted lectures and practicing the theories learned.	Y	As I am implementing some of them in my current organization.	N			
11	Satisfying	More Field trips and more Japanese language trainings. Please allow family members who live long time with their families to attend the graduation ceremony	Y	I explained how was my life in there	Y	My working capacities, attitudes and abilities were increased	Y	no. however, for the next promotion, it is compulsory to have a master degree after through the second department exam.	N	No more IT facilities like in Japan and the difference in both countries working environment

5-(4) Have you been adopting the knowledge and skill you acquired in Japan to your current work?		6-(1) Do you still keep contact with those you got acquainted with in Japan?	6-(2) If the answer is "yes" in 6.(1), who do you still keep contact? (multiple answers)				6-(3) How are you going to utilize the network you have acquired in Japan (ex network with professors, friends, and business person) in your current work?	
No.	5-(4)-i	5-(4)-ii	6-(1)	6-(2)-i	6-(2)-ii	6-(2)-iii	6-(2)-iv	6-(3)
1	Y		Y	1	1		1	yes
2	Y		Y	1	1		1	sharing knowledge and trying for a students exchange programme.
3	Y		Y	1	1		school teachers, village community,	share knowledge, by contracting them through emails...
4	Y		Y	1	1		Land owner	To change ideas and obtain suggestions
5	Y		Y	1	1			My research supervisor is ready to assist me in any public management encounters at my current work station; he is maintaining a separate social network account for his supervisees in the Facebook
6	Y		Y	1	1			I like if our professors and friends visit Sri Lanka and I can have some meetings with them.
7	Y		Y	1	1		Local people	Still I don't have such plan.
8			Y	1	1	1	Community people	sharing experiences and views
9	Y		Y	1	1		1	
10	Y		Y	1	1		1	Taking practical examples from Japan.
11	Y	My present working unit is different with the previous working unit. This place hasn't more development technology and not engage with policy making activities. However, til my retirement at 60 years I am working for the same department. Therefore, this knowledge and the experience is very important for my career	Y	1	1		Japanese Friends / elementary school Teachers.	Through e-mail, Facebook and Skype

7-(1) Is there any scholarship offer to your organization by foreign assistance other than JDS Program which offer master's degree or higher?		7-(2) If the answer is "yes" in 7 (1), what do you think is the benefit of this scholarship compared to JDS?	8
No.	7-(1)	7-(2)	8
1	Y		highly recommended
2	N		I think this programme needs to extend to obtain a phd degree because once we get into work after return there are less opportunities for us for further studies
3	Y	Monitory benefits are larger for other scholarships than JDS.	Thank you very much to Japanese government and JDS program. Now I am quiet confidence about my self.
4	Y	Its directly related to the fisheries sector	It would be great to open for the all ministries in Sri Lanka
5	Y		There are opportunities to continue doctoral studies immediately or even after a short break in those countries
6	N		Again I have to thank all Japanese citizens who contribute me to study in Japan. Thank you Jica, Jice and my wonderful university, (ICU). I love Japan and all Japanese citizens. Thank you.
7	N		JDS program is very useful to build career of future leaders of our country. In here, I would like to thank Japanese government to give such opportunity for us.
8	Y	Greater opportunity to study along with internships	In my opinion JDS is a great opportunity to study in a very advanced country and I think it is fortune for anybody
9	N		JDS Program is a valuable and much effective program in order to acquire knowledge. Personally the program included field trips and seminars with the academic program so its much helpful in a way to improve our skills and knowledge.
10	Y	Language skill development and financial benefit.	Learn Japanese prior to land Japan. Be prepared for thesis writing.
11	N	I have no idea related to that since I haven't received any short term or long term scholarship before than this. I think this scholarship provides us the vast contribution and greatest support. However, I request to give permission to our families, who live with us for the whole tough period giving huge support, to attend our graduation ceremony.	They should not from the same designation and not from the same organizations. Participants should be various designations and each should be from the separate organizations.

(2) アンケート集計 (留学中の学生)

2012年生15名のうち14名回答。

Questionnaire

1. Your skill improvement as the result of participation in JDS Program.
  - 1-(1) Do you think your technical skill change before and after participating JDS Program compare?
    - 1-(1)-i Y=Yes / N=No / NC=No change
    - 1-(1)-ii And if “yes”, in what aspect and how?
    - 1-(1)-iii If “no”, why?
  - 1-(2) Do your attitude toward work (i.e. discipline, moral, sense of responsibility, and passion) will change before/ after participating JDS Program compared and why?”
    - 1-(2)-i Y=Yes /N= No
    - 1-(2)-ii And if “yes”, in what aspect and how?
    - 1-(2)-iii If “no”, why?
  - 1-(3) What do you think is the advantage for you to learn in Japan/ and in your university?
    - 1-(3)-i In Japan
    - 1-(3)-ii In university
2. Academic work in Japan
  - 2-(1) As a result of participation in JDS Program, do you think you will acquire enough knowledge which can be utilized in your work?
    - 2-(1)-i Y=Yes / N=No / NC=No change
    - 2-(1)-ii And if “yes”, in what aspect and how?
    - 2-(1)-iii If “no”, why?
  - 2-(2) Do you think the content of your academic research appropriate in order to tackle the development issue (i.e. the regional development, correction of regional disparity, measure of poverty alleviation and regional autonomy) in your country?”
    - 2-(2)-i Y=Yes / N=No / O=Others
    - 2-(2)-ii And why?
  - 2-(3) Do you have good communication with your professor(s)?
    - 2-(3)-i Y=Yes / N=No / O=Others
    - 2-(3)-ii And why?
  - 2-(4) What kind of trouble in terms of academic work, if any, have you encounter throughout academic life?
    - 2-(4)-i (answer)
    - 2-(4)-ii And why?
    - 2-(4)-iii How did you solve the problem?
  - 2-(5) Has the support from your university in terms of academic work been enough and why? In what way do they need to improve?
    - 2-(5)-i Y=Yes / N=No / NC=No change
    - 2-(5)-ii And why?
  - 2-(6) Do you have any advice in terms of academic work for future JDS Program Participants?
3. Daily life in Japan
  - 3-(1) How is your daily life in Japan?
    - 3-(1)-i 1=Enjoyable / 2=Notenjoyable / 3=Others
    - 3-(1)-ii And why?
  - 3-(2) What kind of trouble in terms of daily life, if any, have you encountered in terms of daily life?
  - 3-(3) Has the support from university in terms of daily life been enough?
    - 3-(3) -i 1=Enough / 2=Not enough / 3=Others

- 3-(3) -ii And why?
- 3-(3) -iii In what way do they need improvement?
- 3-(4) Do you have any advice in terms of daily life in Japan for future JDS Program Participants?
- 4. Support and coordination by the Agent
  - 4-(1) Do you think the support and coordination by the Agent before and during your stay in Japan satisfying?
    - 4-(1)-i 1=Satisfying / 2=Not satisfying / 3= Others
    - 4-(1)-ii In what way do they need improvement?
- 5. Capacity improvement of your organization as a result of sending JDS Participants to Japan.
  - 5-(1) Do you have intention to diffuse your knowledge you acquired in Japan to your colleagues?
    - 5-(1)-i Y=Yes / N=No / O=Others
    - 5-(1)-ii If the answer is yes, how?
  - 5-(2) Do you think the capacity of your organization will improve as a result of sending you to Japan?
    - 5-(2)-i Y=Yes / N=No / O=Others
    - 5-(2)-ii And why?
- 6. Others
  - 6-(1) How are you going to utilize the network you have acquired in Japan in your work (ex. Network with professors, friends, and Business person)?

No.	所属大学	1-(1) Do you think your technical skill change before and after participating JDS Program compare?			1-(2) Do your attitude toward work(i.e. discipline, moral, sense of responsibility, and passion) will change before/ after participating JDS Program compared and why?			1-(3) What do you think is the advantage for you to learn in Japan/ and in your university?	
		1-(1)-i	1-(1)-ii	1-(1)-iii	1-(2)-i	1-(2)-ii	1-(2)-iii	1-(3)-i	1-(3)-ii
1	ICU	Y	Usage of new technologies such as banking system, Library book searching and lending system, Transport system and separation of garbage etc.	-	Y	Discipline change- I learnt lots of good practices in my academic area as well inn daily life in Japan	-	I can learn the techniques and innovative ideas from well developed country like japan	very good exposure with the International Environment
2	ICU	Y	Technical skill such as problem analyzing, problem solving, presentation skills have improved due to the learning methods followed in the University	-	Y	Japanese show high dedication to what ever work they are involved in. This really influence my attitudes toward work in positive work.	-	Learning in Japan advantages me in may aspect. It is really a good opportunity to live and learn in a high developed country like Japan. The mixture of high developed technology and attitudes of Japanese people toward work and life helped me a lot to improve my attitudes as well. in addition to that learning in japan helped me to create network of friends every where in Japan.	International Christian University, where I study in japan is really a great place for any student who like to explore world. It is definitely an International University with lot of students and staff from all over the world. It provides you an open space to learn anything you want to learn. Academic staff is highly professional and unbelievably flexible. It is really enjoyable and valuable opportunity as wecan subject matters in different view points
3	IUJ	Y	I have developed computer usage for decision making with public policy modeling course and use of computer programme (STRATA) to analyze data	-	Y	I have developed the skill to finish work day by day and to help others even in same position to get through barriers. The responsibility to work on time and desire to work hard	-	Japan is very friendly country to Sri Lanka and the Japanese are more kind	To get experience in diverse cultures and to have a global network
4	IUJ	Y	The skills of analyzing micro and macro level issues, effective communication skills like presentations, IT skills as using econometrics for analyzing data and inter- personal skills were developed.	-	Y	A person who is expectation is to learn has so many opportunities to get developed their attitudes and discipline. politeness, punctuality and dedication for service etc. are very good lessons for developing nations that can be easily get from Japan. If there is a rewarding system to select people who have achieved those expected attitudes etc. that would encourage others too.	-	An Asian country which has raised to highest level with using correct management strategies, technology and international relations. Japanese experience is very much related to our context too.	Diversity of students. I could learn about many cultures and have relationships with many people in many countries.)lease comment in this column.
5	IUJ	Y	using computer is increased the knowledge of computer and analyzing the information through some software is increased	-	Y	efficient and effective work, Sincerity, punctuality and respect others.	-	Japan is developed country. learn about system in Japan	International students are here
6	IUJ	Y	Macro Economics and Statistical Analysis	-	Y	Time Management, Team Working, etc.	-	Very Good	Good
7	IUJ	Y	knowledge about information technology	-	Y	responsibility, broad thinking in policy formulation	-	Broder diversity, multicounty experience, Building up international relation	prominent lectures ansd coverages developed curriculum, real application , easharing experience.
8	IUJ	Y	By the knowledge and skills that acquired and it will help to improve my work effectiveness	-	Y	can face the challenges in a positive way, because, I am sound with knowledge.	-	efficiency and time management.	knowledge and skills of very talented and enthusiastic resources panel
9	IUJ	Y	To great extent, By some program that I studied, By Improving my English speaking skills, Specially by studying discipline, behavior and attitudes of Japanese people	-	Y	To a great extent, specially by studying discipline, behavior and attitude of Japanese people	-	Actually it is a great advantage for me	to some extent
10	IUJ	Y	By the way of analysis a problem through the knowledge I gained	-	Y	can face the challenges Confidently and positively because my attitude toward work is improved	-	time management and hard working.	knowledge and skills of very talented and enthusiastic resources panel
11	広大	Y	I learnt institutional policy design and how to analyze the policy and how to develop a better policy.	-	Y	I learnt to work towards organizational mission and vision and how to organize my work to achieve it.	-	We can understand different culture and different people.	We can learn among different specialized area from different countries..
12	広大	Y	it improve my analytical knowledge technical working skill specially econometrics.	-	Y	improved my confidence to do new and crate things related to my job	-	very good place to study	-
13	広大	Y	In research skills; understanding empirical research done in the field of economics and doing empirical research	-	Y	Getting more and more information in decision making, being punctual and responsible in any job assigned with positive mind.	-	There are enough human and physical resources especially with enough time	-
14	広大	Y	In Research, it uplifted my econometric knowledge in some extent and managing data via eviews software	-	Y	as mentioned earlier, the knowledge of e-views and econometrics can be used as a decision making tool in my career.	-	the exposure on developed country becomes knowledge in many aspects in addition to formal education.	when I compare my experience with others who study at Tokyo and Neegatha, the research activity is highly dominated in this university. it is more valuable for me.

2-(1) As a result of participation in JDS Program, do you think you will acquire enough knowledge which can be utilized in your work?			2-(2) Do you think the content of your academic research appropriate in order to tackle the development issue (i.e. the regional development, correction of regional disparity, measure of poverty alleviation and regional autonomy) in your country?			2-(3) Do you have good communication with your professor(s)?		
No.	2-(1)-i	2-(1)-ii	2-(1)-iii	2-(2)-i	2-(2)-ii	2-(3)-i	*comment	2-(3)-ii
1	Y	Punctuality, Immediate response in the work, reduce of Human power(usage of machineries). I will utilize or apply these techniques in my organization	-	O	it may useful to measure the hardships of the female headed households especially in the war affected area and their empowerment. It is very important issue in the development	Y		For my academic knowledge enhancement as well make me as real academic person
2	Y	During my academic life I followed a lot of courses highly related to my job. In addition to that I learned to see problems in different view points which will be very useful in my future work.	-	Y	I am doing my research on the Microcredit institutions of Sri Lanka. As a developing country microcredit plays a huge role in poverty alleviation. Therefore I believe that my research will help to tackle a development issue in my country	Y		The class size of the ICU is comparatively very small and we have very good relationship with our professors
3	Y	Knowledge on subject matter like economy, policy development and decision making. Also to understand different persons necessities and working together with different people Please comment in this column.	-	Y	According to the recommendations in my research it help to speed up the current licensing process and there by help to improve international trade. It will directly give positive results in national economic development	Y		Every problem in my academic life I solve with the consultation of the professor
4	Y	Some lessons are not directly involve with the current work. But as policy makers those knowledge is very important to take effective policies.	-	Y	I could gain a good knowledge on how to do a research and analyze data. This can be applied in my country.	Y		This is needed to have a good knowledge.
5	Y	Not fully but I have learned about management concepts and local government setup in different countries. this will make to move in correct path in my work	-	Y	Because I am measuring the customer satisfaction in the service delivery of the Divisional Secretariats. I will find some improvement in the quality of delivering services.	Y		I meet my supervisor every week and other supervisor for other subjects we are meeting apart from the class time.
6	Y	Being part of an international community itself I acquired a lot of knowledge and skills	-	O	Still I am working for the research study, Resulted still unpredictable	Y		Being teaching Assistant for Microeconomics and being events organizer, I have a good rapport with professors
7	Y	strategic thinking in policy formulation	-	Y	yes my research is modernization of public procurement policy in srilanka at least some what I have captured the real issues related with that and would be most suitable. when i apply part of its finding to our country development	Y		for my research progress in right direction it is very much essential to have good contact. apart from professors are very kind in order to clear the course problem I need to communicate
8	Y	it couldn't specify into limited area. overall knowledge definately helpful.	-	Y	-	Y		-
9	Y	To great Extent, I followed some core and elective courses that are related to my duty in Sri Lanka. Those are very useful for me. Specially I can get more knowledge regarding my research.	-	Y	My research is a very practical issue for my province (solid waste management). I think I can get a vast knowledge from Japan about this matter. Not only this but also other practical knowledge that I gain in Japan will be very useful for tackle the future development issues.	Y		specially my research
10	Y	I acquired technical as well as practical skills for utilization of my work.	-	Y	-	Y		-
11	Y	My research can be directly applied to improve the solid waste management in Kalmunai, Sri Lanka.	-	Y	It will contribute to clean development mechanism and low carbon society.	Y		Communicating over the email and advice and feedback from professor.
12	Y	it's very related my work and it will improve my job performance.	-	Y	My research directly related to Farming community and production in Sri Lanka	Y		-
13	Y	I think that I can contribute in making decisions for economic development of my country with a better understanding of the local economy and the global economic trends. .	-	N	My academic research can contribute to achieve growth targets of my country according to data before the country became a low-middle income economy and before the country achieve peace, defeating terrorism. Currently, economic status of the country is changing rapidly due to peace and more investment. I think, therefore, I have to gain more knowledge and update the knowledge in order to tackle future development issues. The academic research and related activities done here provided me a powerful background for my future work.	Y		had to show my performance and make sure my works were correct with his vast knowledge. Also I communicate with him at the seminar on economic development.
14	N	-	subjects are more theoretical. it does not try to make a bridge with practical knowledge. most of the subjects were based on revisions.	O	actually, my research focus on development issue in macro economy, but it does not address any regional matter.	Y		-



	2-(4) What kind of trouble in terms of academic work, if any, have you encounter throughout academic life?			2-(5) Has the support from your university in terms of academic work been enough and why? In what way do they need to improve?		2-(6) Do you have any advice in terms of academic work for future JDS Program Participants?	
No.	2-(4)-i	2-(4)-ii	2-(4)-iii	2-(5)-i	*comment	2-(5)-ii	2-(6)
1	No any trouble encountered by me so far	Everythings are perfectly designed and carried-out by academic staff	-	Y		I am receiving enough supports for my academic work from the university management	Work hard and Study well by using the facilities of the university
2	none	-	-	Y		We have very good facilities in this university and the academic staff is also highly capable	Always keep close contacts with your professors as well as with your colleagues
3	difficulty to understand some areas in some subjects	due to less mathematics knowledge	I improved my mathematics knowledge with the help of colleagues, seniors, teaching assistants and library books	Y		they are providing teaching assistants and faculty also every time prepared to help	Better to improve the mathematical background
4	Some courses contain mathematics and complex statistics areas. It is sometime difficult to follow speedily to a person who do not have sound knowledge on them.	-	By attending teaching assistants and discussing with friends.	Y		We too have to dedicate for work.	Some times new subject areas that have not studied, international community, new challenges of adjusting to different climatic seasons, managing activities here strengthen you and your capabilities.
5	lot of readings	I am not familiar in the field of reading and they are giving around 100 pages for reading and i am poor in in English also It is very difficult to catch the points from the readings	I somewhat managed	Y	They need to consider our own countries way of teaching pattern what we had before come here	certain extent they are giving support in terms of the study	They need lot of mathematics for IDP and PMPP in first year. before come here if they are not from the mathematics background they have to familiar with some basic concepts in mathematics and economics
6	No academic Problems	-	-	Y		-	Sri Lankans are so far doing well
7	many assignment s in each subject , so much reading increases the load	due to the curriculum set up	managed to comply	O		the course works for the core subjects are to be reduced	in order to cope up with the current situation in the academic studies get the help of seniors, solve the problem as group make the good relationship and enjoy all the event s this would reduce the pressure.
8	inapplicable	-	-	Y		I think, IUJ is academically strong and professors are highly talented, dedicated, committed and very well supported.	-
9	-	-	-	Y		-	-
10	-	-	-	Y		I think, IUJ is academically strong and professors are highly talented, dedicated, committed and very well supported.	-
11	Collection of primary data in Kalmunai was very hard to me.	The public cooperation is very hard in this area..	I solved the problem with the assistance of Professor and Divisional Secretaries.	Y	Financial assistance for data collection.	Incentives for the participants in the household survey.	Availability of quality data relevant to the research is important.
12	-	-	-	-		-	it is useful to have previous basic math's course
13	Nothing special.	-	-	Y		I had enough resources and help from academic and other staff.	It is better to give more chances to share knowledge and experiences with Japanese students.
14	no trouble	-	-	Y		-	if possible, practical knowledge - for instance, how other countries has tackled some development issues and how about the successive experience given by japan- should be included.

	2-(6) Do you have any advice in terms of academic work for future JDS Program Participants?	3-(1) How is your daily life in Japan?			3-(2) What kind of trouble in terms of daily life, if any, have you encountered in terms of daily life?
No.	2-(6)	3-(1)-i	*comment	3-(1)-i i	3-(2)
1	Work hard and Study well by using the facilities of the university	1		Number of places are available to visit and enjoy around Tokyo	The communication problem encounter almost every places (specially in the shops)
2	Always keep close contacts with your professors as well as with your colleagues	1		It is completely a new and enjoyable experience for me to live in Japan. Japan is very peaceful country so that anyone can enjoy their life to the fullest here. There are so many new things that you can experience.	The only trouble that I faced during my stay in Japan is mostly due to my poor ability in using Japanese language. Even though it is not a problem in ICU, when you go out you need lot of Japanese . There are very few places that provide services in English language
3	Better to improve the mathematical background	1		I have every thing I need to spend daily life happily	no
4	Some times new subject areas that have not studied, international community, new challenges of adjusting to different climatic seasons, managing activities here strengthen you and your capabilities.	1		Could go many places in Japan, experienced changes of seasons and learnt to lead a very simple life.	Communication in Japanese language, harsh weather conditions.
5	They need lot of mathematics for IDP and PMPP in first year. before come here if they are not from the mathematics background they have to familiar with some basic concepts in mathematics and economics	1		Because of tight schedule academic works we are not able to do all the extra activities. we always focus about our studies.	snow and terrible cold and communication problem
6	Sri Lankans are so far doing well	3	IUJ life is not enjoyable, But I know Japan is an enjoyable place	The location of IUJ is far away from cities. It is very costly to reach enjoyable places. Moreover, GSO of the university always doing same routine activities to make poor and staled happiness	Winter is terrible especially for off campus residents
7	in order to cope up with the current situation in the academic studies get the help of seniors, solve the problem as group make the good relation ship and enjoy all the event s this would reduce the pressure.	1		-	-
8	-	1		-	only the language problem
9	-	2		This is very isolated are in Japan. If we are in around Tokyo or other urban area, It will be great opportunity for enjoyable life. I would like to visit many are in Japan. But I must spend lot of money to visit some area from here, specially for travelling and accommodations. If we are in around Tokyo, we do not need such expenses. As well we can get lot of Japanese experiences if we could have in urban area.	Travelling problems, No good shops for getting foods or other thing around this are. JICE do not allow for driving, so we have lot of trouble in daily life. Our families also not happy with this life.
10	-	1		-	Nothing
11	Availability of quality data relevant to the research is important.	1		Freedom to move, better transportation service, and well organized shopping..	Language restrict communication.
12	it is useful to have previous basic math's course	1		-	little bit difficult to communicate
13	It is better to give more chances to share knowledge and experiences with Japanese students.	1		All facilities related to academic and day today life are available and I enjoyed with a very safe environment without pollution.	Nothing special..
14	if possible, practical knowledge - for instance, how other countries has tackled some development issues and how about the successive experience given by japan- should be included.	1		-	-

No.	3-(3) Has the support from university in terms of daily life been enough?				3-(4) Do you have any advice in terms of daily life in Japan for future JDS Program Participants?	4-(1) Do you think the support and coordination by the Agent before and during your stay in Japan satisfying? 1.Satisfying/2.Not satisfying/3.Others		
	3-(3) -i	*comment	3-(3) -ii	3-(3) -iii	3-(4)	4-(1)-i	*comment	4-(1)-ii
1	2		University provides Japanese language classes and advises to manage the daily life which are not enough to manage daily life	If they help to get the communication services such as mobile phone and internet for the individual usage in the apartment that would be better	Pleade learn Japanese language to use in your daily life	1		-
2	1		They are always there for us to help	If the university provide more information on daily life in Japan it will more helpful.	It is very useful if you learn Japanese.	1		-
3	1		-	-	If future participants can have knowledge more on Japanese it will be an advantage	1		-
4	1		all the facilities are given.	-	Sometimes it would be a challenge. You should have courage to face any situation. That is also a good lesson.	1		They have progressive meetings and always look about our needs and good supervision is done.
5	1		they are doing their best	-	they need to prepare for snow they need to familiar at least certain extent with the language	2		we want to buy lot of books, their allowance for books are not enough. when we go to do our survey JICE did not pay for the survey. We want to pay the cost accompanying with the cost of the survey. further for travelling air tickets also are not provided by the JICE. From Japan to Sri Lanka I will cost around 0.15million Yen for return. It is unfair
6	2		If university located in a area where is having enough public transportation, our family members can use them on our own expense. In this area we are very helpless as we are Indirectly discouraged to be out from university transportation for family members.	If we are given perdition to drive a light vehicle, we need not to depend on university transportation.	Please give them more chances to apply for universities in urban areas	-		-
7	1		-	-	you need to prepare in advance in some places which you are going to select for your higher studies	1		-
8	2		IUJ administration have some rules, which are demotivated our daily life. If one time we leave dorm and move to outside apartment, they are not allowed to come back to the dorm again. as a basic requirement of a human, we like to live with our family. if we bring our family here, after returning them to home country IUJ administration not allowed to come to the dorm again, though there are available rooms. i think this kind of rules, discourage not only our day to day life, but also our academic life. .	I think this kind of strict rule should not be applied to the graduate school.	-	1		-
9	3		To some extent	Travelling facilities is not enough specially for weekends	JICA must consider about the universities. In the future, please provide universities in urban areas	2		Murakami-san is not doing his job well. He always think we are as slaves. He is very bad guy. please provide other coordinator for IUJ
10	1		-	-	-	1		-
11	1		All the facilities provided are good.	-	Learning Japanese language and bring your family to Japan and enjoy the academic life and daily life in Japan.	1		All the support and coordination are well.
12	1		-	-	Better to learn Japanese Langue	1		-
13	1		-	-	To learn Japanese	1		-
14	3	JICE committed on daily life, not the university.	-	-	-	1		-

	5-(1) Do you have intention to diffuse your knowledge you acquired in Japan to your colleagues?			5-(2) Do you think the capacity of your organization will improve as a result of sending you to Japan?			6-(1) How are you going to utilize the network you have acquired in Japan in your work (ex. Network with professors, friends, and Business person)?
No.	5-(1)-i	*comment	5-(1)-ii	5-(2)-i	*comment	5-(2)-ii	6-(1)
1	Y		Through training, chatting and changing (organization environment) with my experiences	Y		I will apply my knowledge, experiences and some of the management techniques which gained in Japan in my organization	I will create very efficient network between organizations and the staff which will help everyone to know changes and updates of organizations immediately
2	Y		I can conduct presentations about things I learnt here. Both academic and personal life	Y		As a responsible government officer I can share my knowledge that I have gained from Japan both with my co-workers and with my colleagues.	As I have acquired a good network in Japan I hope that I can get their cooperation for my work back in my country
3	Y		I share my experiences and knowledge during decision making process in various official meetings	Y		the decisions taken by me are important to develop the current processes and there is a direct development of administration with my decisions as a middle level manager	I use my net work to solve various problems in different subject areas and I get my network friend support to solve them. Also when I have such opportunity I help them.
4	Y		In meetings, training programs I can share my experiences with colleges and subordinates too.	Y		I have acquired new knowledge and I have Japanese experiences which could be applied accordingly.	I can contact professors here through electronic media and when I do a study there I can get advices and share my experiences with them. relationships with friends in many countries would be important to me to have a good network in my organization according to the situation.
5	Y		through individual presentations, group discussions and discussions in the class	Y		improve in English knowledge	we have email contact with professors and colleagues and some of them are in our social web sites. we can share our experiences and problems through these social medias..
6	Y		I am going to work as a trainer for provincial public officers. Therefore I can use my knowledge gained in Japan to train others as well	Y		Because, we found many answers for our common development problems. Implementation of them as it is, may difficult. But we can come up with some models at least	I found different people from different nations who are good for certain issues. Whenever, I am having a dilemma, I can consult appropriate Pearson by Skype or Email for their support. And also I am going to form a Facebook group to share common development issues with selected people.
7	Y		by acquiring new knowledge, attitude and skills improvement	Y		-	it will be very helpful for the future correspondence in my field and further studies. Multi country friendship will help me to up to date about the changing world
8	Y		-	Y		-	through mails and alumina try to retain this relationship
9	Y		As a middle level manager I can do it in different ways, for example by policy making, by training, by technology improvement, by attitude changing etc.	Y		I have a dream that development of my city as Japan's city. After my graduation, I'll do it anyhow. Surely you can proud of it	At the moment I have an excellent friend list, so I can keep this network for my life time.
10	Y		-	Y		-	By maintaining relationship through mails and by taking information when needed
11	Y		Developing better relationship among the public and government and making aware the problem and way of solving the problem.	Y		The individual capacity improvement will have a significant impact on the organizational capacity. Capacity improvement is a long term process. It needs to be improved continuously.	by sharing the knowledge and experience among each other over the share point system or Facebook.
12	Y		they will learn working with me hand i have plane to train some officers under me.	Y		it can directly apply my office work	i met friends in IDEC from different countries. so we can share our experience and new knowledge
13	Y		When ever we make decisions, when they ask questions or clarifications on related matters	Y		I think that now I can perform duties more successfully..	In future researches, exchanging experiences regarding economic issues, and maintain good friendship that is important in maintain peace in the Asian region..
14	N		-	Y		-	so far, no exact idea